神速果断のシャープネス（新）

一撃必殺！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神速果断のシャープネス（新）

【Ｎコード】
Ｎ８９９２Ｍ

【作者名】
一撃必殺！

【あらすじ】
産まれる事さえ罪であり、死してなお忌まわしき存在『シージペリラス』。
災厄の星に産まれた少年・シーグは、姉代わりの少女の遺産を受け取るため、自分を励まし力づけてくれた少女に会うために魔術都市メティスへと向かう。
しかし聖域として完成しつつある魔術都市は、呪われた容姿のシーグを決して許さなかった。
異能の力と神秘の品を持つ魔術師に対し、シーグはあまりにも無力

に思えたのだが……？

1章　命取りの座

死神（サムハイン）の日に産まれた子どもは世界を滅ぼすと言い伝えられている。

一年最後の日であるサムハインには、すべての境界が揺らいであいまいになる。死者の国が最も近くなり、呪いが常世に舞い戻るのだ。この日の夕焼けは決まって血のように赤く、空に輝く変光星・竜眼が天頂から地上を睨みつけ、悲鳴のような強風が吹く。

このような不吉な日に漆黒の瞳と乾いた血色の髪という死の印をもって産まれれば、死者の呪いが具現した子どもに違いない。

不吉の子どもは『命取りの座（シージペリラス）』と呼ばれる。

生まれると同時に忌み嫌われ、その死さえも災厄の始まりと恐れられ、封じられるのが常であった。

＊

「リーザ姉さん」

少年は舌たらずで陰気な声で問いかける。今年で１０歳になるが、痩せた体つきと猫背な姿勢のために3歳は年下に見える。骨と皮だけの両手足は今にも折れそうだ。大人なら片手で持てそうな水晶玉を、両手で支える事さえ危なっかしい。落ち窪んだ目元にこけた頬、黒みがかった赤毛はボサボサである。日没も迫り薄暗くなった部屋の中で、少年の姿は魔境に現れる幽鬼のように見えた。

彼がシージペリラスと聞けば、誰もが納得する外見である。

「ねえ、水晶玉はどこに置いたらいいの？」

「窓ぎわにおくのよ」

少年とは対照的な明るく陽気に少女が答えた。

「星明りが届くようにカーテンは開いて、窓は指の幅だけ開けてね」

十代も半ばの黒髪の少女は大きな瞳をクルクルと動かし、首をきょろきょろさせている。部屋中を身軽に動き回る姿が野原を元気に駆けるウサギを連想させた。

「あっ、シーグ。椅子を使わないとダメよ。無理に背伸びして倒れたら危っ！」

ガタンという音と共に途切れた声。シーグが振り返ると、戸棚の横でリーザがかがみ込んでいた。「痛くない、痛くない」と目に涙を浮かべながら足の小指を押さえている。

「平気？」

「い、痛くないわ大丈夫……ううぅー」

勢いよく立ち上がったリーザは最後まで言えずにうずくまった。リーザが蹴飛ばしたのは手のひらほどの厚さで一抱えもある白大理石の円盤だった。綺麗な模様に不思議な文字が描かれており、ひと目で魔法の品だと分かる。

ずいぶんと離れた場所に移動しているので、そうとう激しくぶつけたに違いない。

「元の位置に戻さなくちゃ」

リーザは円盤に向かって手を伸ばす。必死の表情と懸命な様子が悲壮な遭難者のようだ。見かねたシーグは円盤を手にとった。重すぎて持ち上げる事ができず、転がしながらなんとかリーザに手渡した。

「ありがとう」

満面の笑みを浮かべたリーザは、慎重に円盤を元に位置に戻している。足の痛みはもういいのだろうか、とシーグは不思議に思った。

「ねえ、シーグ。今からこの部屋で魔術を使うの。だから、部屋のものを勝手に動かしちゃダメよ」

リーザは眉をしかめて低い声を出した。厳しい表情で言い聞かせているつもりだろうが、シーグには困っているようにしか見えなかった。

「指の幅でもずれていたら、何もかも台無しになるんだからね。わかった？」

人差し指を立てて教師のように説明している。シーグはゆっくりと部屋を見渡した。窓枠の両側には、五芒星をかたどった札が貼り付けてある。

「星の模様が片方だけ反対だったら？」

「絶対にダメよ。魔術では位置と方角が大切なの。特に日没には注意しなくっちゃ。魔術の本質は光と闇だからね」

リーザは自信ありげに窓を指差す。東の空は加速度的に暗くなっ

ており、すでに星が輝き始めている。
辺境の森林地帯が領土の大半を占めるレイザーク王国は、空気が澄み渡っていて星の力を受けるのに最も適した場所であるらしい。

「もしも護符の方向が逆だったら？」
「位置がずれてるだけでもダメなのよ。そんな初歩的な間違いをしたら、何もかも台無しになるわ」
「じゃあ、これは大丈夫なの？」

シーグは上下があべこべに張られた二枚の札を指差した。

「あ……れ」

リーザはきょとんとした。首をかしげ、目をまん丸に見開いている様子はまるで巣穴を失った小鳥のようだ。

「それに、日没はあっちだよね？」

リーザは首をカクンとかしげて、シーグの指差す扉側を見る。ドアの間から見えるのは、夕焼けの鮮やかな赤色だ。リーザはしばらく動きを止めて、
上目遣いでシーグを見る。

「あは？」
「……」
「いやーはっはっはー！　……はぁー」

リーザは全身でため息をついてうなだれた。床に人差し指で円を何個も書いているが、魔法陣ではなさそうだ。

「私ってば、魔術師失格よね」
「そ、そんなことないよ」

目端に涙を浮かべたリーザをみてシーグは懸命に言葉を探す。

「ええと、まだ日は沈んでないから。やり直せるんじゃないかな？」
「それもそうね」

当てずっぽうでいうと、リーザはすぐに立ち上がった。軽やかな足取りで窓の札をはがして、扉の両側に貼り付ける。

「完璧。よくできました」

先程の落胆もどこへやら、リーザは満足げに何度もうなずいている。

はたして本当に大丈夫なのだろうか。シーグは不安に襲われたが、魔術のことはまるで分からない。

扉から差し込む夕日は部屋の奥まで届いた後、急速に明るさを失ってゆく。闇が深くなるにつれ、水晶球が銀色に輝き始めた。まるで星が地上に降りてきたようだ。

「ほら、フィーちゃんよ」

リーザに背を押されて、シーグは引き寄せられるように窓際に歩いていった。水晶玉の光はますます強くなり、可憐な少女の姿を映し出す。

薄い金色の髪は太陽のように明るく、碧色の瞳は宝石のようだ。レースのついた純白のドレスよりも少女の肌はずっと白い。星の輝く闇を背にしているせいもあり、少女が光だけで出来ているようにも見える。

物語に出てくる妖精とは、きっとこんな姿だろうとシーグは思った。

「サフィリアです。お久しぶり、シーグ。元気にしていましたか」

少女は優しげな微笑を浮かべ、水晶を鳴らしたような心地よい声で語り始める。

「メティスではまだ肌寒い日が続いています。山の上にある都だから夏はとても短くて草花の種類がとても少ないの。レイザークでは春の始まりに咲く花が、ようやく蕾を開き始めた頃でしょうか？」

サフィリアはシーグと同じで１０歳になる。しかし、落ち着いた態度や川のせせらぎのような口調が少女をずっと大人に見せていた。

「リーザから剣の訓練を始めたと聞きました。それに倍も体が大きな相手に勝ったとも」

相手が大きかったのではなく、シーグがやせっぽっち過ぎただけだ。しかも、油断しているところに不意打ちで飛び込んだだけのこと。取っ組み合いになって、驚いた相手が偶然に剣を離したに過ぎない。

戦闘というより喧嘩の延長に過ぎないとシーグは思う。少なくとも物語の中で描かれるような格好のいい勝利ではない。

そんなことを考えていると、サフィリアは少し厳しい目つきになった。

「勝利は勝利です。それも、あなたが努力して勝ち取ったものです。絶対に自分を悪く見てはいけないわ」

水晶球からこちらは見えていない。それなのに、サフィリアはシーグの内心をずばりとついて来た。

「予言を理由にあなたの国と生まれを悪く言う人は多いけど、そんなものには決して負けないで」

災厄の日に闇の地に現れ、血の色を持つものは破滅の先触れ。世界を滅びに導く命取りの座（シージペリラス）である。

破滅の予言はそう詠っているのだ。

「元々予言の内容があいまい過ぎます。闇や血の象徴なんてほかにいくらでもあるし、命取りの座（シージペリラス）が人であったことも、国であった事も、宝石であった事もあったとか。もともと予言の内容がいい加減で、後になってから理由付けにされている事もあるの。だから、私はこの予言はシーグを指すものではないと考えています。」

早口でシーグには言っている事の半分も理解していなかった。だけど、サフィリアが自信を持っていうなら信じよう。ほかの誰がどう思っても構わない、そうシーグは思った。

「もし本当にこれから世の中が乱れるなら、あなたが世の中をよく変えてゆけばいいの。いずれ、あなたを酷くいう人はいなくなるわ」

サフィリアは口を閉じて、姿勢を正した。その後、チラリと斜め下を見た。「ええと……」とつぶやきながら、目線を左右に泳がせる。絹のように白い頬がわずかに赤くなった。

「私はずっと塔の中で本を読んでばかりなの、リーザが話してくれる外の世界の話やシーグの手紙が待ち遠しいわ」

サフィリアは少し砕けた口調になり、びっくりする位の早口になった。

「来年に私は塔の中から出られるの。秋の終わりになるから、シーグの誕生日に間に合うと思うわ。だから、一緒に――」

サフィリアの言葉は途切れ、水晶玉は力尽きたように光を失った。真っ暗になった部屋の中でシーグは水晶玉から目を離さない。再び少女の姿が浮かび上がるのではないかと、信じているようだ。

しかし、その期待を打ち切るように背後で光がともる。リーザがランプに火をつけたのだ。

「ちょっと時間が足りなかったみたいね」

水晶玉が機能する時間は死神の日（サムハイン）の日没の後、百を数える間だけだ。しかも一方的なもので、シーグからは言葉も姿も伝えられない。

「フィーちゃんは、きっと落ち込んでいるわよ」

「なんで？」

「だって言いたいことが途中だったもん」

「失敗を悔やむことはないって。そう言っていたのは、サフィリアだよ」

「それでもよ」

リーザは人差し指を立てて断言する。シーグは目を丸くした。しっかりしていて、迷いなど無く、自信たっぷりに話す少女がその程度で落ち込むなど信じられない。

「フィーちゃんが何が言いたかったか、分かる？」
「外の世界を見たいんだと思う。ずっと塔の中にいるから。ここにきてくれた時に、道案内をしてあげたら喜ぶと思う」
「正解、よくできました」

リーザが勢いよく何度もうなずき、ランプも一緒に危なっかしく揺れる。二人の影が部屋の中で忙しく動きまわる。物語に出てくる影の怪物のようだった。

産まれながらに魔術師であるサフィリアは、魔術都市から一歩も出ることができない。最高の魔術師になるために、時間のすべてを費やさなくてはならないからだ。塔の暮らしは厳しくて、決められた食物や清められた水しか口にできない。決められた本だけを読み、口に出してよい言葉や、聞いてよい言葉さえも細かく定められている。

サフィリアは、すべてが管理された自由のない生活を送っているのだ。水晶玉でのやり取りや、シーグからの手紙は例外中の例外なのである。

「手紙に気にすることないって書くよ。いつかレイザークを案内してあげるって」
「感心感心。さりげなく女の子の失敗をフォローして、堂々とエスコートするのが立派な紳士というものよ」

リーザは目をつぶり、人差し指を大きく振りながら断言する。ランプの火が更に大きく揺れて、とうとう火が消えてしまった。

「え、何？　あら、ひぇっ、うっきゃー！」

真っ暗な部屋に間の抜けた悲鳴と、派手に転んだ音が鳴り響いた。少なくともこんな悲鳴を上げるリーザは立派な淑女ではない、とシ

ーグは思った。

それから、ちょうど一年後。シーグとサフィリアの願いはかなう事は無かった。

死神の日（サムハイン）、異界がもっとも近くなる不吉の夜に魔境の怪物がレイザークを蹂躙したからである。

命取りの座（シージペリラス）が生を受けたのと同じ日にレイザークは滅んだ。王都は壊滅し国土は怪物のうろつく魔境地帯と化している。破滅の予言は真実であった、と魔術都市メティスの公文書には記された。

王都へ続く街道は『死の道』と名づけられた。穢れた鉄の王国から世界は錆びるように滅んでゆくのだと、メティスを統治するグラムファーレ家は諸国に警戒を呼びかけている。

1章－1　的外れの激怒

魔術都市メティスは、剣のように切り立った険しい山脈の内側にある。

都市の周囲に壁のようにそびえたつ山肌には白い曲線がいくつも走っている。それは地面が動いて一枚岩の地層を押し出し、山脈を作った証拠なのだ。

シーグは馬車に揺られながら、リーザに教えられたメティスの風景を確認していた。

もっと詳しく教えてほしいとせがむと、リーザは人差し指を教鞭のように振りながら説明してくれたものだ。地層がどういうものかよく分からない、と答えるシーグに対してリーザはお茶の時間まで待つようにと言い渡した。

「本当にチョコレートケーキだな」

リーザの説明を思い出し、シーグは苦笑した。リーザは地層の勉強と称してケーキを十個も持ってきたのである。口元にカステラの生地をつけ、フォークでケーキをつつきながら「白い曲線の正体は石灰岩（チョーク）　なのよ」と説明してくれた。

確かに魔術都市を取り囲む山肌は褐色であり、チョークの層はクリームのようだ。リーザがケーキを切って皿の上に作った地図とよく似ている。

「これは勉強なんだからね」と、何度も念を押していた。しかし、腹いっぱいにケーキを食べるのが一番の目的だったのだろう。

死神の日（サムハイン）　にレイザークが滅んで3年半になる。シーグは１６歳

になったが、童顔のために実際の年齢よりもずっと幼く見られる。年を経るごとに黒い毛が少なくなってゆき、今では燃えるような赤毛だけになっている。代わりに瞳の色は黒さを増していった。闇と血の象徴はそれぞれ色濃くなっており、命取りの座（シージ・ペリラス）に更にふさわしくなったと言えなくもない。

背丈は人並みだが、細身の体つきのために遠目には女性に間違われる事さえもあった。身につけている武装も皮の胴着に細身の剣や短剣だけである。そのため、女の武装だと言われ物笑いの種によくされる。師のロディウスも、事あるごとにガリッポソのシーグと笑い飛ばしている。『こんな貧相で軟弱な奴が戦士を名乗るとは。ふざけた世の中になったものよ！』、そう嘆いてあきれ果てたといわんばかりに首を横に振りながら続けるのだ。

『才能のかけらがないだけならともかく、始終不機嫌で陰気な面をしておる。覚えが悪いにとどまらず、教える気持ちまで消沈させてしまうとは。なるほど、お前の才能というのは弟子になるのに全く向いていないという事だな。この世のいかなる道理によって、ワシがお前の師匠になってしまったのか！』

「何か腹の立つ事でもありましたか？」

「あ、いや」

隣で馬車を操るレンダに問われ、シーグは苦笑いをしながら頭を押さえた。師匠の言葉を思い出しても、いいことなど何も無いのに。

レンダ・マイルズはメティスへ交易にやってきた商人である。毒草を食べた馬が倒れているところに通りかかり、解毒を助けた事からメティスまで馬車に乗せてもらっている。おかげで旅はずいぶんと楽になった。

前方では、見上げるほどの高さの堅固な城壁が、山肌の切れ目をつなぐように行方を遮っている。強固な岩壁と城壁に守られた天然の城砦、神秘の力に守られた魔術都市は難攻不落と詩人たちは詠う。

まっすぐと伸びる白い石畳が城門まで伸びていた。シーグは長蛇の列に並び、都に入る順番を待っていたのだ。

「コケおどしだな、これは」

シーグはため息のようにつぶやいた。

山は険しいが、城門まで一つも関を築いていなかった。道はまっすぐで整備されすぎている。

旅をするには申し分ないが、これほど軍勢が攻めやすい都は他にないだろう。

そして、城門が小さすぎる。輸送のための荷馬車が出入りするにも困難なので、城門の前が混みいっているほどだ。敵の進軍をとどめると同時に、すきあらば全開して城内から兵を出すのが城門である。あの小ささでは軍事的に何の役にも立ちはしない。

城門には白大理石の柱が立てられ、精緻な彫刻が施されたレリーフで飾られている。太くどっしりとした柱は、見るものに威圧感さえ与える。

だからこそ、見掛け倒しの城壁だとシーグは思う。城壁に面して何本も木が生えているし、城壁は良く見るとあちこちが欠けて突起している。

「その通りとは思いますが、お偉方というのは本当のことを言われると不機嫌になります。目立つ行動は控えましょう」

レンダが小声で注意した。

「城門で騒ぐと、不吉が舞い込むと魔術師は勝手に信じこんでいます。ほら、みんな一言もしゃべらないでしょ？」

商人の言うとおりに誰一人として口を開かず、馬さえもいななきを押さえている。馬と人の足音と、馬車のきしむ音だけが不気味に鳴り響くだけだ。沈黙したまま列をなす群集は、死者の列のようで不気味である。

「他にも魔術都市には、奇妙奇天烈な……おっとっと、言葉が過ぎましたね。えーとつまり、変人じみた思考や習慣があるので気をつけて下さい」

レンダは小さく舌を出して警告した。言い直した方が余計に言葉が過ぎているのは、わざとだろう。

道は混雑しているのに、街道の片側を空けているのも変な習慣なのだろうか。

「ほら、呼んでもないのに巡回の魔術師が来ましたよ。人形のように大人しくしていましょう」

レンダは笑いをかみ殺した後、仮面のように無表情になり、時が止まったかのように身動きを止めた。

城門から出てきたのは、二頭立ての戦闘馬車（チャリオット）だった。もっともあちこちに貴金属の飾りをあしらっているし、全体的に細すぎる。戦場よりも美術館に相応しい繊細な造りだ。

チャリオットの長椅子に偉そうに座っているのは小柄な男であった。キョロキョロと周囲を見回し、いらいらと手元を動かしている。白いローブをまとい、真紅のマントをこれ見よがしに広げていた。

あれだけ大きくては歩く時に邪魔になって仕方がないだろう、とシーグは思った。

ゆっくりと進む魔術師のチャリオットのせいで、道の片側が完全にふさがった。誰も何も言わないが、人々から無形の怒りが湧き上がっている。

それなのに赤マントの男は、尊大な態度のまま見下す視線で人々の列を眺めている。左右に黄色ローブ姿の取り巻きを従えているので、更に偉そうに見える。

「何様のつもりなんだ？」

「俺様は魔術師様、のつもりでしょう。メティスでは珍しくありませんよ。彼は隕石の強撃（メティオ・スマッシャー）のイッサ・ホコブズ。見た目の通りに尊大で、名前の通りに破壊好きな男です。私たちは、『走るハタ迷惑』と呼んでいますよ」

レンダは口も表情も一切動かさずに答えた。腹話術の心得まであるようだし、徹底した無表情ぶりは人形の役もこなせそうだ。怪鳥のように悪趣味なマントを羽織った魔術師よりも、こちらの方がよほど謎めいて見える。

ゴホゴホと咳き込む音が聞こえてくると、赤マントは片手を挙げて馬車を止めた。シーグの前にいる馬車には子連れの夫婦がいて、１０歳くらいの男の子がせきをしているのだ。

赤マントが目で合図をする。取り巻きの黄色ローブ達がチャリオットから降りて御者たちが夫婦と男の子を取り囲んだ。

「病ではありません。山間に入って急に寒くなったからです」

春の収穫祈願祭（インボルグ）は近いが、山間の風はまだまだ冷たい。敏感な子どもが、気候の変化で喉を痛めるのも無理はない。

「水を飲んで気持ちが落ち着けばすぐに良くなります」

「不吉だ。国外追放にせよ」

夫婦の言葉を無視して赤マントは問答無用に断言した。あまりに無法な裁きに怒りを感じて、シーグは馬車から飛び降りた。「止めた方がいいですよ」と、背後からレンダの声が聞こえる。しかしシーグは大またに歩いて黄色ローブを押しのけると、夫婦に自分の水筒を渡した。

「貴様、勝手に何をしている」

力任せに肩をつかまれたシーグは、人差し指を黄色ローブの目前に突きつけた。すると、黄色ローブはキョトンとした表情を浮かべた後、盛大にくしゃみを始めた。

「ずいぶんと不吉な奴がいるんだな」

「き、貴様、魔術師か！」

シーグが嫌味ったらしく言うと、黄色ローブたちは警戒して後ずさる。赤マントを横目で気にしていたのは、自分たちも国外追放になると恐れているからだろう。

「下らん手品だ」

赤マントはシーグのベルトポーチを一瞥してつぶやく。無言の悪意には鈍いが、目は悪くないらしい。シーグのベルトポーチには木の実が入っていた。飲み込めば溶けるように疲れが消え去るが、指ですりつぶすと鼻が曲がるような刺激臭が漂うのだ。

「まさか、赤毛とはな。最高に不吉な兆候が現れたぞ」

赤マントは椅子から立ち上がろうともせず、馬車から見下す態度

を変えない。

「頭から生やすのは不吉でも、肩からぶら下げるのは縁起がいいのか？」

「はっ、これだから教養のない奴は困る」

赤マントは人をバカにした笑みを浮かべている。シーグには全く理解できない。

「教養を身につけるっていうのは、偏見まみれになるってことか。知らなかったよ」

隣にいても聞こえない声でつぶやいたつもりだが、赤マントは不機嫌に眉を跳ね上げた。

「貴様はいちいち不愉快だな」

なるほど、とシーグは納得した。レンダの言うとおりに尊大だ。おまけに神経質で考えは偏狭だし、回りくどい言葉づかいはイライラする。マントは悪趣味で笑い方まで品がなくて、王の横にはべる道化の方がよっぽど品がある。

「道化だと？　貴様、命が惜しくないのか！」

今度は声にも出さなかったのに、赤マントは顔を真っ赤にして怒っている。

「さすが魔術しだ。心の中までお見通――」

赤マントはシーグに向けて拳大の火の玉を投げつけた。シーグが

半歩だけ動いてかわすと真後ろにいた黄色ローブの片方に直撃した。
「――しか。ところで、仲間は大切にしろよ」
「ひぃぃぃー」
大げさな悲鳴を上げた黄色ローブは、燃えるローブを脱ぎ捨て白シャツ姿になった。見た目ほどたいした威力は無いらしい。

「魔術を愚弄するのか、貴様！」
「魔術じゃない。へたくそな誰かさんをだ」

小声で言ったのだが赤マントは長椅子から立ち上がり、両手を振り上げる。指先に炎が燃え上がり拳大の大きさになった。白シャツと黄色ローブは慌てて逃げ出し、群衆からは悲鳴が起こった。
シーグは好戦的に赤マントを見据えた。炎は一抱えもの大きさになり、轟々と燃えている。赤マントが両腕を振り下ろし、投げつけた火の玉をシーグは横っ飛びでかわした。
爆発が地面をえぐり土を跳ね飛ばす。人一人が入れそうな、すり鉢状の穴が開いている。すさまじい威力だが、シーグはかすり傷一つ負っていない。
火の玉の威力は強大だが、弓矢ほどの速度はない。身振りや呪文の声は攻撃の瞬間を知らせてくれる。一定の距離を保てばなんの脅威にもならない。

「き、貴様ぁ！」

赤マントは怒りと戸惑いで上ずった声を出した。感情を表すように炎の形もいびつにゆがむ。ますます的外れになった火球をシーグは面倒くさそうにかわした。

1章ー2　走るハタ迷惑

「魔術のことはよく分からないが、大技はやめたほうがいい。冷静になって集中してだな、正確に狙いを定めて小刻みに撃てばずっと良くなるはずだ」
「お、おのれぇー」

シーグの助言を聞いて、赤マントの顔色はどす黒い赤となった。十歳の時の自分の髪の色とよく似ている、とシーグは思った。
リーザに教えてもらったことだが、髪の毛も皮膚の一種ということだ。なら、顔色を赤く変えるのは不吉ではないのだろか。
意味のない事を考えるシーグの横を燃えあがる火球が通り過ぎる。赤マントの怒りを象徴するように的を外れて大爆発した。

「ええい、お前達。何をしている！」

赤マントに怒鳴りつけられると、取り巻き達はビクリと体を震わせた。火球から逃げた後馬車の後ろに避難して戦いを見ていたのだ。駆け足で戻ってきて馬車に乗り込もうとする二人。赤マントは奇声を上げながら、二人の尻を蹴るので馬車にあがるのが更に遅くなる。
群集からは失笑が漏れている。シーグは石畳の街道からはずれて歩き出した。

「はっはっは。平地のチャリオットは地上最強。貴様の命運もこれまでだぞ」

村祭りの三文芝居よりも酷いセリフを無視して、シーグは背を向けたまま歩き続けた。

「赤毛の小僧、礼儀を知らんのか！」

赤マントの言う礼儀とは、自分に都合よく相手が従うことのようだ。まともに付き合うのもバカらしい。

「あの無礼者をひき殺せ！」

「は、はい」

上ずった返事と共にガラガラと派手な音が近づいてくる。土煙を巻き上げ、真正面から迫るチャリオットをシーグは横っ飛びに避けた。更に、空中で剣を抜き打ちにして手綱を切りつけたのだ。それは、軽業師でさえも目を見張るような速さであった。

しかし、鋼の盾に弾かれたような手ごたえにシーグは手がしびれる。剣を落とさないように両手で支えなくてはならなかった。剣身は刃こぼれを起こしている。

「この手綱には魔術が編みこまれている。そんなナマクラでは切れないぞ」

通り過ぎていったチャリオットは大回りに旋回しながら、シーグに向き直った。

「だったら、今度は御者の腕を切り飛ばそう」

チャリオットを切り捨てるように、シーグは剣を斜めに振り下ろした。白シャツは青ざめている。

「無駄なことだ」

赤マントが指を鳴らすと黄色ローブが長槍を右手に持ち、大盾を

左手で構えて前面を守った。
白シャツが馬の手綱を操り、黄色ローブが右手に長槍と左手に大楯を構え、赤マントが長椅子でふんぞり返っている。
赤マントは余裕を取り戻して騒がしく、けたたましいく威張り散らしている。
シーグが離れれば火球を撃ち、近寄ればひき潰す。馬車に乗りこもうとする者は、盾で阻まれ槍で串刺しにされるのだ。
チャリオットは機動力と遠近の攻撃を兼ね備えた兵器である。その威力を持って、かつて大陸を制した王もいたほどである。

「行け！」

命令された白シャツは馬に鞭を打ち、馬がいななきを上げる。黄色ローブは槍を突き出し、赤マントは手のひらに火の玉を浮かべた。激しく回転する車輪が地面を削り、大地を震わすような轟音を立ててチャリオットが迫る。
シーグはギリギリまでチャリオットを引き付けて右へ飛んだ。黄色マントが長槍を突き出すが、自分自身の大盾が邪魔して突きが一瞬遅れる。その隙にシーグは側転の要領でチャリオットの直撃を逃れた。続けて、背中に突き刺さる殺意。シーグは起き上がると同時に後ろも振り向かずに、飛び込み前転の要領で回避する。背後で火球が爆発し、熱風に吹き飛ばされたシーグは片膝をついて着地した。
チャリオットは再び旋回し、シーグに対面して動きを止める。
赤マントは高笑いをした。火球と車輪の跳ね上げた土砂をかぶり、シーグが埃まみれになっていたからだ。取り巻き二人も引きつりながらも笑顔を浮かべている。

「わがチャリオット部隊は戦場を駆け巡り、7度の戦いのすべてを勝利に導いたのだ。メティオ・スマッシャーの異名で恐れられた私を相手に勝ち目はないぞ。赤毛の小僧を血だるまにして、ガリウス

様のご結婚に花を添えるとしよう」
「結婚式に血みどろの死体をささげるとは、メティスには変態じみた習慣があるんだな。それに、隕石は空から落ちたら砕け散って再起不能だぞ。無残な異名もあったものだな」
口元についた泥を手でぬぐいながら、シーグは侮辱の言葉を声高に叫んだ。赤マントはキョトンとしている。
「泥だんごよりもヘタレな火球を撃つのだから見ていられない。俺が引導を渡してやるからさっさとかかって来たらどうだ。それとも、魔術師は呪文じゃなくて、減らず口で戦うのか？」
「……ほざけ小僧。赤毛の……不吉の象徴めが！」
赤マントは唾を飛ばし、口の端に泡を浮かせながら怒鳴り散らす。貧弱な侮辱に対してシーグは腹が立つよりも呆れてしまった。
「この足場で、動きを止めたのは失敗だな」
つぶやくと同時にシーグは放たれた矢のように走り出した。白シャツは慌てて馬に鞭を打つが、石畳ではなく柔らかい地面であるために馬の足も車輪も取られて空回りするだけだ。停止したチャリオットなど、ただの箱にすぎない。
肉迫するシーグに対し、赤マントは火球を投げるのを躊躇した。威力のありすぎる火球を至近で炸裂させると、自分たちを巻き込むからだ。守りを担当する黄色ローブが大盾を構えて進み出る。鋭く突き出される長槍を、シーグは馬の陰に隠れることでかわした。そして、手綱をつかむと一飛びで馬の背中に立つ。
「ひぃ！」

白シャツは怯えて両手をかばった。シーグは手綱を奪い取って、馬から叩き落そうと横殴りに迫る槍を受け止める。突撃の勢いに任せて突き出すための長槍だ。シーグが手綱を引っ張って馬を急停止させる。黄色ローブは体制を崩して、槍と一緒に馬車から落ちていった。

シーグは揺れる馬車から飛び降りて、身軽に受身を取ると同時に起き上がり転がって逃げだす。

赤マントが手綱を操り、チャリオットは体勢を立て直した。黄色ローブと槍と置き去りにしたまま、速度を落とさず大回りに旋回し、突撃してくる。巻き上がった土煙が霧のように周囲に立ち込めて景色がかすんで見えた。

シーグは背中を向けてまっしぐらに逃げ出した。背後から勝ち誇る赤マントの高笑いが聞こえてきた。シーグが振り向くと、チャリオットは更に速度を上げて殺到してくる。

絶体絶命の瞬間に、シーグはニヤリと笑みを浮かべた。

突然、バキッと何かが折れる音と共にチャリオットが大きく片側に傾いたのだ。チャリオットは体勢を立て直せないまま横転し、赤マントの情けない悲鳴と共に真っ赤な爆発が起こった。

「やりすぎたかな」

予想以上の出来事にシーグはため息のように漏らした。噴煙の煙の中から、二頭の馬がいななきを上げながら一目散に逃げてゆく。やはり見た目の派手さほど、爆発に威力はないようだ。

チャリオットが体勢を崩した場所には赤マントが最初に火球であけた穴がある。チャリオットはすり鉢状の穴に車輪を取られて体勢を崩したのだ。

もともとチャリオットは、集団で戦列をくみ、動く城壁と化してこそ最大の効果を発揮する。たった一台では見た目が派手なだけで、

本来の力を発揮できない。混乱する戦場の中で赤マントの火球は敵を恐れさせはしたが、同時に味方の足場を乱し、進路を妨害していたに違いない。走るハタ迷惑とはよく言ったものだ。

「イッサ様のチャリオットが爆発したぞ」

城門から槍で武装した男たちがぞろぞろと出てくる。

「まずいことになったな……」

今更ながらシーグはつぶやく。レンダを探して行列を見渡したが、レンダは馬車ごとなくなっていた。咳き込んでいた子どもがいた馬車のすぐ後ろは空白になっていたのだ。

「あいつだ。あの赤毛を捕らえろ」

槍の男たちはますます数を増やし、一斉に駆けよってくる。

「勝手に自爆したんだけどなぁ」

シーグは頭をかきながら呟くと、城壁に沿って一目散に逃げ出した。「待てー」と叫ぶ声は増えてゆく一方である。

1章ー3　目から最終兵器

＊

「向こうに逃げたぞ」
「追え！」

衛兵たちはありきたりな声を上げて追ってくる。シーグは城壁に沿って生える木を見上げながら逃走していた。

「これがよさそうだな」

そうつぶやくと、枝に手をかけて逆上がりの要領で飛び乗った。するすると幹を登りつめ、城壁に飛び移ると、壁のデコボコを足がかりにして更に上を目指す。サルのような身軽さで、またたく間に城壁の頂点までたどり着いてしまった。

衛兵たちはまったく気づかずにシーグの真下を通り過ぎてどこかへ行ってしまった。城壁の上からは、壊れたチャリオットから這い出てきた三人組が見えた。その内一人が焦げてまだら模様になったマントを引きずっている。

「黒こげのマントは縁起が悪くないのかな？」

どうでもいいことだと思い、シーグは鼻で笑った。後ろを振り返ったシーグは目を丸くする。無骨な城壁からは想像もつかない光景が広がっていたからだ。

まず目を奪われたのは都の中心に広がる湖である。湖面はまるで鏡のようで、空の青や雲の白を写している。南風を帆に受けて青い湖面を進む船が、空を飛ぶ鳥に見える。

真っ直ぐに続く道と、なだらかな円弧を描く道が重なり、町並みが不思議な模様を作り出している。リーザが魔術を使う時に用いた魔法陣のようだ。

建物は高さがそろえられ、ベランダには花が飾られている。町のあちこちに広場があって、石像が掲げる壺から水が流れている。

都の奥にある小高い丘には巨大な城が建っていて、数え切れないほどの塔が空を貫くように伸びていた。

風が優しく吹きぬけ、都のどこにでも水が流れ、遠くからでも人々の活気が伝わってきそうだ。豊かな土と無限とも思える水に恵まれた都。

詩人は現実を大げさな物語に変えてしまうものだが、魔術都市メティスについてはまるで言葉が足りていない。美しい景色に見とれていたシーグは、頭を振って我に返った。

「何て無防備な城塞都市なんだ。侵入者の歓迎会でも開催中なのか？」

シーグはブツブツと呟き続ける。煙突を伝って建物の屋根まで下りた。

「城壁に沿って木を残すなんて正気じゃない。大体、山の真ん中に都を作るなんて、兵の移動にも物資の輸送にも不便なだけだ。それに畑を作る空き地がまったくない。街道を封鎖されたら、食料の自給ができないじゃないか。城塞都市はもっと道を複雑に入り組ませるべきだし――」

シーグはメティスの欠点を探しながら文句を言い続ける。人気のない裏通りに着地し、周囲に警戒の視線を飛ばして誰もいない事を確認した。安心して肩の力を抜いた瞬間。

「あれぇ？」

突然耳元で間の抜けた声がした。仰天したシーグはその場を飛びのいて腰の剣に手をかけた。

背後に立っていたのは十二、三才の少女だった。肩でそろえられた銀色の髪、透き通るような白い肌をしている。青色の瞳は眠そうに半開きになっていた。

フリルのついた薄いローブは、夜着にしかみえない。ベッドから迷い出てきたような格好だ。

「あらら～。大変、大変」

ちっとも大変そうに聞こえないのんびりとした声。頬を両手に当てて驚いている仕草や、まん丸に開かれた瞳が更に幼い印象を与える。

だが、シーグは警戒を怠らずいつでも剣を抜けるように構えていた。外見がどうであろうと、気配もなく背後に立っていたことは確かなのだ。ロディウスの訓練を受けてから、野生の狼にさえここまで見事に背後を取らせたことはない。

腰のポケットに手を入れながら少女はゆっくりと近づいてくる。隙だらけに見えるが、彼女が只者ではないのは確かだ。

武器を警戒してシーグは更に低く構えた。傷つけないように気絶させようか。しかし、触れただけで折れてしまいそうな少女に手を上げることには抵抗がある。

「顔中が泥だらけだよ！」

この世の終わりが来たかのように少女は絶望的な声を上げた。勢いよくポケットから取り出したのは、……絹のハンカチだった。

「……は？」

予想外の展開にシーグは間の抜けた声を出した。

「いつでも着飾っておしゃれにするのが、女の子の心得なんだよ」

少女は胸を張って誇らしげに宣言する。眠たそうな表情は変わりないままだったが。

「俺は男だけど……」

「だぁーめなんだよー」

眠そうな少女の声が、シーグの言葉をさえぎる。

「だって、男も女も同じ人間なんだもん。だから――」

少女は人差し指を立てながら、シーグに詰め寄る。眠いんだか、真剣なんだか、よくわからない表情にシーグは思わず後ずさる。

「汚いのは男の子でも女の子でもないってことなの。つまり、人でなしっていうことなんだよ！」

「……」

少女は両手を腰に手を置き何度もうなずいている。シーグは空を仰いで首を横に振った。

「あのな」

「とにかく、早く綺麗にしなくちゃダメ！」

「いや、俺は別に――」

「ダメなの！」

ダメを繰り返すたびに、少女の声は大きくなってゆく。騒がれては困るのでシーグはおとなしくハンカチを受け取った。リーザもこういう態度に出た時は、絶対に譲らなかったからだ。

「首筋も！」

シーグは逆らわず言うとおりにした。少女はシーグをにらみつけるように、観察している。最後に「よろしい」と、大仰にうなずいた後、少女の瞳は再び眠そうにトロンとなった。そのまま倒れそうになったので、シーグは思わず背中を支える。

「おい、どうした？」
「へーきれぇすよー」

少女は緩みきった声で答えて、シーグの腕に体重をあずけた。瞳を閉じた少女は、スースーと規則正しい呼吸音を立て始めている。
「もう、食べられたくありません、ムニャムニャ」と、意味不明なことをつぶやいている。

「おい、寝ているのか？」
「あ、うん。ちょっとだけ寝ていたよ」

少女は目をこすりながら、ふらふらと立ち上がった。

「あんた、本当に大丈夫か？」

色々な意味で、と思いながらシーグは聞いた。言動も行動も、とにかくすべてが尋常ではない。

「平気だよ。こう見えても、しっかりした子だってほめられるの」

ニンマリと得意げに少女は笑った。リーザが見たら、淑女らしくないと注意するに違いない。

「何でもできる賢い子だって言われたこともあるよ」

その評価は確実に間違っている。6歳の子どもだって、ここまで危なっかしくない。

「参ったなぁー。寝たまんま、あっちこっちに行ったらダメっていつも注意されているのに。なんでこんな場所にいるんだろ」

少女は小首をかしげて途方にくれている。シーグも途方にくれたい気分だった。

「……道に迷ったんだな？」

「違うよ。ここがどこかわからないだけだよ」

「それを迷子っていうんだ」

「迷子じゃないもん！」

少女は頬を膨らませて反発する。シーグはいちいち訂正するのが面倒くさくなってきた。

「どこから来たんだ」

キョロキョロと周囲を見回した後、空を指差す少女。3歳の子どもだって、もっとまともな答えが返ってくるだろう。

「とにかく、大通りまで行こう」

「大通りって何？」
「ここより賑やかな場所のことだ」
「楽しい場所なの？」
「だいたい、そんな感じだ」

シーグはいい加減に答えた。これだけ目立つ容姿で、変な事を言いながら妙な行動をとっているのだ。人の多い場所に行けば、必ず知っている人間に会うだろう。

「ウッキィヤヤヤァーーーーーー！」

絹を裂くような悲鳴が耳元で起こりシーグは剣の柄に手をかけて身構えた。

「どうした！」
「うん。虫を見たら悲鳴を上げたり、気絶をしたりするのが女の子の心得なんだよ」

力強く言った後、思い出したように目を閉じて後ろに倒れていく少女。シーグは心底うんざりしながらも、再び背中を支えた。真っ白な羽を持ったチョウチョがひらひらと空へ飛んでゆく。少なくとも女性が見て気絶する虫ではない。

「あのな、怖くもないのに悲鳴を上げなくていい」
「悲鳴を上げずに気絶した方が、いいの？」
「気絶もするな！」

少女は心底不思議そうにキョトンとしている。一体全体、どこのバカが余計なことを教えたのだろう。キンキンと耳鳴りがして、自分の舌打ちがやけに遠くに聞こえる。

耳が聞こえにくいせいで、気づくのが遅れたが誰かがこちらに近づいてくる。それも一人や二人ではない。

「サルの叫び声……じゃないよな。今のは？」

「とにかく悲鳴が聞こえたぞ」

「こっちだ。間違いない」

城壁の外で聞いたのとよく似たやり取りだ。衛兵は慌て方まで訓練されているのだろうか？

シーグは安定しない人形を扱うように、慎重に少女を立たせた。

「今から来る人が道を案内してくれるぞ」

「私を置いてどこに行っちゃうの？」

少女は悲壮な声を出して、腕に取りすがってきた。空色の瞳に涙を浮かべ上目遣いに見つめてくる。整った顔立ちで、あまりに真に迫った表情をする。不覚にもシーグは胸が高鳴ってしまった。

「女を1人で置き去りにするなんて、そんな男とは思わなかったわ」

「……それも教えてもらったのか？」

「うん、女の子の涙は最終兵器なんだよ」

一変して、にんまりと無邪気に答える少女。シーグは強い疲労を感じてため息をついた。正直、戦いよりもこっちの方が何倍も疲れる。

「とにかく俺は行く」

「ダメ！　名前を教えるの」

「俺はシーグだ」

早口に答えると、少女は笑顔になって手を離してくれた。シーグが慌てて路地を曲がって姿を消すのと、槍を構えた衛兵たちがやってきたのはほとんど同時だった。

「大丈夫か？」

声をかけながら、衛兵達は少女の周囲に集まる。そして、髪と瞳の色を確認して態度を改めた。

「アイフェ・ディスペリア様ではありませんか！」

名前を呼ばれたのに、当の本人は人事のように首を傾げている。

「一体何があったのですか？」
「私は道を外れてしまったの……」

頬を押さえ、途方にくれた様子でアイフェはつぶやいた。衛兵達はギョッとして、お互いに顔を見合わせている。
道に迷ったの間違いだろう、とシーグは物陰でつぶやき返す。

「何があったのですか？」

衛兵の一人が聞きにくそうに問いかける。

「この路地で、男の人と会ったの。ここよりも賑やかで楽しいところに連れて行ってくれるって言って、背中に手を回してくれたの……でも、私を置いてどこかに消えちゃった」

アイフェはここで瞳に涙をいっぱいにためた。暗い裏通り、突然の悲鳴、含みのある言葉。誰でも不穏な出来事を連想するだろう。

「その悪人は、我々が必ず捕まえてみせます」

最終兵器とやらの効果は絶大で、衛兵達はそろって息巻いている。

「えー、とってもいい人なんだよ」

意気込む衛兵たちにアイフェは唇を尖らせて、器用に涙を引っ込める。

「本物の悪人こそ、やさしそうなフリをして近づいてくるものです」

「じゃあ、おじさんたちも悪い人なんだね！」

アイフェが怯えるように後ずさった。衛兵達が距離をつめると、

「ヴー」と獣のような唸り声を上げてけん制する。

「ち、違います。私たちはあなたに危害を与えるつもりはありません」

「へぇ、そうなんだ」

アイフェはあっさりと納得した。

「ところで、その男はどこから来たのですか？」

「鳥みたいに城壁を越えてやってきたんだ」

衛兵たちは疑いの表情を浮かべた。

「それに、とても綺麗な黒い瞳をしていたよ」

「黒い瞳！」

衛兵たちは驚きの声を上げて顔を見合わせる。

「災厄の印ではありませんか」

「貴方ほどの方が近づいてはなりません」

「なんで？」

「不吉だからです」

「だから、なんでなの。ちゃんと説明してくれないと、分からないよ？」

アイフェの真剣な問いかけに、衛兵達は言葉が続かなかった。

どうやらこの都では、黒い瞳がよほど不吉なようだ。物陰から様子を伺ってみると、集まってきている衛兵の中達の中に赤い髪や黒い瞳をもつ者は誰もいなかった。

すると突然アイフェが振り向いたので、シーグは慌てて顔を引っ込める。

「とにかく、我々が屋敷までお送りします」

「えー、やだー」

「案内いたします！」

嫌そうな声の後に、有無を言わせぬ口調。そして、足音が遠ざかって行く。

シーグは壁をよじ登って屋根に上がった。衛兵達は真っ直ぐと大通りを目指して歩いてゆく。アイフェの十歩四方に誰の侵入も許さぬほどだ。陣営を思わせる仰々しいほどの防御は、周囲から衛兵が集まってくることで更に厚みが増してゆく。

アイフェは相当に地位の高い娘であるらしい。

金の髪と緑の瞳を持つサフィリアは、産まれながらの魔術師と呼ばれていた。銀と青の容貌を持つアイフェも同じような境遇に違いない。

突然振り返ったアイフェは、シーグの潜む屋根に向かって手を振り始めた。衛兵達もつられて注目したのでシーグは慌てて煙突の陰に身を隠した。

すっとぼけたように見えて妙に鋭い少女もいれば、心を読む赤マントもいる。魔術都市というのは、心底油断のならない場所のようだ。

「とりあえず、赤毛を隠す方法を考えるか」

町中を見渡すと、湖岸に面して大通りが続いていた。商店が立ち並び、旅人や荷馬車が忙しく行きかっている。あそこならば必要なものがそろうだろうし、群衆の中にまぎれることもできる。

シーグは音もなく地面に降り立つと風のような速さで路地裏を駆けていった。

1章－3　目から最終兵器（後書き）

中世の時代、城壁や屋敷に沿って木を立てるのは防衛の面からご法度でした。こういうことをする人がいるからなんですね。

セコムも電子ロックもない時代なので、現代とは違うやり方で防衛を考えていたようです。

1章－4　結界陣の一族

「城門で戦闘だと？」

衛兵の報告を受けて、ガリウス・グラムファーレは不機嫌に問い返した。琥珀色の髪と、切れ長で灰色の瞳は冷たい刃を連想させる。ローブ越しにもわかる鍛え上げられた体躯は直立する戦神の像のようだ。２０歳になったばかりだが、すでに壮年の騎士がもつ威厳が身についていた。

だから、衛兵は完全に萎縮してガリウスを直視できずにいた。

「門の守りはイッサに任せていたはずだが？」

ガリウスの声は優れた楽器のようだ。低くとも部屋全体に響き渡る。

「チ、チャリオットでうって出たものの、倒されてしまいました」

圧倒された衛兵はつっかえつっかえ答えた。ガリウスはしばらくの間身動きもせず、窓の外を見つめる彫像と化した。

城壁よりも高い位置にある塔からは、町のすべてを一望することができる。突然、腕を振り上げたガリウスは、手近にあった樫のテーブルに振り下ろす。部屋中をゆるがせる轟音と共に、分厚いテーブルが真っ二つに折れた。

「都市への侵入を許したのか？」

「いいえ。赤毛の少年は町には入らず、城壁沿いに逃亡しました。現在は行方を捜索中です」

「必ず捕らえよ。結界陣の一族の名を汚さぬようにな」

ガリウスは淡々と命じる。苛立ちをぶつけた激しさの後に、淡々とした口調で話すので余計にすご味がある。衛兵は逃げるように早足に出て行った。部屋の扉で足音が乱れたので、ガリウスは目だけを動かした。

「気にしないで下さい」

彼は薄い水色のローブを着た少女とぶつかりそうになっていたのだ。衛兵はしきりに頭を下げながら去っていった。

「報告したいことがあります」

水晶の鐘を鳴らしたような声は部屋中に心地よくひびく。ほっそりとした体つき、背中まで伸びる淡い金色の髪は薄暗い部屋でも輝くように明るい。碧色の瞳は宝石のような光をたたえ、毅然と歩く姿が彼女の性格を現していた。

「サフィリア、か」

ガリウスは短く答え、サフィリアが視界に入らぬように中空に視線を戻した。

「城門で戦いがありました」
「耳が早いな。また、風に聞いたのか」
「魔術ではありません。衛兵の証言を集めました」

ガリウスの灰色の瞳がスッと細められる。

「下界に降りたのか？」

「都に行ったのです」

サフィリアが訂正すると、ガリウスはゆっくりと振り返った。磨かれたナイフのような視線と、澄んだエメラルドを思わせる視線がぶつかる。

「何か言いたいことがあるようだな」

「イッサ・ホコブスの対応が、門番に相応しかったとは思えません。髪や瞳の色を理由に罰金をとり、病人を追い返していたという報告も受けました」

「真実かどうか分かるまい」

「事実です。この一月の間、私自身が確認しました。それも、一度や二度のことではありませんよ」

ガリウスは沈黙したまま、視線をそらす。

「知っていたのですね」

「……」

サフィリアの問いをガリウスは黙殺する。

「だが、城門で乱闘騒ぎを起こした事は事実だ」

「衛兵たちの証言があります。イッサ・ホコブスは咳き込む子どもを追放しようとしていました。それを無法と考えた赤毛の少年がかばったのです。どちらが不当であったかは明白だとは思いませんか？」

「では、罪はイッサにあるとそなたは言うのか」

「公平な場での裁きをお願いしているのです。結果だけではなく過程を尊重し、弁明の場を与えるべきです」

ガリウスはサフィリアに対して、背中を向けてしまった。言葉はなくとも、完全な否定である。

「メティスの番人を倒した罪を無条件で許すことはできませんぞ」

陰々と響く声に、サフィリアとガリウスは振り返った。入り口には夕日に伸びる影のように長身痩躯の男が立っていた。真っ黒なローブを身にまとい、同じ色のフードで完全に顔を隠している。ローブの外に出ている部分は一つもなく、声を聞かなければ性別さえも分からなかった。

影の長刀（シャドー・グレイブ）卿、マイリグ・ブレスト。影の魔術を得意とし、異界の怪物を呼び出して操る。グラムファーレに敵対する者を数え切れないほど闇に葬ってきた暗殺者である。

「仮にも魔術師を手玉に取る男ですからな。衛兵の手には負えますまい」

「マイリグ、お前ならどうなのだ？」

「異界の怪物は闇にひそむ者を捕らえる狩人ですぞ。命の保障はできかねますが」

「構わん」

ガリウスはぶっきらぼうに答えた。黒ローブは深く頭を下げると、とぼとぼと立ち去ってゆく。

「命まで奪うつもりですか！」

サフィリアは声を荒げて叫ぶ。

「グラムファーレの名を汚す者は消えねばならん。お前もわが妻になり、一族に加わるのだ。心得ておくが良い」

誰とも視線を合わせることもなく、ガリウスは歩き出した。

「ですが！」

「不吉の象徴を持つものをかばえば、罪は我々に降りかかる。命取（シー）りの座（ジペリラス）とリーザ・オーメントの件を思い出せ。また同じ事を繰り返すつもりか？」

サフィリアは唇をかみ締めて黙り込む。それを一瞥して、ガリウスは部屋から出て行った。

部屋の中に一人だけ残されたサフィリアは壁にもたれかかる。片手で目元を押さえ、うつむくと肩が重く感じられる。

４年前は魔術都市の考えが偏見に満ちていると心の底から信じていられた。産まれた日時や髪や目の色が、人のすべてを決めるはずがない。だから、レイザークの公子はシージ・ペリラスではなく、黒い髪と黒い瞳を持つリーザが魔術師の秘儀に触れても災厄など訪れない、と。

未分化な魔術の秘儀を行った死神（サムハイン）の日　の夜に異界の扉が開いたのだ。暴れまわる怪物たちの影、耳をつんざく悲鳴とあらゆるものが破壊されてゆく音が響き渡る。サフィリアが見聞きしたのは、水晶玉越しにほんの１００を数える間だ。しかし、何もかもを鮮明に思い出すことができる。

どのような危険が潜むかも知らずに、災厄を巻き起こしたのが自分なのだ。レイザークは魔境に沈み、シーグとリーザの命までも奪ってしまった。

「フィー、どうして泣いているの？」

突然の声に目をあけると、しゃがみ込んだ少女がサフィリアを覗

き込んでいた。

「アイフェ。無事だったのね」
「うん、ただいま」
「お帰りなさい」

アイフェは満面の笑顔を浮かべて、跳ねるように立ち上がった。動作の一つ一つに楽しさが垣間見える。きっと外で良いことがあったのだろう。

「塔を出てはいけないと何度も言ったでしょ」
「外の世界を見たいんだもん」

厳しく叱るつもりが、サフィリアは言葉に詰まってしまう。頬を膨らませるアイフェの姿に、４年前の自分を見たからだ。外の世界に思いをはせ、遠い場所へ行きたい気持ちが止められなくなる。こっそりと塔を抜け出した事も一度や二度ではない。

だが、生まれながらに特殊な容姿を持つものには、飲食物も、言葉も、空気でさえも、決められたものしか与えられない。最高の環境が最高の魔術師を生み出し、異物はすべて魔術を妨げるもの。魔術都市はそう考えているからだ。

かつて十二歳までだったが、今では十五歳まで引き上げられた。サフィリアが犯した禁忌によって、魔術都市の規定が変えられたからだ。

石の壁に囲まれ、小さな窓からみえる太陽と月と星の動きを追い続ける毎日。監獄の中に閉じ込められた囚人のような生活を、アイフェはあと三年も続けるのだ。本来ならばすでに得ているはずだった自由を、遠くに押しやったのがサフィリアなのである。

自分が大人しく塔の中で過ごしていれば、アイフェは今年から自

由に動けたはずなのだ。そうすれば、リーザやシーグが死ぬこともなくレイザークが魔境に飲まれることはなかった。

「ごめんね、アイフェ」

サフィリアは涙が浮かんできた。すると、背中越しに両手が回される。肩越しには振り返ると、にっこりと微笑むアイフェが背中に張り付いている。

「泣いている子にはこうしてあげるのが一番なの。リーねぇがそう言ってたよ」

四年前、今よりも舌足らずだったアイフェは「リーザ姉さん」と発音できなかった。銀色の容姿を持つものに書物を与えることは禁忌であり、言語に至っても最小限の語彙しか習得させないようになっている。

外界から隔絶するほどに未来を予知する能力が研ぎ澄まされる、と信じられているからだ。

舌足らずなアイフェに、「リーねぇ」や「フィー」と呼ぶようにリーザが教えたのだった。

「ため息は人を不幸にするんだよ。それに涙が浮かんだときはうずくまっていたらダメなんだからね」

アイフェは、真剣な顔つきでサフィリアに言う。

何百冊もの本にかかれた数え切れない文字よりも、リーザのたった一言が心に残っている。アイフェも忘れられないのか、しきりにリーザのことを口にする。冷たい石の塔に住むものにとって彼女の暖かさは、太陽よりも貴重だった。

たぶんここにリーザがいたら、背中を押して励ましてくれるはず

だ。

「アイフェ、私はこれから人を探さなくちゃいけないの」
「誰を？」
「今、衛兵達が追いかけている赤毛の人よ」
「おー、綺麗な赤毛の人だね」
「……知ってるの？」

アイフェは腕を組みながら何度もうなずく。

「うん。城壁を乗り越えて、中に入ってきたんだ。身軽で猿みたいだったよ」

ここまで言った後、アイフェはキョトンと首をかしげた。しばらく、斜め上を見て何かを思い出しているようだったが、急にケラケラと笑い出す。
「どうしたの？」
「赤毛のお猿ぅー。お顔もお尻も真っ赤っくわぁー」

アイフェは奇妙に音程の外れた歌を歌いだした。教えたのは間違いなくリーザだろう。自分では気づいていなかったが、酷い音痴だったのだ。そのせいで、呪文を使う魔術はたいてい暴走していた。

「他に気づいた事は？」

アイフェはケタケタと笑うばかりで答えない。サフィリアはアイフェが落ち着くのを待って、再び同じ質問をする。

「途方もなくどす黒くて、穢れきった奴だったんだよ」

アイフェは人差し指を立てて自信満々に言う。

「……詳しく聞かせて」

何かが違う、そう直感しながら辛抱強く聞き返した。

「顔が真っ黒だったから、このハンカチを貸してあげたんだ」

取り出したハンカチは泥やススで真っ黒になっていた。よくよく見るとハンカチを入れていたポケットや、腰の辺りまで汚れている。黒い染みをたどっていくと、自分のローブまで続いている。アイフェの腕と手の形に、真っ黒な汚れがべったりとついていた。

サフィリアは、怒鳴りたくなるのを懸命にこらえた。

「そういう場合は泥で汚れていた、っていうのよ」

「おおぅ。そういえば、そんなかんじだったっけか。いやっはっはー」

アイフェは腰に手をやって派手に笑っている。リーザの真似に違いないが、変な事ばかり覚えてしまっているようだ。

「他には？」

「抱きしめてくれたよ」

「……え」

路上でいきなりとは、どういうことなのだろう。

血のような赤毛と闇色の瞳、だまし討ちを好み、凶暴で口が悪く、人相の悪い少年と衛兵から報告を受けていた。他にも問題のある人物なのだろうか。

「だから、もう食べられたくないんだよ、って言ったんだよ」
「食べる？」
「うん。頭からガップリ。丸かじりだったんだよ」

力強く何度もうなずくアイフェ。とても嘘をついているようには思えない。だいたい頭を丸かじりとなると、相当に大きな口の持ち主なのだろうか。

アイフェと衛兵の言葉から姿を想像しようとして、サフィリアは途中で止めた。それはすでに人間ではなくなっていたからだ。

とにかく、城壁の中にいるというのは大きな収穫だ。壁の外だけを探している衛兵が見つけられないのもそのせいだろう。探し始める場所を間違っていれば、さしものシャドーグレイブ卿とはいえ赤毛の少年を見つけるのは困難だ。

風の魔術を有効に使えば、先に足取りをつかむ事ができるかもしれない。

「アイフェ、私はもう行くわ。あなたも服を着替えなさい」

サフィリアはメティスの地図を思い浮かべながら足早に歩き出した。

「そういえば、名前はシィブゥーっていうらしいよ」

アイフェのつぶやきはサフィリアには届かなかった。返事の変わりに扉を閉める音だけが部屋の中に鳴り響いた。

1章ー5　変装の心得

太陽は西の空に差し掛かりつつあった。壁のようにそそり立つ山脈が地平線を高くしているから、平地よりもずっと早く夜が訪れるだろう。

「とりあえず、これで平気かな」

湖面に映る自分を見ながらシーグは独り言をつぶやいた。皮のマントに身を包み、フードに赤毛を押し込む。大切なのは額は出しておく事。黒く染めた眉を出しておけば、見るものは勝手に黒髪だと思い込むからだ。

変装の助言をしてくれた雑貨屋の店主の言葉を思い出しながら、シーグはもう一度全身を確かめた。

店主はもともと赤毛だった。商売を始めるときには髪をそり、眉を染めていたという。シーグの髪を見て同情し、マントをうんと安くして眉毛を黒く塗るための染め具まで準備してくれた。更に店の裏で水浴びまでさせてくれたのである。小奇麗にしておくのも、怪しまれないための秘訣だという。

商売も変装も第一印象がすべて。それが、店の主人の座右の銘であるらしい。旅の汗と埃を落とし、サッパリした気持ちでシーグは湖岸の道を歩いていた。

客引きの人間さえシーグを見ても見ぬふりをしている。毛髪が黒でも不吉であることは変わりないようだ。

だから、親しげな様子に近づいてくる黒髪の娘はとても目立った。シーグの肩までの背の高さで、ほっそりとした全身がよく分かるワンピースを着ている。スラリと伸びる手足は、健康的に日焼けしていた。

背伸びしてシーグの目を正面から覗き込むと、知り合いであるかのように横に並んで歩き出す。シーグが立ち止まると、娘も立ち止まり、今度は品定めするように頭から足まで見回してくる。１４，５才の娘だとシーグは見当をつけた。

「ふうん、悪くない……わね」

「何がだ？」

「あなた、レイザークの人ね。それも戦士の訓練を受けたことがあるでしょ」

いきなり図星を指され、反射的にマントの中で剣を握る。

「魔術師なのか？」

「なんでそうなるのよ！」

娘は口元をおさえて無邪気に笑った。無遠慮ともいえるのに、不思議と嫌味な感じがしないのは、彼女の明るい性格によるものだろう。

「森を行く戦士の歩き方をしているからよ。私の父さんも、足音を立てずに歩いていたから分かるの」

「じゃあ……」

「うん、四年前に死んじゃった」

娘はポツリとつぶやくとうつむいた。目元が夕日の光を反射している。シーグは思わず剣から手を離していた。

「そんな顔しないでよ。別にあんたのせいじゃないわ」

無理に作った笑顔で娘は顔を上げた。ブラウンの瞳に、短く切り

揃えた黒い髪。この娘も髪の色で苦労をしてきたのだろうか。
命取りの座（シージベリラス）がレイザークに産まれたがために。

「私は、ミラ・リーベルっていうの。あなたは？」
「シーグだ」

ミラは怪訝な表情を浮かべている。シーグは舌打ちをしたい気分を押さえた。
姓を名乗らないのは国を捨てた者か、国に捨てられた者だけだ。過去を隠したいものは偽名を使うので、あえて姓を名乗らない者は少ない。戦場ならば気にする者などいないが、平和な町の中となれば話は別だ。

「ふうん、わけありなんだ」

ミラはシーグの前に回りこんだ。びっくりするくらい薄手のスカートは膝までしかなく、すらりと伸びた足は若鹿を思わせるようにしなやかさがある。軽やかに跳ねるような足取りなので、時々きわどい場所まで見えそうになる。
しかも、まだ寒いのに肩も背中もほとんど丸見えだ。娘らしく丸みを帯びたその体に対し、明らかに服が小さすぎるのだ。
我に返ってふと目線を上げると、ミラはいたずらっぽい笑みを浮かべていた。気まずい思いにとらわれて、シーグは足を止める。

「だから、赤毛を隠しているの？」

言葉の不意打ちを受けて、シーグは思わず後ろに飛びのいてしまった。背中に当たる金属質の衝撃。振り返るとそこには槍を構えた衛兵が不機嫌な顔つきで立っていた。シーグの黒い瞳と、ミラの黒髪を見て更に目つきを厳しくしている。

衛兵の態度を見て、人々は波が引くようにシーグから遠ざかっていった。うかつだったと悔やむがもう遅い。アゴをそらして人を見下すような態度は赤マントに良く似ている。

顔を殴り飛ばして逃げようか、腹を蹴り飛ばして逃げようか。シーグが決断を下しかけたその時……。

「ごめんね。彼ったら、おっちょこちょいなの」

張り詰めた雰囲気にミラが割って入った。両手で抱え込むように腕を取られて、衛兵の顔がギョッとする。ミラは背伸びをして、衛兵の耳元に何かをささやいた。衛兵はミラの胸元を見下ろして、だらしない表情を浮かべている。

「お店に来てくれたら、たっぷりサービスするからね」

衛兵は生真面目な表情でありながら、鼻と口元だけが緩みきっている。シーグと目が合うと顔を隠すように後ろを向いて、足早に去っていった。

「一体何を言ったんだ？」

「……ええと」

不思議に思って聞くと、ミラは赤面して困った表情になった。だから、シーグは追求するのをやめた。

衛兵が去っていったので、大通りを行く人の波は再び元通りになった。店先にかかったランプ光が灯り、ミラを照らす。

太陽はすでに山の陰に差し掛かっていた。

「泊まるところを決めてないなら、私の宿に来ない？」

少し上ずっていて、ためらいがちの声である。

「宿屋の中でフードを被ったままじゃあ、余計に怪しまれるわ。それに裏通りにある小さな宿だから人目にもつきにくいわよ」

今度はやけに早口になっていた。

「どうかしら？」

その通りなら、隠れ家としては理想的だ。そんなことを考えていると、ミラは黙り込んで不安そうにシーグを見ている。

「お客さんを見つけてこないと、一晩中探す事になるの……」

ミラは寒そうに肩を両手で覆って、身を縮こまらせている。宿の主人はかなり酷い奴のようだ。ミラが自分にあったサイズの服を着ていないのも、宿の主人の仕業なのだろうか。シーグは禿げ上がって、顔中傷だらけの悪党面を連想した。

とっさに変装に手を貸してくれた店主の顔が思い浮かんでしまう。正直なところ、髪を剃った頭と鋭い目つきがとても商売人には見えなかったのである。山賊の親分というのが第一印象だった。

「じゃあ、今晩は泊めてもらおうか」

「え……」

以外にも、ミラは戸惑いの表情を見せた。

あやしげな態度にシーグが目を細めると、ミラは目線をそらして逃げるようにそっぽを向く。

「私が言うのもなんだけど、あんまり綺麗な宿じゃないわよ」

「気にしない」
「か、風も結構入ってくるんだけどなー。む、虫も出るし、朝になったら体が痒くなるかも……」
「野宿よりはマシだな」

シーグが断言すると、ミラは「えーと」と言葉を探していた。どう見ても、客が来るのを嫌がっている。

「都合が悪いのなら、無理しなくていいぞ」
「そ、そんな事はないわ。こっちよ、こっち」

ミラは上ずった声で裏通りへの道を指し示した。ものすごい早足で歩いていくミラを不審に思いながらも、シーグは後をついていった。

1章－6　なぞの館

＊

メティスでは太陽が山の陰に消えると、夜の帳が駆け足でやってくる。

道は狭く、壁との間は肩幅ほどしかない。泥とごみが積もっており、町の明かりも星の明かりも届かない。

ミラの選んだ裏道は森よりも暗く、沼地よりも足場が悪かった。魔境に飲み込まれた遺跡の方が、よほど来訪者に優しい。

建物の間にできた細い道をミラはスイスイと進んでゆく。追っ手から逃げるような勢いだったので、シーグは追いつくのがやっとだった。

ミラの態度が明らかに怪しいのは、シーグはとっくに気づいていた。彼女の歩き方は明らかに訓練を受けた者の動きだったからだ。泥の溜まった地面を滑るように、重心を安定させたまま歩く。

あらゆる方向からの攻撃に備える姿勢は、レイザークの戦士と同じだ。だが物音一つ立てずに歩くのは、町の盗賊の歩き方である。ミラは何かの思惑を隠したまま、何処かへつれてゆこうとしているに違いない。

その事を知った上で、シーグはミラの後をついてゆくことにした。

突然ミラは立ち止まって振り向いた。唇を強くかんでいたせいで、歯型がくっきりとついている。

「どうした?」

「べ、別に……」

ぶっきらぼうに言った後、ミラは足早に薄汚れた建物に入っていった。シーグは周囲を見回すが、誰も現れる気配がない。

「一体、俺をどうしたいんだ？」

途方にくれたシーグは頭をかいた。

百歩ほど先にはミラと出会った大通りが見える。歩いてすぐの距離を裏道を通って延々と遠回りしていたのだ。

ミラが入っていった建物は2階建てで縦に細長い。宿屋の大半は一階が酒場や食堂となっているものだし、部屋の数は片手で数えれば足りる。どう見ても宿というよりは、個人の家にしか見えなかった。

シーグは警戒を強めて、剣の柄の場所を確かめる。

盗賊の隠れ家とはえてして日の当たらない場所にあるものだ。町の中にうまく溶け込むのも、隠れ家としての条件である。裏道をあえて通ったのも、場所をかく乱するか、時間を稼ぐ意味があったのかもしれない。

マントを手に入れる前から尾行の視線を感じていたし、赤毛である事も最初から見抜かれていた。すでに、逃げ場などないのだ。

なぜなら町の盗賊は森の狼のようなものだからだ。徒党を組んで、お互いに連絡を取り合い、地の利を生かして獲物をしとめる。

町の中で盗賊と敵対することは、森で狼に包囲される事と変わらない。無理に逃げれば、こちらが無駄に消耗するだけだ。

「勝機は恐怖の向こう側にある、だな」

シーグはつぶやいた。地の利も数の利ものぞめない不利な状況では、脅威の中心へ突き進め。それがロディウスの口癖だ。

意を決したシーグは、ミラの後を追って建物の中に入る。

扉をくぐって最初に目に入ったのは、樫のサイドテーブルに置かれた石膏の裸婦像だった。壁には野原でたわむれる半裸の男女の絵があり、窓にはピンクのカーテンがかけられていた。絨毯は革靴越しにも柔らかさが分かる。鼻をくすぐる甘い香りは、何か香をたいているせいだ。

趣味はよいとはいえないが、狭さを除けば貴族か商人の邸宅並みの豪華な調度品だ。

「2階で待ってて、明かりはつけておいたから」

部屋の奥からミラの声が聞こえてくる。

シーグは注意の視線をあちこちに飛ばしながら、階段を昇っていった。狭い階段は守るに易く、攻めるに難しい。どれだけ体重を逃がしてもきしむ階段の音は、侵入者を知らせる役目があるのだろうか。

扉は薄く大男なら片手で破る事が出来るだろう。部屋の中を横切って窓を開ける。壁伝いに屋根に上る事も、路地に下りる事もできる。これは、篭城ではなく即時の退却を見越した造りなのだ。

「盗賊らしい、と言えばそうだな」

もっとも部屋の中はそうではない。四歩四方の部屋の中心には巨大なベッドが置かれていた。というよりも部屋の中にはベッドしかない、といった方が正しい。

三人がゆったりと寝転べそうなベッドは狭い部屋には不釣合いだ。宿屋ならば、小さなベッドをたくさん置いて宿泊客を増やすのが普通なのに。

「油断させてブスリ、とくるつもりか？」

頭髪をクシャリと握り締めてつぶやいた。
ならば、とことん隙を見せてやればいい。路地を通ったせいで、汚れ放題になったマントを部屋の隅に放り投げた。靴は脱がずに、剣は手の届く場所に置く。窓に近いベッドの端に寝転んだ。

1章－7　死神の技

目を閉じて耳をすませても、人の気配は一つ。ゆっくりと階段を昇ってくるミラだけだ。やがて、ためらいがちに扉が開かれ、ミラが入ってきてもシーグは身動きをとらずにいた。相手が殺意を持ったなら、建物の外からでも気づく自信がある。一挙動でベルトのナイフを抜くこともできる。

ミラはトボトボと歩いてくると、ベッドの反対側の端に腰を下ろした。そのまま時が止まったかのように身動きしない。食事や水を持ってきたわけでもないし、部屋の掃除に来たわけでもない。薄目を開けて確認したが、そっぽを向いているので表情は見えない。

何かの香水をつけてきたせいか、頭がぼんやりとするような匂いがする。本当に眠ってしまいそうな気がして、シーグは体を起こした。ミラは体をビクリと強張らせ、怯える視線でシーグを見た。

「これから何を始めるつもりだ。俺を朝まで泊めるだけのために呼んだわけじゃないだろ？」

色々考えるのが面倒になってシーグは直接聞いてみた。ミラは顔を赤く染めて、気まずそうに唇をかみ締める。身軽さは盗賊として一人前だが、嘘をついたり演技をするのは苦手らしい。

「わ、分かったわ」

ミラはベッドに上がると、四つんばいになって距離をつめてくる。前かがみの姿勢のために、胸元があらわになりかけている。シーグは目線をそらせて後ずさった。

「何で逃げるのよ！」
「言っておくが、あんた一人じゃ分が悪いぞ」
「私じゃあ、不足だって言うの」
「そうだ。これでもきっちりと訓練を受けているんだからな」

実戦の方が気楽にも思える修行の数々を思い出しかけて、シーグは小さく舌打ちをした。
ロディウスのことを思い出しても、いい事など一つもない。

「く、訓練ですって。じ、じゃあ何人だったら、十分だって言うのよ」
「四、五人は用意することだな。わざわざこんな場所に呼んだのはそのためだろ？」
「な、ななな……」

ミラは舌を絡ませて、顔を真っ赤に染めている。騎士ではあるまいに、一対一の堂々とした戦いを好むのだろうか。いや、それならこんな場所に連れ込むのはおかしい。

「言っておくが、俺はあんたと一戦交えるなんて望んでいない」
「それじゃあ私が困るのよ！」

ミラは足を踏ん張ってシーグに飛び掛ってきた。しかし、猫のような敏捷さもベッドの上では生かしきれない。シーグはミラの手首をつかんで取り押さえる。
何を切羽詰っているのか知らないが、接近戦で武器も抜かずに体当たりとは呆れたものだ。

「痛いじゃない。何をするのよ！」
「何って……」

途方にくれたシーグを見て、ミラは険しい表情を改める。
「ひょっとして、先に服を脱がなくちゃいけなかったの？」
「はあ？」
シーグは間の抜けた声を出して手を離す。すると、ミラはやけくそ気味に体を投げ出して目をつぶってしまった。
決定的な何かが噛み合っていない、シーグは冷静に頭の中を整理する。
巨大なベッド、甘い香り、独特の調度品、だらしなく顔をゆがめる衛兵。そもそも衛兵はこの都に住んでいるはずで、酒場もない宿屋を利用するはずがない。それなのに、宿で何をサービスするのか？
「まさか……」
ようやくたどり着いた答えに、シーグは声を上げそうになった。ここは娼婦宿なのだ。つまり、ミラが訓練とか人数とかを聞いて顔を赤くしたのは……。
「ちょっと待て、誤解だぞ」
シーグは慌ててミラから離れた。ミラは不満そうに体を起こす。
「あんたは盗賊なんだろ？」
「な、何で知って……じゃなくて、違うわよ。絶対に違う！」
毛を逆なでた猫のように反論するミラ。それでは、全面的に肯定しているのと変わらない。

「盗賊が何だってこんな真似をするんだ」
「こんな風に客を取るのも盗賊の仕事なの。子ども扱いするのもたいがいにしてよね！」

いきり立ったミラは、自分で盗賊だと認めてしまっている。そもそも、盗賊の誰もがこういうことをするわけじゃない。それに、ミラは大人顔負けの豊満さだから気にする事は……。

「いや、そうじゃなくて。この町の盗賊たちが俺を追っているんじゃないのか？」

ミラはキョトンとして黙り込んでしまった。とんでもない思い違いをしていたようだ。シーグは頭をかきながら、剣を身に着けマントに手を伸ばす。

「なんなのよ、ここまで来て抱かないで帰るつもりなの、意気地なし！」
「あのさ……」
「絶対に逃がさないわ」
「ちょっと落ち着いてくれ」
「そうだわ。魔術師を気にして盗賊から逃げるって事は、何か変なことをしたんでしょ。白状しなさい！」
「変なのは、あんたのほうだ！」

再び腕をつかみに来たミラを半歩下がって避けた。ミラは勢いを落とさずに壁に向かって頭から突っ込みそうになる。
シーグは、とっさにミラの肩に手を伸ばした。
しかし、それは意味のない心配だった。ミラは素足で壁を蹴り、窓枠に足をかけバク転気味に飛び上がったのだ。
さすがのシーグも完全に不意をつかれた。ツバメよりもしなやか

に空中でひるがえるミラを目で追うことしかできなかったのだ。
ミラは体を丸めながら低い天井すれすれに舞い、シーグの首に足をかけてベッドの上に引き倒してしまう。しかもその後に襟首を腕に絡め、肘を喉に押し当てたのだ。

もしも、ミラが足をひねり上げていれば、シーグの首はへし折れていただろう。
もしも、激突した場所がベッドでなければシーグの頭は砕けていただろう。
もしも、手に刃物を持っていたとしたらシーグの喉は切り裂かれていただろう。
ミラに殺意があったなら、一瞬のうちに三度殺す機会があったのだ。まさに死神の技である。

1章－7　死神の技（後書き）

シーグの戦績、1勝1敗です。

1章－8　綿入り

シーグは身動きがとれず、なすすべもなかった。ミラは腹の上に馬乗りになりシーグを見おろす。ミラの目には、驚きと恐怖の色が浮かんでいる。殺意など欠片もない。

「ねえ！　死んじゃったの？」

ミラはシーグの喉ぼとけをつかんで、力まかせに引き起こした。

「ぢ……じ、ぬ――」

今死ぬ、すぐ死ぬ、これから死ぬ。

首がねじれて、気が遠くなりながら、シーグはうめく。意識が遠ざかり、口の端から泡を吹きだしそうになった時、ようやくミラは両手の力をぬいた。後頭部にガツンと強い衝撃が走ったのは、ベッドの端に頭をぶつけたからだ。

「よかった、生きてた」

ミラは安堵のため息をもらして脱力している。シーグはぐったりとしていた。

薄れゆく視界の隅に銀色に光る河がわずかに見えた。あれこそは、詩人たちの詠う黄泉の河スリーズの姿ではなかったか。

「あ……れ？」

痛む首をおさえ、息を整えながら体を起こしたシーグは目をこすった。ミラの胸がへこんでおり、腹が膨らんでいるように見えたか

らだ。

「な、何をじろじろ見てんのよ！」

シーグがまじまじと見つめると、ミラは胸元を押さえて逃げ腰になる。だが、手に触れる感触に首をかしげ、視線を自分の胸元に下ろした。やはり目の錯覚ではなく、ミラの脇から白い塊が飛び出している。

「綿をつめているのか？」

ミラは目をまん丸にした後、胸元を覗き込む。口が半開きになり頬が真っ赤に染まった。その後、唇をかみ締めて更に顔全体を紅潮させた。熟れたトマトみたいだ、とシーグが思った瞬間。

「悪かったわね！」

ミラはヒステリックな声を上げ、腹に詰まったクッションを取り出して、シーグに投げつける。片方は首だけを動かして避け、片方は受け止める。ミラの体格は年相応以上に起伏が乏しくなり、窮屈に見えていたワンピースがぴったりのサイズになっていた。

ただし、足は太ももはもちろん、その先までもみえそうだ。スカートがほとんど役に立っていない。

「何をがっかりしてるのよ、ドスケベ！」

胸にクッションを仕込んでまで、宿に男を連れ込んだ者のセリフとは思えない。ミラはシーグの腹を踏んづけて立ち上がり、枕を投げてきた。避けるのもバカらしくなったシーグは当たるがままに任せた。もう一つの枕が飛んできた後に、シーグのマントがかぶさっ

てくる。その後、毛布と丸まった布団が飛んできて視界をふさいだ。
さすがに腹が立ってきたシーグが顔を出すと、ミラは両手でイスを持ち上げていた。ワンピースの肩ヒモがずれたままで両手を挙げているせいで、わき腹までも見えてしまいそうだ。素っ裸でいるよりも目のやり場に困る有様である。

「いい加減にしろ！」

怒鳴りつけると、ミラはしぶしぶと言った様子でイスを下ろした。気まずそうにシーグから視線をはずしながら、落ち着かなさげにワンピースの肩ひもを直している。頬が紅潮しているのは、いろんな感情がごちゃ混ぜになっているからだろう。シーグの方でも、視線を上げることができなかった。

「はぁー」

シーグは全身でため息をついた。腹が立つよりも先に、あきれてしまったからである。

間違っても娼婦などが似合う娘ではない。何か複雑な事情があるのだろう。体中にクッションを仕込むなんて、ぬいぐるみじゃあるまいし。
それにしても、メティスの人間は誰もがこんな風に途方もないのだろうか。赤マントやアイフェの行動を思い出していると、妖精のように微笑む少女の姿が崩れてゆきそうな気がする。シーグは乱れた赤毛に手を当てて更にクシャクシャにかき混ぜた。

視線を上げると、心配そうに覗き込むミラの視線をぶつかった。また怒鳴りつけられるかと思ったが、ミラは熟した果実のように顔を赤くしてゆく。

一体どこまで顔を赤くできるのだろうか。

くだらないことを考えていたその時。背筋がピリピリとしびれる様な感触が走った。

敵が迫っている証拠だ。殺意は1階からまっしぐらに迫ってくる。にもかかわらず、物音一つたてない。

「そこから離れろ！」

ミラはキョトンとして座り込んだままだ。殺意は扉をすり抜け部屋の中に入ってくる。周囲に警戒の視線を飛ばしたシーグは、部屋の隅にわだかまる影がむくりと起き上がるのを見逃さなかった。漆黒の狼が空中に現れ、白い牙が刃物のように光る。

1章－8　綿入り（後書き）

中世の宮廷で、服の中にクッションを入れて、スタイルをよく見せるのが主流となった時代があったようです。

これが仮装なのか、変装なのか。詐欺じゃーーと叫ぶかは、個人の好み次第です（＾＾♪。

ちなみに、女性だけでなく男性にも流行った事がありました。あんまりひどいので、法律まで作ったけど、効果がないほどに大人気だったとか。

どこを強調するかというと……。

詳しくは自分で調べてくださいね（＾・＾）。

1章ー9　影に迫る

駆け寄ったシーグはミラを突き飛ばした。ガチンという嫌な音がミラの首があった場所で鳴り響く。

シーグはベルトのナイフを抜くと同時に投げつけた。狼の顔は解けるように消え去り、ナイフは壁に刺さっただけだ。しかし、抜き身の刃のような殺意は強くなる一方である。しかし、敵の姿は全く見えない。

シーグがベッドから飛び降りるのと、シーツをつき破って鋭い爪が飛び出すのはほとんど同時だった。狼はベッドの下に潜り込んでいたのだ。

「このー」

ミラは怒りの声を上げて自分のスカートを跳ね上げる。そして、内股のベルトに潜ませた投げナイフを抜き放ち、ベッド下の狼めがけて水平にナイフを投げつけた。

シーグはギョッとして、今度はベッドに飛び上がった。さっきまで足のあった場所にナイフに突き刺さっている。

「危ないだろ！」

怒りをこめて叫ぶと、ミラの頭上に黒い影が集まっていった。闇の中で白い牙が不吉に光る。

「ミラ！」

警戒を呼びかけたつもりだが、ミラは怯えて萎縮してしまった。シーグはナイフを壁から引き抜き、わだかまる闇に向けて投げつけ

た。ナイフは空中で止まり、闇の動きがにぶる。シーグは腰の剣を抜くと同時に、体全体で闇にぶつかるように突きを放った。

霧のように手ごたえはなく、剣は壁に突き刺さっただけだ。

「後ろよ」

ミラの声でシーグは後頭部をかばって身をかがめた。腕に鋭い痛みが走る。シーグは痛みを無視して、振り向きざまに剣を振り回した。剣先にわずかな手ごたえがあり、ベッドの上に血が飛び散った。シーグの腕に走る三条の傷跡から血が流れて、白いシーツに赤い斑点を更に増やす。

「ひっ！」

ミラが鋭く息を呑む声が聞こえた。闇は見えなくなったが、むき出しの殺意は傷の痛みも忘れるほど全身に突き刺さる。

「影狼（シャドーウルフ）だな……」

召喚魔術（コンジュアレーション）によって呼び出された異界の怪物で、名前の通りに影に潜んで移動する。風が通り抜けられる隙間があればどこにでも進入できるので、これほど暗殺に適した怪物はない。

『もっともたいした脅威ではないぞ』そうロディウスは断言し、鼻で笑っていた。

『好んで使うのは陰気で、自ら手を下す度胸のない臆病者だけだ。つまり、貴様そっくりという事よ。この程度の敵に翻弄されるのは単なるアホウにすぎん。お前は底なしに未熟なので、シャドーウルフと出会えば、未熟なまま死んだアホウになれるぞ。そんなガリッポソでは食うところが無いので、奴らをがっかりさせてしまうだろうがな』とも言っていた。ロディウスの人を馬鹿にした顔を思い出

し、シーグは顔をしかめた。

「今から倒してやるぞ、クソジジイめ」

だが姿は見えないし、剣が有効なのは実体化した一瞬の間しかない。厄介な相手とどう戦うべきだろう。

神経を集中させたシーグは、自分の視界がわずかに揺れるのを感じた。血が滴る腕の傷を中心に、全身に痺れる感触が広がって行く。毒だ。それも、相当に回りが速い。

「ここから逃げろ」

横目で見ると、ミラは両手で顔を押さえてガタガタと震えていた。

「どうした？」

ミラに呼びかけたが返事はない。目の端に涙を浮かべて、小鳥のように震えている。ベッドに飛び散ったシャドーウルフとシーグの血を見て、怯えながらも吸い付けられたように目が離せなくなっている。

先ほど、死神のような技を見せた少女と同じ人物には見えない。

シーグは一か八かの作戦に出ることにした。ナイフを投げつけて窓ガラスを割り、扉を蹴りやぶる。

「魔術師は建物の外にいるぞ！」

ハッタリをかました後、シーグは全神経を耳に集中させる。「ガタン」、と何かにつまづく音が窓の外で確かに鳴った。

「やつは窓の下だ」

大声で叫ぶと外から誰かが駆け出す音が聞こえてきた。シーグはニヤリと笑う。

部屋の中にいないのだから、外にいるのは当たり前のことだ。建物が密集する場所だから、窓なんてどこにでもある。声が届く範囲で部屋の外、窓の下に誰かがいるのは当然のことに過ぎない。

敵は保身のために怪物を刺客にしている。だから、わずかな危機を感じただけで、真っ先に逃げを決め込むのだ。隠れているだけで勝てたのに、自分から居場所を知らせてしまった。

シーグは窓から身を乗り出し、路地を走る人影を見つけた。人影が何かを叫びながら、シーグを指差す。

とたんに、背後に闇が集まってくる。シーグは逆手に持った剣をそのまま後ろに突き出した。ズン、と確かな手ごたえ。シーグの切っ先はシャドーウルフの額から喉までをまっすぐに貫いていた。シャドーウルフは、びくりと身をふるわせた後にぼろぼろと崩れ落ちる。最後には、床の上に真っ黒な炭のような塊が残った。

シーグは血が飛び散ったシーツに毛布をかぶせて隠す。そして、ミラの肩に自分のマントをかけた。恐怖の色をたたえた瞳がシーグを見つめる。泣き出す寸前の子どものようだ。

「ミラ、君は急いでここから離れるんだ」

それだけ言い残すと、シーグは割れた窓から身を躍らせる。そして、闇の向こう側に遠ざかってゆく足音を追いかけた。

1章－9　影に迫る（後書き）

物音を立てて、奇襲や潜伏がばれてしまう。
敵を狙った攻撃が外れて味方にあたる。自爆することさえある。
ＴＲＰＧではよくある（笑）光景ですね。よく起こるのは、私がうっかりだからです。

1章－10　詭道

＊

暗がりであわただしく逃げ回る足音を、シーグは確実に追い詰めていた。

道は暗く、曲がりくねっているがまったく苦にならない。洞窟であろうとも、深い森の中であろうとも、シーグは道と方角を見失わない。ミラが路地裏を連れ回してくれたおかげで、路地裏の地図を頭の中に鮮明に思い浮かべることができた。

シーグは折れた木切れを拾い上げると、前方に投げつけた。逃げる方向から音を聞いた魔術師は「あー」とか「うおっ」と叫び、音から逃げるために道を曲がってしまった。

大きく深呼吸しながら壁に手をつく。毒の回りは以外に速く、意思に反して手が小刻みに震えている。急いで解毒をしなければ、意識を保っていられなくなる。いや、剣が握れなくなるのが先か。

幸いだったのは、毒性が弱かった事だ。万が一にも自分が受けてしまうことを恐れて命にかかわるような毒を避けていたのか。

爪や牙に毒を塗っていたのを考えると、シャドーウルフ自身も毒に犯されながら戦っていたのだろうか。ロディウスによれば、召還師（コンジュアラー）が呼び出した怪物を使い捨てにするのは珍しくはないのだという。

「い、行き止まりだと！」

黒マントは大通りまで響きそうな甲高い声を出した。

「そうなるように、誘導したからな」

シーグは暗闇に向かって言葉を放つ。

「ひぃ！」

暗闇の向こうから切羽つまった魔術師の叫び声が返ってきた。その後もずいぶんと長い間意味不明な奇声を上げ続けていた。

シーグはだるくなってきた体を引きずる足取りで、魔術師を追いかけた。

行き止まりは、１０歩四方空き地になっていた。３階だての建物の壁がそびえ立ち、窓はすべて木戸で封じられている。唯一の出入り口にはシーグが塞いでいた。

町の明かりは一切届かない。四角く切り取られた小さな夜空から星明りが降り注ぎ、町から忘れられた空き地を照らしている。

闇に溶けるような黒ローブの男は、ぐったりと疲れた様子で壁にもたれかかっていた。枯れ木のように体が細いが、シーグよりも頭ひとつは長身の男だ。

「おい、解毒薬を渡せ」

黒ローブはキョトンとした。そして、身を乗り出してシーグをまじまじと見つめ耳障りな高笑い声を上げた。

「そうか、毒にやられておったのか！」

「おかげで今にも死にそうだよ」

ひとしきり笑ったあと黒ローブはすっかり余裕を取り戻していた。もったいぶった仕草で、懐から小瓶を取り出す。

「これが薬だ。欲しかろう？」
「ああ、その通りだ！」

黒ローブに向かってまっすぐに突撃する。黒ローブは勝ち誇った笑みを浮かべ、腕を振り下ろした。

だから、シーグは突然立ち止まり体勢を低くする。案の定、巨大な闇が目の前をふさいだ。シーグは腰ダメの突きを前方に放つ。肉を裂き、骨を砕く確かな手ごたえとともに、シャドーウルフは黒ローブの方へ吹っ飛ぶ。

黒ローブはギョッとしながらも、今度は左から右に腕を振り回す。だから、シーグは迷いなく左側へ剣を大振りにした。剣にずっしりと感じる確かな手ごたえ。飛び掛ったシャドーウルフの肩口を深く切り裂いたに違いない。しかし、地面を蹴る音が聞こえてきた。

シャドーウルフはもう一体いたのだ。シーグは剣をあわてて引くが、構えなおす暇もなく肩に強い衝撃を感じ地面に引き倒された。

闇に白く光る牙が、シーグの首筋に迫る。闇夜の中に肉が引き裂かれ、血が飛び散る嫌な音が響いた。

「仕留めたか？」

黒ローブは歓喜の声を上げて駆け寄ってくる。

「仕留めたよ」

シーグは無愛想に答えると一挙動で立ちがあがる。シャドーウルフの頭頂からはナイフの切っ先が飛び出ていた。シーグは牙をむくシャドーウルフの口にナイフを突っ込み、頭まで貫いたのである。

手首から腕にかけて牙で裂かれた線状の傷が走っているが、首を噛み切られるよりは軽症だ。

「ば、バカな。狼の口に腕を突っ込むとは、貴様正気か？」
「死ぬよりマシだ」
シーグはそっけなく答えた。
「闇夜のシャドーウルフは最強のはずだー！」
黒ローブは両手を突き出して逃げ腰になっていた。どうやら、小細工のネタも尽きたようだ。シーグは剣を逆手に持ち替え、柄を黒ローブのみぞおちに叩きつける。
「ぐあ――」
黒マントは恨めしげにつぶやきながら倒れた。
狼は一体でも手ごわいが、統制された集団戦法こそが真骨頂である。その上、闇に潜んでいても、襲撃の前に居場所を指し示していては意味がない。自分の身を守るばかりの臆病な統括者の下で戦えば、シャドーウルフは本来の力を出せないのだ。
赤マントといい、黒ローブといい、道具や手段ばかりに目を取られすぎて――。
シーグは悪態を中断した。動き回ったせいで、毒の回りも早くなったようだ。黒ローブのポケットを剣で裂き、中身を地面に広げた。
蛇の抜け殻、トカゲの丸焼き、乾燥した羽虫、骨の粉のようなものまで入っている。子どものおもちゃ箱よりも無節操だが、一つ一つが油紙で丁寧に包装されているところを見ると、相当大事なもののようだ。
これらが解毒剤だとしても、飲みたいとは思わない。オゾマシイ

魔術道具一式を見渡した後、黒マントが取り出した小瓶に目を戻した。やはり、これが一番解毒剤のように見える。バカ正直に襲い掛かってくる方向を教える人間が、戦闘中にうそをつく余裕があるとも思えない。

意を決して、小瓶の中身を口の流し込む。泥水のような味が口から喉に広がってゆく。これ自体が毒なのではないかと思ったが、シーグは無理やり飲み下した。

リーザの調合した薬は、おかわりをしたくなるほどおいしかった。だが、それはカエデやハチミツで薬の苦味を消していたからなのだろう。

体の痺れは強くなっていく一方だ。間もなく意識を保っていられなくなる。裂傷ゆえに腕の出血も多い。急いで処置をしなければ。

今飲んだのが毒消しだったのか、毒そのものだったのか。答えは朝になれば明らかになるだろう。シーグは痺れる体に鞭打って、隠れ場所を探し始めた。

1章－10　詭道（後書き）

シーグの戦績
2勝1敗。

なんとか、勝ち越しました。

1章―11　シャープネス―間章―

＊

「さーぷ……何？」
「シャープネス、よ」
キョトンとしたシーグを見て、リーザは人差し指を立てながら先を続ける。
「鋭敏な動き、隙のない洞察、明快な切れ者。その名の意味は様々だけど――」
リーザは詠うように言った。こんな時はいい声なのに、歌を歌おうとするとカエルの合唱のようになるのはなぜだろう。
「シーグにぴったりの言葉よね」
何度も何度もうなずいた後、満面の笑顔でシーグを見つめる。
どこがだ、とシーグは心の中でつぶやいた。
力比べだって同年代の女の子に勝てない。読み書きも、最近ようやくできるようになった。何をやっても覚えが悪いと、リーザ以外の人が口をそろえて言う。
「だから、楽しみにしていてね」
突然言われても、何が何だかわからない。リーザは両手を広げて、山のような形を描きだす。
「すっごい剣を作るのよ」
「……ものすごく、大きいんだね」
残念ながら、持ち上げることさえできそうにない。
「違う違う。小さくて、細くて、かわいい剣なの」
リーザは忙しく両手両足をジタバタと振り回した。リーザの身振りは、ときどき意味不明である。
「このくらいの大きさで、こんなキラキラした刃で、ぐるぐるした柄がついてるの」

言葉の意味はさっぱりわからないが、たぶんショートソードと呼ばれる形態だろう。矢で撃った獲物に止めを刺すために狩人が使い、女性が護身用に持つことがある。レイザークでは未熟者の持つ武器とされており、戦士の武装ではない。強大にして強靭な怪物を倒すことこそ、レイザークの戦士の使命だからだ。だが、練習用の剣さえまともに持てない自分にはお似合いといえる。

そんなことを考えていると、リーザがほほ両側を引っ張ってきた。

「らにをふるほ？」

問いかけてもリーザは「ぐーりぐりー」と外れた音程で楽しそうに歌うだけだ。１０回ほど「ぐーりぐりー」をしてから、リーザはようやく手を離した。

「また、ひどい事考えてたでしょ。自分のことをいじめちゃ、絶対にダメ！」

リーザは片方の頬だけ膨らませていた。少し怒っているときの癖である。

「……ごめんなさい」

シーグが弱々しく言うと、リーザは頬は引っ込んだ。どうやら、機嫌は直ったらしい。

「一人前の戦士には、ふさわしい武器が必要だもん。どんな風にし、よ、う、か、なー？」

僕が戦士になる方が無理かもしれないよ。楽しそうに未来のことを話すリーザの前でそんな事は言えない。

「やっぱり、鞘はキラキラしていないとダメよね」

リーザにとって、刀身よりも鞘のほうが重要らしい。

「だけど、ずっと先のことだよ」

「時間なんてあっという間に経っちゃうわ。私も一生懸命しなくちゃね、ムン！」

リーザは鼻息も荒く、腕に力こぶを作った。いや、作ろうとしたが無理だった。

「ムムム！」

顔を赤くして力んでいるが、女性らしい細い腕には変化がない。
リーザは、力こぶをあきらめてゼーゼーと呼吸を整えている。
「私もがんばるからね。フィーちゃんも協力してくれるって言ってたの。とにかく、魔術だらけのすごい剣なのよ！」
唐突に力強く宣言するリーザ。何かすごいのかわからないが、自信満々に言うからにはすごいに違いない。
「えーと、刃に特別な金属を使ったり、魔術のルーンを刻むのかな。炎とか水とかにも魔術を使うんでしょ？」
「すっごーい、大正解。シーグってば天才！」
リーザは大仰に驚いているが、その程度のことは魔術に詳しくない人でも知っている。
「姉さんの作る剣に、ふさわしい戦士になるよ」
「うん、その時は鎧を作ろうかしら。それとも、盾のほうがいいのかな。あー、もう一本剣を作って二刀流なんていうのもいいかも」
リーザは隙だらけの構えで、両手で柄を持つ仕草をした。それだと、両手持ち（ツーハンドソード）の剣である。
「ああ、大変！」
リーザはこの世の終わりが来たような声を上げた。シーグは飛び上がらんばかりに驚いた。一体何があったんだろう。
「お茶の時間が過ぎてるじゃない。せっかくのケーキが無駄になっちゃう！」
リーザは血相を変えて部屋を出て行った。すぐに、リーザと女の人の大きな悲鳴が聞こえたが「ぶつかってごめんなさいごめんなさいごめんなさい」と繰り返す声と、騒がしいドタバタという音が遠ざかってゆく。
どうやら、リーザにとって剣や戦士の事よりもお茶の時間の方が大切であるようだ。
シャープネス。そう名づけられるはずの剣にシーグは思いを寄せた。
ショートソードを特性を生かすのは、すばやい足さばきと正確な

攻撃だ。軽く薄い刀身で、敵の重く分厚い剣を受け流す技量も必要となる。

毎日やっている走り込みと、剣の打ち込みを更に増やそう。

戦士となりシャープネスを手に戦えるように。そして、サフィリアの行きたい場所へ連れて行ってあげられるように。

1章－11　シャープネス―間章―（後書き）

ようやく出てきました。シャープネス。
前回の（旧）では、文庫本1冊半くらい経過してようやく初出でしたが、今回はだいたい、文庫本で８０ページくらいです。

……もっとも、主人公がメティスにきた理由をまだ明確にしていません。まだまだ、構成として問題がありそう。
未熟を承知で掲載しますが、どうか連載にお付き合いください。

1章－12　6年目のボーイ・ミーツ・ガール

＊

4年前にリーザが自分のために作ってくれた剣。
レイザークの滅んだ死神（サムハイン）の日に、サフィリアが完成させたはずの剣。
それは、今も魔術都市メティスにある。命をかけても手に入れなければならない。

ジュルルル、ブビビビ、という汚い音でシーグは目が覚めた。背中に張り付く生暖かい感触に、シーグは首をねじって後ろを見た。
銀色の頭が背中に押し付けられ、シーグを着ているシャツを白い手がガッチリと握り締めている。
このような特殊な容貌を持つ人を、シーグは一人しか知らない。
「アイフェ……なのか？」
問いかけに対して、アイフェは「フゴー」と鼻を鳴らしただけだ。ひどいイビキとともに、粘り気のある生暖かいものが背中に張り付く。
ヨダレと鼻水が混じったものに違いない。
シーグはゾッとしながら、少女から離れようとした。しかし、アイフェはシャツに張り付いたように離れない。
「起きているのか？」
「プッシュー」
返事の代わり、イビキが答えた。それにしても、ずいぶんと多彩なイビキである。なにしろ「寝てたんだよー」と、ふざけた返事をする少女のことだ。眠ったフリをしているのかもしれない。
シーグはシャツを脱いで、アイフェから離れた。思い切り引っ張

って伸ばしたのだろう。シャツの首元は胴が通るほど伸びきっている。両腕に巻かれた包帯は、今までに見たことがない不思議な巻き方をしてある。

シーグはようやく部屋の中を見回す余裕ができた。樫の木を使ったベッドには、細やかな金の彫刻が施されている。真っ白なシーツとフカフカの毛布は、素人目にも上質のものだとわかる。

絨毯は足が埋もれるのではないかと思えるほど柔らかく、花とツタを意匠化した紋章が描かれている。

壁紙、カーテン、テーブル。部屋のほとんどすべてが真っ白で、天井にさえシミひとつない。この部屋にはホコリが存在できないのかもしれない、と思えるほどだ。水差しは透き通った水晶だし、シャンデリアやロウソク立ては金のきらめきを放っている。

部屋を管理する者の几帳面さが部屋を見回すだけで伝わってくる。一国の特使でさえここまで豪華な部屋に招かれることはないだろう。あまりにも清潔すぎて、シーグは却って窮屈さを感じていた。レイザークの公子とはいえ、豊かな暮らしとは無縁だったのだ。柔らかすぎるベッドは痛む。ワラのベッドの方がよっぽど寝心地がいい。

シーグの持ってきた剣はベッドの脇にかけられていた。汚れきった鞘に収まった貧相な剣はこの部屋にもっともふさわしくない。

「捕まって、監禁されたわけじゃないな」

シーグは昨晩の記憶を思い返した。隠れ場所を探して、窓に木を打ち付けられた廃屋を見つけた。中にはいると、ホコリが雪のように積もっていて、くもの巣が縦横に張り巡らされていた。人の近づかない場所であることを確認してから、眠りについたのだ。

それなのに、どうして見つかってしまったのだろう。だいたい、毒が回っていたとはいえ眠っている間に運ばれ、着ているものまで変えられているのに気づかなかった。

情けなくなってきて、シーグはうつむいて髪をかき回した。ロディウスが聞いたら、文句と嫌味が百は飛び出すことだろう。

大変な事に気づいて、シーグは思わず顔を上げた。
「このシャツって、高いんだろうな……」
上質の絹を思わせるすべらかな感触。たぶん、自分の持ち物すべてを売り払っても弁償できないだろう。今のうちに逃げだそうか。一瞬考えたが隠れても再び見つけられるだけだ。
逃げても意味がないときは、腹をくくるしかない。シーグの苦悩などそ知らぬ顔で、アイフェはシャツにかじり付いたまま幸せそうに眠り続けている。
開け放たれた窓から冷たい風が入ってきて、シーグは思わず震え上がる。シーグは毛布をアイフェの上にかけてやろうと思った、その時。カチャリ、と遠慮がちな音ともに長身の少女が部屋の中に入ってきた。
サフィリアだ。
シーグは一目でそう確信した。実際に見たのは水晶球ごしに数度。それも、数年も前のことである。しかし、見間違えるはずがない。
首元までだった金色の髪は、背中を隠すほどに長くなっている。緑の森を思わせた瞳が、今は澄んだ宝石のようだ。サフィリアがまぎれもなく人間だと確認できて、安堵すると同時に恥ずかしくなった。
水晶球の向こう側で微笑む少女は、実は妖精ではないのか？
6年前にリーザに大笑いしながら否定されたというのに。妖精は詩人の話にしか登場しないとわかっている。それなのに、今まで不安が残っていたのだ。
サフィリアは絹のように白い手を差し出し、楽器を操る吟遊詩人のように指を動かす。優雅な動きにシーグは目を奪われた。
瞬きする間にサフィリアの手には杖が握られていた。まるで手品のようだ。白樫の杖はサフィリアの身長と同じほどの長さで、槍よりも細くて先端が尖っている。
サフィリアが先端を上げると、鋼の冷たさを持った風がシーグの頬を吹き抜ける。ピンッと針金を弾いたような音が背後で鳴り、我

にかえる。振り返ると、窓ガラスに刃の形をした穴が開いていたのだ。

シーグは血の気が引く思いとともに、頭の中がはっきりとした。

「……」

無言のサフィリアは杖の切っ先をシーグにぴったりと向ける。エメラルド色の瞳が、水晶の破片を思わせる鋭さを帯びている。緊迫した空気が満ち満ちてシーグは身動き一つできなかった。そんな中、ベッドのアイフェがムクリと体を起こした。

目をぼんやりとあけてシーグを見つめ、その後にサフィリアの方を見て大あくびをした。

「はっはっひゃー。食べられちゃったぁー」

にへらーと笑った後、アイフェはシーグの毛布を奪い取り、体に巻きつけて眠りについてしまった。サフィリアは肩をわなわなと震わせている。

シーグは氷室の中にいるように、肌があわ立った。錯覚ではなく実際に室内の温度が急激に下がっているのだ。サフィリアの瞳の緑が濃さをまし、怒気が冷気となって吹き付けてくる。

「この変態！」

「な……」

衝撃的な言葉にシーグの頭は真っ白になった。

しかし、鍛え抜かれた戦士の本能は、危機を察知して体をつき動かした。

「ヴォルド！」

掛け声とともにサフィリアは手を突き出す。ベッドから転げ落ちたシーグを掠めて、風の刃が窓ガラスを貫通した。

ガラスは割れずに拳大の穴を穿つ。ガラスを割らずに穴だけを開けるなど通常考えられない。放たれた風の鋭さを示している。同じ事を人間にすれば、体に風穴が簡単にあくだろう。

1章－12　6年目のボーイ・ミーツ・ガール（後書き）

ずっと思っていた人との再会。その一言目がこれでは、立ち直れないでしょうね……。

1章－13　竜が巻く

「ヴェイ」
サフィリアは呪文とともに杖を横に一閃した。走りこみながら上段から振り下ろされる杖を、シーグは起き上がりざまに側転して逃れる。
「アルグラッド！」
サフィリアの気合の声とともに、シーグは風に吹き飛ばされた。春の嵐さえも微風に思える突風に、呼吸さえ詰まる。閉じそうになる目を必死で見開くと、上下逆さまになった壁が目前に迫る。シーグは体をひねって体制を整え、壁に足をついて着地した。
人一人を天井近くまで持ち上げ、壁際まで吹き飛ばしたのだ。信じられない威力である。安心するのもつかの間、サフィリアはすでに杖を構えなおしている。
「なんで、こんなことをするんだ」
「自分の胸に聞いてみなさい！」
サフィリアは肩をわなわなと震わせながら、うつむき加減になった。杖が折れるほどに力がこもっている。
「メティスにつく早々、城門破りをしたり――」
「あー、いや、それはなりゆきで」
「それに、女の子を宿に連れ込んだり」
「違う、連れ込まれたんだ」
「あなたが、ついていったんでしょ？」
「あ、そうだけど……」
「今だって、アイフェに何をするつもりだったの？」
「何って……」
シャツをアイフェに取られ、シーグは上半身裸のままだった。アイフェに毛布をかけてやろうと思っていたが、サフィリアからみれば毛布を取って今にも襲い掛かろうとしていたように見える。半裸

の男が眠る少女の毛布をはがしているのだ。
即座に変態と決め付けられても言い訳できない状況である。
「その上、女の子の頭を丸かじりにするなんて！」
「は？」
突拍子のない言葉にシーグは思わず否定することも忘れた。それは、すでに人間のやることではない。
「ちょっと待て、それは知らないぞ」
「それは？　じゃあ、それ以外はどうなの？」
誤解を招く言い方に、シーグは思わず口を手でふさいだ。あわてた態度を見て、サフィリアの目つきはますます鋭くなる。
「とにかく落ち着いてくれ」
「問答無用！」
サフィリアは指先だけで杖を一回転させて持ち直した。一瞬のうちに杖はレイピアへと姿を変える。もち手には金糸と銀糸を使った精緻な刺繍があり、大玉のエメラルドが輝いている。鋭利な刀身は、風そのものでできているように薄く透き通っていた。
サフィリアは片足を踏み出して、半身に構えた。細剣を軽く持ち、背筋を伸ばしたまま、すべるような動きで間合いをつめてくる。
「ヴォルド――」
再びサフィリアが呪文を唱えた。シーグは条件反射で地面を蹴って前に進んでいた。頬を鋭い風が通り過ぎたのを感じる。
サフィリアも前に踏み出し杖を振り下ろす。シーグは鞘ごと剣を水平にして受け止める。２人の武器がぶつかり十字を描いた。つばぜり合いを見越して、サフィリアが両手で杖を押し出してきた。
「ヴェイ――」
呪文とともに、刀身が風を帯びた。驚くことに杖に触れた鞘にひびが入る。それどころか、焼けた鉄を押し付けられたバターのように、刀身が切断されてゆくではないか。
シーグは速やかに剣を引く。つばぜり合いを見越していた、サフィリアは前のめりになる。だが、サフィリアは手首を返してシーグ

の剣を引っ掛けて跳ね飛ばしてしまった。左手に残った鞘を手に、シーグはサフィリアの側面に回りこむ。

しかし、宝石を思わせる瞳は輝きを失わず、シーグを捉えている。サフィリアは体制を崩しながらも、胴をひねって杖を繰りだした。

「アルグラッド！」

轟と吹き付ける風はその激しさゆえに無音であった。

シーグは地面に転がった。剣を捨てて地に身を投げ出すことは、騎士ならば一生の恥とも言われるがシーグには関係ない。

壁に跳ね返った風が渦巻き、窓ガラスが砕け散る。えぐれた壁と巻き込まれたテーブルが屋外へと吹き飛ばしていった。小さな竜巻はドリルのように絨毯を巻き込んで穴を開けている。渦巻く風の奔流をして竜巻、竜が巻くとはよく言ったものである。

杖からレイピアへと姿を変えたことで、風の威力は更に増している。だが、シーグは無傷であった。風に背を押される形でサフィリアの背後に逃げたからだ。

「レイピアで鉄の刀身を切り裂くなんて……」

速さを重視する一方で威力を弱め、切るよりも突きの攻撃に特化されたのがレイピアだ。しかし、魔術が関われば細剣の速さと、大剣の威力を併せ持つことができるらしい。まっとうな鍛冶師が聞けば、悲鳴を上げるだろう。

離れれば風の刃が襲い掛かる。打ち合えば刀身さえも切断される。接近すれば吹き飛ばされる。

剣術と魔術を組み合わせた攻防一体の三段構えだ。攻撃に特化した赤マントや、守りにかたよる黒マントの何倍も脅威である。

「往生際が悪いですよ」

サフィリアは部屋の中央に立ち、冷たくよそよそしく言った。姿勢にも目配りにもまったくの隙がない。

嵐の後のような惨状もサフィリアの周囲にはまったく及んでいない。。ローブには乱れもなく、風に髪をなびかせながらサフィリアは振り返った。破壊の傷跡を背にして、毅然と立つ姿は白大理石の

彫像を思わせる。
「誤解なんだ」
シーグの切実な叫びの返答は、無言での鋭い突きだった。シーグが後方によけると、一瞬後に次の突きが来る。横に逃げようとすると、なぎ払う一閃が先回りする。剣はすでに折られ、シーグの手には鞘だけだ。いつの間にか背後は壁となっていた。
これは偶然ではない。サフィリアの攻撃とともにシーグはアイフェの眠るベッドや、扉や窓からも遠ざけられた。徐々に狭くなってゆく部屋の角に追い詰められているのだ。
強靭な怪物や打ち倒し、強固な鎧を破壊するための剣術ではない。効果的に確実に人間を追い詰め、戦力を削り取り、仕留めるために計画的に戦う。
まるで、王取り将棋（シャトランジ）の名手のようだ。

1章－14　風を捕らえる

「頼むから話を聞いてくれ！」
シーグは両手を広げて無抵抗の意思を示す。
「6年ぶり声を聞けたのに、これはないだろ？」
こみ上げる感情とともに吐き出した声は、かすれていたかもしれない。サフィリアはレイピアの切っ先を下ろし、表情の厳しさが消えていた。
ホッとするのもつかの間、シーグはギシリという嫌な音を聞いた。サフィリアの頭上にあるシャンデリアが、大きく揺れて軋んでいるのだ。シャンデリアを天井に繋いでいる金具を中心に、くもの巣のような細かなヒビが広がってゆく。
「とにかく、そこから逃げてくれ。危ないぞ」
シーグが警告すると、サフィリアの表情がこわばる。
「シャンデリアが今にも落ちて――」
「黙りなさい！」
厳しい言い方にシーグは思わず口を閉ざした。サフィリアは、唇を引き結んで険しい視線でにらんできた。丁寧な言葉の裏に押し殺した怒りが潜んでいる。
「追い詰められた状況から口先三寸で逃れるつもりですね。戦いの最中に言葉で相手を惑わせるのが、あなたの戦い方なのしょう？」
「あ、いや、それはそう……だけど」
シーグは思わず言葉に詰まった。赤マントと黒ローブとの戦いだけではない。ちょっと思い出すだけで、心当たりがありすぎたからだ。
しどろもどろになっていると、サフィリアは首を横に振った。疑惑が確信に変わったのだろう、軽蔑の視線がシーグに突き刺さる。
「とにかく、違うんだ。だから――」
「嘘つき……」

辛うじて聞こえるほどの涙声は、それゆえにシーグの胸をえぐった。息をすることも辛くなり、心臓が凍りついたように痛む。世界がひび割れて、崩れてゆくような錯覚にとらわれる。

命取りの座（シージペリラス）であるために、吉兆を願う季節の祭りにも参加できなかった。それでも、リーザと水晶球ごしに励ましてくれるサフィリアがいてくれた。薄暗い部屋の中で語られたサフィリアの言葉は、外から聞こえてくる祭りの喧騒よりも貴重だった。

決して詩人の詠うような出会いを期待していたわけではない。だとしても、これはあんまりだ。ロディウスが高笑いする声が聞こえてくる気がした。

メリメリと破滅の音を立てるシャンデリアの音がシーグを現実に引き戻した。

サフィリアはシーグの心臓にピタリと切っ先を向ける。こんな状況で竜巻を呼べば、間違いなくシャンデリアは落ちてくる。しかも、警戒したサフィリアは動くつもりがないようだ。風の魔術を封じて、力づくでサフィリアを移動させなくてはならない。５歩動けば安全な場所に逃れられる。

５歩！

数歩の長さであっても、地平線の果てよりも遠く感じる。爪の幅ほどの距離が、長さが、厚さが勝負を決めるのが戦いだからだ。しかも、シーグの手には鞘だけである。更に相手は魔術と剣を同時に使えるときている。

絶望的な状況にありながら、シーグはサフィリアの戦い方を頭の中でめまぐるしく回想する。風を放つレイピアを思い返した時、シーグは閃くものがあった。一瞬の隙をつけば、魔術を封じることができるはずだ。

シーグは前かがみの姿勢から疾走する。サフィリアは一歩下がって構えなおした。繰り出される突きをシーグは鞘で払いのける。やはり、魔術を使い風を纏う前ならば、サフィリアのレイピアも常識はずれの切れ味ではないのだ。

「ヴォルド！」
サフィリアは武器を持っていないほうの手を振り下ろす。シーグは地面を蹴って横にステップする。案の定、風の刃は立て続けに床に突き刺さった。
ヴォルド、の声とともに打ち出される風の刃は直進するだけだ。そして、魔術ゆえに呪文が必要で予備動作が大きくなる。火球を投げる赤マントや、シャドーウルフを操る黒ローブと同じなのだ。
サフィリアは二歩下がって、レイピアを構えなおした。刀身に風をまとわせるつもりだ。
シーグは腕を一杯に伸ばして鞘を突き出す。だが、サフィリアは平然としていた。間合いが遠すぎ、お互いに腕を目一杯に伸ばしても届かないと判断したのだ。
「ヴェイ！」
呪文の声と同時に、シーグは鞘を投げつけた。しかも、ただ投げたのではない。サフィリアの構えるレイピアの刃をすっぽりと鞘の中に納めたのだ。魔術は完成し、風を纏ったレイピアは鞘を粉々に打ち砕く。破片が飛び散ったせいで、サフィリアは思わず顔を背けた。
シーグはサフィリアの懐に飛び込み、レイピアを持つ側の手首を掴む。抵抗するサフィリアの腰に手を回し、強引に担ぎ上げた。
あと、一歩。
シーグの胸に陶器のように白く、氷の感触がする手が当てられた。サフィリアは瞳の端に涙を浮かべている。
「アルグ――」
同時に天井が崩壊し、石とガラスと金属の凶器が雨のように降り注ぐ。最後の一歩をシーグは着地のことなど考えずに前に跳んだ。
地震が生やさしく思えるほどの振動と轟音が屋敷全体を揺るがす。
シーグは空中でサフィリアを抱き寄せ、体を回転させて左肩から床に落ちた。骨がきしむ痛みに気が遠くなる。幸いなのは床にやわらかい絨毯が敷いてあったことだ。そうでなければ、肩が外れるか

骨折していただろう。

1章－14　風を捕らえる（後書き）

二勝一敗、一分け。
戦闘メインの小説なのに、勝率が５０％しかない主人公でした。

1章－15　ヘソ出し半裸

そんな事よりもサフィリアが気がかりで、シーグは痛む体を無理やり起した。

胸に当てられた手が爪を立てたので、シーグは思わず顔をしかめた。サフィリアは驚きの表情で、落ちてきたシャンデリアを見つめている。小さな肩は小さく震え、力の入った指はガラス細工のように儚く見える。こんな体でよく勇猛果敢に戦えるものだ。髪からは鼻をくすぐるよい香りがした。

これはライノールの香水だ。

小さな花を一杯につける野草で、レイザークにしか咲かない。日当たりのよい野原に群生し、一面を太陽の黄色に染め上げる。春の収穫祈願祭（インボルグ）の到来を知らせる春の花なのだ。ごくありふれた花だったが、レイザークが魔境に飲まれてから見たことはない。

サフィリアがゆっくりと振り返り、上目遣いにシーグを覗き込んだ。瞳は涙でうるみ、唇は何か言いたげに小さく開かれている。何かを訴えかける仕草にシーグは逃げ腰になりながら思考を総動員する。何も閃めかず、目線をそらしてキョロキョロするしかなかった。

そこでサフィリアの手首を掴み、腰に手を回したままだったことにようやく気づいた。

「うわわわわ、ごめん」

シーグは大慌てで両手を挙げて、逃げるようにサフィリアから遠ざかった。サフィリアは所在なさそうに手首を押さえており、暗い表情は晴れない。シーグは胸が高鳴り、頭に血が上るのをとめられなかった。命の危機の最中で味わう戦慄よりも感情に押さえが利かない。一呼吸する時間が無限にも感じられる。

必死に解決策を考えるが、何も閃くものはない。本気で息苦しくなったとき、ノックもなく扉が無遠慮に空けられた。

「サフィリア、無事のようですね」

大またに部屋に入ってきて、戦場の跡よりも壮絶な部屋の中を見ても顔色一つ変えない人物は……。
「……レンダ、だよな？」
「あなたはシーグさんですね？」
自信なく問いかけると、レンダは事務的に答えた。
貴族にさえ見える整った衣装と、生真面目な態度。いつも皮肉な話し方をする商人とは別人にしか見えなかったのだ。それとも、双子の兄弟でもいるのだろうか？
「騒動を聞きつけて、屋敷の者たちが不安がっています。説明をお願いします」
レンダが早口で伝えると、サフィリアはスッと立ち上がった。扉に手をかけた時、動きを止めてシーグをじっと見る。
「妙な噂が立つ前に早く」
急かされて、サフィリアは部屋から出て行った。軽快な足音が遠ざかっていったのを確認すると、レンダは肩をすくめ、皮肉そうに片方の眉と唇の端を吊り上げた。それだけなのに、雰囲気が一変する。
「しっかし、派手にやりましたねぇー」
いつものレンダだ。シーグはそう思った。これなら、王冠や仮面をかぶっていようが見分けがつく。
「白昼堂々と女性を押し倒すとは……侮れない」
レンダはあごに手をかけて、一人何度もうなずいている。
「しかも、相手はメティスの輝石と称えられるサフィリア・フェルナンディだ。さては、あなたは三国一の勇者ですね？」
両手を広げて、シーグに問いかける。レンダの態度は舞台に立って観客に話す詩人のように芝居がかっていた。
「褒めているように聞こえないぞ」
「そりゃ、褒めてませんもの」
レンダはしれっと言い放った。アイフェが「ひゃっひゃっはーー」と謎の寝言を叫んで再び静かになる。

「何をしたいんだ?」
「嫌味、あてつけ、吊るし上げ。だいたいそんな感じですよ」
レンダはにっこりと微笑んだ。慇懃無礼を絵に描いたような態度を、シーグは顔を背けて全力で無視した。
「城門でいざこざを起こした挙句に逃走し城門を乗り越えた後にアイフェの頭をかじる大通りで変装をした後に娼婦と一緒に宿に入って俺は5人くらいの女と寝ないと満足しないとか言ったと思ったらマイリグの呼び出したシャドーウルフに襲われて宿を破壊するわなんとか倒したものの毒に犯されて意識不明に陥るわあなたは一体何をしたくてメティスにきたんですか?」
レンダの言葉は川の流れのように淀みない。シーグは怒りをかみ殺して黙殺する。レンダは無視を決め込んだシーグの正面に回りこんだ。
「ところでそこのヘソ出し半裸さん」
「誰がだ!」
うっかり言い返してしまうと、レンダは友好的な笑みを見せた。というよりも、気の毒な人を微笑ましく見守っている視線といった方が正しい。
「あなたの事ですよ。とにかく服を着てください。あなたの露出趣味のせいで、私が同類だと思われたらどうするんですか」
レンダが投げつけたシャツを受け取り、シーグは袖を通し首を突っ込んだ。
「安心してください。世の中にはもっと深淵な変態が無数にいます。あなたが底辺というわけではありませんよ。稀代の変態を極めるとしてもその道は果てしない」
レンダは彼方を仰ぎ見る旅人のような視線になったので、シーグはひたすらに無視した。

1章－16　風の噂

「ところで、毒は抜けていますか？」
「痺れた感じはない。解毒剤が効いたんだろう」
腹立ちが収まらないので、シーグはぶっきらぼうに答えた。
「あなたがマイリグから奪った解毒剤なら効いてませんよ。あれは塗り薬でしたから」
「は？」
「だから、飲むんじゃなくて傷口に塗るものなんですよ。私としては、腕の傷よりもあなたの腹の調子が心配です。原材料がど……じゃなくてアレですから」
「アレってなんだ？」
「……」
「毒なのか？」
レンダは無言のまま遥か彼方を見る視線になった。
ドロリとした舌触りは、いったい何だったのだろう。シーグはなんだか急に気分が悪くなってきた。
「最も、あなたが持っていた空き瓶から毒の種類が特定できました。全くムダだったわけじゃありません。サフィリアの探索が遅ければ、気の毒なことになっていたかもしれませんけどね。それで、傷は痛みますか？」
シーグは複雑に巻かれた腕の包帯に触れた。裂傷独特の焼け付くような痛みはなく、直りかけ特有のむずかゆさを感じる。狼の口に突っ込んだ右腕の傷は深かった。最低でも完治までに一月以上はかかるはずなのに。
「おっと、包帯を解いたらダメですよ。魔術の品物なので、巻き方にも意味があります。それは、リーザ・オーメントの作品ですから。その程度の怪我が一晩で治るのは驚くことじゃありませんよ」
「リーザ姉さんが？」

素っ頓狂な声を出すと、レンダは横目でにやりと笑った。
「積層の練磨（ブルーフアゲインスト）のリーザ・オーメント。神秘を意のままに操るメティスの魔術師達をして、奇跡の技の使い手と賞賛された逸材でした。魔術の歴史を変える稀代の天才といわれていたんですよ」
いつでも食べることに夢中で、簡単な手順も間違うほどドジだった。呪文を唱えれば、歌を詠ったときと同じほどひどくなる。本当に魔術師なんだろうか、と疑問に思っていたのだが。
「うそだろ？」
「ええ、ええ。どうせ、私は嘘つきですよ」
レンダは感情のこもらない声で吐き捨てた。
「なので、別に信頼してもらわなくて結構です。お好きにどうぞ」
投げやりな言い方だが、目つきが笑っている。別に怒っているわけではなさそうだ。それに、レンダの言うことをまともに聞いていれば、混乱するだけである。
「なんで、俺の行動を何でもお見通しだったんだ？」
「まるで、聞いてきたようじゃないか。そう言いたい訳ですね」
レンダは見事にシーグの心の中を言い当てる。
「一陣の風（リヴァーウィンド）のサフィリア・フェルナンディが調べたからですよ。彼女がこの街で風の魔術を使ったら、メティスで隠し事をするのはほとんど不可能。風の記憶をたどって行けば、音に関する事で一日以内ならだいたい完璧です」
「……勘違いも混じっていたぞ」
「ほとんど、だいたい、と言ったでしょ。それに、『音』に関しては間違っていないはず。アイフェが『食べられたくありません』って言ったのはどうです？」
「あれは立ったまま急に寝て、いきなり寝言を言ったんだ」
よく考えてから、信じてもらえるはずがないとシーグは思った。
「なるほど」
意外にもレンダは深くうなずいて納得している。
「よくある話ですね。空から降ってくるだって珍しくない」

「なんだと?」
「驚くことじゃありません。魔術都市なんでよ。さて、次は宿屋での話です。『先に脱いでおくべきだった』、と少女が言う。言い争いがあって、押し倒したとしか思えないベッドの軋みが響く。そして、少女の服の中にあるクッションをあなたが発見した。普通はどういう状況を思い浮かべますか?」
ミラを押し倒し、服を剥ぎ取って『ガッカリした』という展開がシーグの頭に浮かんだ。
「声と音だけで判断したら勘違いはする。だけど、これだけ立て続けだと人格そのものを疑うのは当然でしょ?」
シーグには返す言葉もなかった。
「だけど、サフィリアは勘違いだと決め付けていました。所詮は『風の噂』に過ぎない。あのシーグがこんなことをするはずないってね。直接会ったこともないのに相当信用されていますよ、あなた」
サフィリアが爪を立てた胸の辺りがズキズキと痛みだす。
「この場合、正確に『信用されていた』というべきでしょうか。彼女が信じたかった事を、あなたが裏切ったわけだ。これはただ事じゃない」
止めを刺された気持ちでシーグは手と膝を床についた。全身の力が奪われてゆくようだ。
「私は疑いのない変態行為を現行犯でやった、あるいは疑惑を招くことをしたと推理します。違いますか?」
つまり、シャツを脱いで上半身裸でアイフェに毛布をかけていた時だ。
あの時にうつむいていたサフィリアはどんな表情をしていたのだろうか。それに、涙を浮かべた瞳で、自分をどんな風に見ていたのだろうか。「嘘つき」というつぶやきが、耳によみがえる。
「これは悲劇といえるでしょう。すべては無情のままに終わるもの、この世に救いなどありません」
レンダは夢も希望もない言葉で締めくくった。シーグは底なし沼

に飲まれてゆくように足元がおぼつかず、息苦しくなってきた。

1章－16　風の噂（後書き）

舌戦無双のレンダでした。

シーグ・舌戦の戦績

0勝1敗

大黒星

1章－17　命取りの座

「質問がないのなら、お話の時間はここまでにしましょうか？」
「あんた、いったい何者なんだ」
サフィリアと親しげに呼び、リーザのことも知っていた。これほど立派な屋敷で、王侯貴族並みの服を着こなしている。間違っても一介の商人ではない。
「一介の商人でレンダ・マイルズといいます」
ふざけた答えにシーグは顔をしかめると、レンダはにっこりする。
「年齢は２０歳、独身。好きな食べ物は安っぽくないもの。きらいな食べ物は安っぽいものです。これでいいですか？」
「ふざけるな」
シーグが語気を荒げると、レンダは驚くほど長い舌を出した。
「やなこった。ちなみにこの屋敷は私の持ち物ですよ。重犯罪者をかくまってるのに、感謝の言葉の一つもないんですか。ベロベロバー」
どういうしゃべり方をしているのか、レンダは舌を左右に動かしながら淀みのない声を出す。
「犯罪者だって？」
「自覚がないとは恐ろしい」
「城門で戦いはしたが勝手に襲い掛かって、勝手に自爆したんだ」
「ですね」
「シャドーウルフを呼び出す黒ローブに、殺されそうにもなった」
「犯罪かどうかは法の守護者が決めることです。レイザークとは違い、このメティスで公平な裁きを受けられると思わないことです」
レンダは強引に話題を打ち切り舌を引っ込めて、衣服と姿勢を整える。気配までも別人のように変えた途端、途端に荒々しい足音が近づいてきた。１０人以上いるのは間違いない。
扉が蹴破らんばかりの勢いで開く。現れたのは琥珀色の髪と、灰

色の瞳の男だった。金糸のあしらわれた胴着、指に光る指輪はどれも大玉の宝石が輝いている。戦神の像を思わせる体格でありながら、礼装が当たり前のように着こなしている。

「これはこれはガリウス様」

レンダは深々と礼をしてガリウスを出迎えた。破壊の限りを尽くされた部屋の中には明らかにふさわしくない。

「貴様、ここにいたか！」

チリチリになった髪、甲高くて耳障りな声。一瞬誰なのか迷ったが、肩に小さな赤マントを巻きつけているので、赤マントに違いない。

「こいつです。間違いありません」

陰気な声の主は疑うまでもない。昼間なのに全身をすっぽりと黒ローブに包んでいたからだ。

確か、名前は……何だったか忘れた。名前を聞いたのか聞かなかったのかも忘れたが、シーグにはどうでもよかった。

もっとも危険なのは、今注意するべきは、先頭に立ち殺意混じりの視線を向ける大男だからだ。武装していないのに、抜き身の刃を突きつけられているような気がする。

「城門破りの罪で貴様を拘束する」

「それは妙ですよガリウス卿。私も同時刻に現場にいましたけど、彼は門を突破していませんよ。私が見たのは、爆発するチャリオットです」

「口を挟むな」

「それに、黒い狼が夜中に街を走った――」

「レンダ・マイルズ！」

ガリウスは一括した。部屋の窓ガラスがびりびりと震えるほどの大音声である。低いがよく響き、威圧感と緊張感をはらんでいる。戦場で命令を下し、敵を威圧することに慣れた声だ。

「赤毛の男を拘束しろ」

ガリウスの命令と共に赤マントと黒ローブが進み出て、後に灰色

のローブを着た魔術師が近寄ってくる。すると、シーグをかばってレンダが立ちふさがった。ガリウスの表情がひび割れた岩山のように険しくなる。

「ここは私の屋敷ですよ。主人を無視して勝手に話を進めないでください」

「ならばレンダ、犯罪者の引渡しに協力せよ」

「いくら私が商人でも、客人は売れません」

おどけた返答にガリウスは鋼の刃のように目を細くした。熱さえもはらむ武人の怒気を、レンダは涼しい顔で受け流している。

緊迫した空気が両者の間に漂った。軽やかでリズムのよい駆け足はサフィリアだ。「そちらに行ってはなりません！」と、制止を呼びかける声と共に近づいてくる。

サフィリアが部屋の中に飛び込んでくると、赤マントと黒マントをはじめ魔術師があわてて頭を垂れる。

「シーグ、無事ですか？」

サフィリアの悲壮な声が、部屋中をギョッとさせた。

「あっちゃー、名前を言っちゃった。最悪ですね」

レンダは困り果てた様子で、そっぽを向く。

「シーグだと？」

ガリウスの言葉に頭を垂れる魔術師たちが一人一人顔を上げて、シーグに注目した。

「赤い髪に黒い瞳。十代半ばの少年、名前がシーグ」

ガリウスは確認するようにシーグの特徴を淡々と口にする。

「つまり、こいつはレイザークの命取り（シージ ペリラス）の座なのだな？」

1章－18　風と鉄の衝突

「死んだはずでは……」
「まさか、死の道から復活したというのか！」
ガリウスの魔術師たちは一斉に後ずさった。
「まるで、化け物扱いだな」
「実際そのとおりです」
シーグが腹を立てていると、レンダが口を動かさずに追撃する。
実際に赤マントなどは部屋の外まで逃げ去っているし、黒ローブはガリウスの背中に隠れてしまった。魔術師たちの中でただ一人、ガリウスはシーグの前に進み出る。
「滅んだ国とはいえ、王族には違いありません。とりあえず、牢獄に放り込まれる事はないでしょう」
「じゃあ、これからどうなるんだ？」
「知りません。ちなみに私はドキドキしています」
レンダは瞳を楽しそうに輝かせ、わずかに口元を緩めている。これからロクでもないことが起こるのだ。
何か思い立ったのか、ガリウスは顔を上げて岩のような表情でシーグをにらみつけた。
「シーグ・ペイラック卿。メティスによく来られた」
意外にも王族に対するように礼をするガリウス。シーグは逆に気色の悪いものを感じた。その証拠に全身から湯気のように上がる殺意は増す一方だ。
「如何なる要件があって、御身をメティスに運ばれたのです」
「ええと……」
「何の用事でここに来たんだ、って聞いているんですよ」
言葉の意味がわからなくて、途方にくれるシーグにレンダが助け舟を出す。
「シャープネスを受け取りに来た」

隠しても仕方がないので正直に答える。サフィリアは辛そうに唇をかみ締めうつむいた。
「なるほど、『異端者の剣』を受け取りに」
「……異端者？」
シャープネスを作ったのはリーザとサフィリアである。まるで、2人を異端者と言っているようではないか。
「滅んだ国とはいえ王族であるなら事前に通達を行い、堂々と来訪されるべきでしょう。何ゆえ、我らの面目を踏みにじる行いをなさるのか。これが侮辱でないのなら、あなたの言い分を聞かせていただきたい」
あまりに早口なのでやはり意味が分からない。レンダに助けの視線を送ったが、そ知らぬ顔で何も言わない。
「つまり、我々を侮辱している。そういうことですな？」
ガリウスは背筋を伸ばし怒声を強めた。
手前勝手なひとり決めにシーグは呆然とした。ガリウスは手袋を取ってシーグの胸元に投げつける。
「我、ガリウス・グラムファーレは、傷つけられた名誉にかけて『剣の法』による裁定を願い出る」
「おお！」
魔術師たちが歓声をあげるのを聞き、受け止めた手袋を確認する。そこで、シーグは決闘を挑まれているのだとようやく気づいた。
「受けてはダメ！」
サフィリアが悲壮な声を出してシーグに近寄ろうとする。しかし、魔術師たちが立ちふさがって行く手をふさいだ。
「えらいこっちゃ」
レンダは人事のようにつぶやく。まるで耳元でささやく悪魔だ。
「受けなかったらどうなるんだ」
「臆病者の犯罪者として、メティスの魔術師総出で叩き潰そうとするでしょう」
つまり、また暗殺者が派遣されるのだろう。

「受けたら？」
「決闘の場で、ガリウス卿が全力で叩き潰しにくるでしょう」
「選択権がないように思うが？」
「死に場所を選べますよ」
遠慮の欠片もない返答。シーグはレンダの方に決闘を挑みたい気分になった。
「おどきなさい！」
ヴン、と風が吹き抜け魔術師たちが吹き飛ばされた。手に空色のレイピアを持ち、魔術師たちをけん制する。渦巻く風にサフィリアの金色の髪が大きく揺れる。
「何のつもりだ、サフィリア」
ガリウスは、刃そのもののような視線でにらみつける。サフィリアはレイピアを斜めに振り下ろし、切っ先をガリウスに向けた。
「決闘の申し込みを撤回してください！　彼はただメティスに来ただけです」
「……」
「シーグはレイザークの王族なのですよ」
「だから、『剣の法』に訴えている。これは『公平な場での裁き』になる」
「決闘は相手が断れば成立しませんよ」
「その場合には、シーグ卿にはメティスに逗留していただくことになる」
「幽閉の間違いではないのですか！」
ガリウスは沈黙で問いに答えた。サフィリアの激しい感情を示すように、風で髪が激しく揺れる。
「ヴォルド・ヴェイ――」
呪文の詠唱を聞いて、ガリウスの瞳が大きく見開かれた。その後に苦渋の表情を見せてサフィリアに向き直る。
「アルグラッド」
一陣の風と共に、矢のように突っ込むサフィリア。その余波だけ

でシーグは思わずよろめいた。ガリウスは一歩も動かず、手を平を前にかざして、短く唱えた。

「バリアス」

金属板が打ち合わされるような音と共に、サフィリアは吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。手から離れたレイピアは杖へと戻り、サフィリアはぐったりとして動かない。

「フィー！」

シーグはとっさに腰に手をやったが、武器は先ほどの戦いでなくなっている。投げナイフさえなく、手にあるのはガリウスの手袋だけだ。それでも、サフィリアを傷つけた者を許してはおけない。

「これは返すぞ、ガリウス！」

シーグはこれ見よがしに手袋をガリウスに突きつけた。しゃがみ込みながら反転して背中を向け、勢いよく体を翻してガリウスに向けて投げ付けたのだ。

「バリアス」

ガリウスは微動だにせず、抑揚のない声で呪文を唱える。見えない壁に当たったかのように、シーグの投げた物は空中で動きを完全に止めていたのだ。

「魔術の防御壁か」

「手袋で顔を狙うとは、礼儀も知らんようだな。田舎育ちの公子にふさわしい」

ガリウスは生真面目な顔で吐き捨てる。シーグはにやりと笑い返した。

「育ちが悪いものでね。だったらその軽そうな頭を狙ったのは、更に礼儀知らずになるのか？」

シーグは大げさに肩をすくめ、靴下だけになった右足を上げた。ガリウスはいぶかしげに眉をひそめる。

その時、パサリと音を立ててガリウスの頭の上に皮手袋が落ちてきたのだ。魔術の防御壁で止められていたのは、シーグの皮靴だったのである。

「レイザークのシーグは、ガリウス・グラムファーレに決闘を挑む。受けるか？」

怒りに震えるガリウスの顔を指差し、シーグは挑戦的に言い放った。

1章－19　デスマッチへの招待

周囲を完全な沈黙が支配していた。
辛らつな侮辱に対して、さぞかし壮絶な報復が来るに違いない。シーグは必死に策を練るが、逃げる以外の選択肢が思いつかなかった。
しかし、魔術師たちもガリウスも、レンダでさえも驚きの表情を浮かべて動きを止めて完全に固まっているのだ。
自分は何をやってしまったのだろうか？
当の本人であるシーグだけが理解できず、頭をかくしかできなかった。
「ま、まさか」
「アイアンシールドの守りを突破するとは……」
周囲にいる人々は口々につぶやき目を見開いている。
「き、貴様ぁー」
ガリウスがわなわなと震えながら、頭の上に乗っていた手袋を左手でむしり取った。右手の人差し指をシーグの胸に向ける。戦士の本能がわが身を守れと命じる。
「バリアス」
とっさに胸をかばった腕に鉄の塊がぶつかる衝撃が走った。シーグは自ら後ろに飛びのくことで、体勢を立て直す。
サフィリアの風よりも重い。至近距離で受けていれば、腕が折れていただろう。
「心魂、粉砕、撃滅。来たれ、報復者（アヴェンジャー）の大剣！」
突然、ガリウスの手に幅広の剣が現れた。シーグの胴よりと同じほど太い刀身には、青白い光を絡みついている。柄には巨大な黒玉（ジェット）がはめ込まれており、刀身は魔剣らしい不吉な輝きを放っている。
受ける手段などないから、かわすしかないが……。
ガリウスは大剣の切っ先でシーグの胸を指した。ガリウスとの距

離は十歩はある。突くには遠すぎる間合いだったが、そこに秘められた殺意をシーグは見逃さなかった。

「ウーンズ！」

かけ声よりも前にシーグは動き出していた。だが横目で背後を見たとたん、動きが止まる。足を踏ん張って身を固めたシーグに魔術が襲い掛かる。無形の衝撃に全身がバラバラに引き裂かれるような痛みが走った。生暖かい鉄の味が喉から口にあがってくる。

ガリウスは離れた間合いをつめるべく、大またに近寄ってくる。シーグは腰を落として、相手の出方を伺うしかできない。体は鉄になったように重く、足が動かなかった。

「そこまで！」

突然、レンダがシーグの前に割って入った。

「どけ、レンダ」

「アイアンシールド卿、ガリウス・グラムファーレ。私の屋敷でこれ以上の狼藉は許しませんよ」

ガリウスは完全に無視している。レンダはニヤリと薄笑いを浮かべた。

「決闘を挑まれながら、不意打ちを仕掛けた卑怯者として名を残したいですか？」

嫌味ったらしい一言で、荒ぶるガリウスは足を止めた。

「それでは、アイアンシールドとグラムファーレの名に泥を塗ることになりませんかね？」

ガリウスは唇を噛み破り、血を流している。憤怒の表情でシーグをにらみながも剣を下ろした。すると、大剣はガリウスの手に吸い込まれるようにして消えてしまった。

「……シーグ・ペイラック。決闘の申し出を確かに受けたぞ」

顔を背けながら低い声でガリウスはつぶやく。血の上った顔は噴火する前の活火山のようだった。

「決闘のルールは？」

「ルールは『ヴァンガード』。場所は『アクリアエ・スリス』。日

時は明日の正午だ」
「了解しました。私が証人となりましょう」
レンダは懐から、宝石細工のついたナイフを取り出した。指の先を突いて、自分の血をナイフに塗りつけると、柄をガリウスに向けて差し出す。
ガリウスは怒りに顔をゆがめていたが手に持った剣を消した。ナイフを受け取って、指の先を突く。膨れ上がってくる血の玉をナイフの刃の反対側にこすり付けた。
レンダはうやうやしく血に染まったナイフを受け取ると、今度はシーグに向かって差し出す。
「動けますか？」
体がバラバラになったようで、腕を上げるのも辛い。それでも、シーグは無理やり腕を動かしてナイフを引っつかむ。揺らぐ視界の中で片膝をつき、指先で床に触れる。見当をつけてナイフを石の床の継ぎ目に振り下ろした。澄んだ音を立てて、血刀は石畳の隙間に真っ直ぐに突き立てた。「おお」と周囲から感嘆の声がもれる。
「ウーンズの直撃を受けて、動けるのか……」
黒ローブはつぶやき、魔術師たちは怯えて後ずさる。
「決闘場はアクリアエ・スリス、方式はヴァンガード。お前に勝ち目はないぞ。始まる前から勝負はついている」
赤マントはあてつけるような口調で話しているが、シーグから距離をとっている。
ヴァンガードとはよほど厄介な形式で、アクリアエ・スリスではよほど不利になるらしい。それでも、サフィリアを跳ね飛ばしたやつとの決闘を断る理由などない。
ガリウスはシーグを見下ろして口を開く。
「自分の墓碑銘を考えてくる事だ。死の道へ送り返し墓石で封印してやる。今度こそ迷い出て来ぬようにな！」
「俺は靴を探すよ。あんたの頭に乗りそうな、座りのよさそうなやつがいい」

挑戦的な口調にガリウスは顔つきを険しくする。きびすを返すと両手で軽々とサフィリアを抱き上げた。思わず身を乗り出したシーグをレンダがとどめる。

「今は諦めなさい」

「だけど！」

「ジッとしないと、口から内臓が全部出ちゃいますよ」

「ふざけるな。このままじゃフィーが！」

「この場はあなたの負けです」

後頭部に強い衝撃を感じて、シーグはレンダをにらみつけた。暗くなってゆく視界の中で、ガリウスは憎しみの視線をシーグに向けて去ってゆく。サフィリアに向かって伸ばす自分の手を見てシーグの意識は闇に落ちた。

1章－19　デスマッチへの招待（後書き）

2勝2敗、1引き分け。
気絶2回。

不安の残る主人公ＶＳ鉄人の決闘者。
武装はないし、負傷もしているし、圧倒的不利な状況で決闘は明日。

1章－20　影は闇へ

＊

ミラは早足で大通りを歩いていた。背後から近づいてくる不愉快な足音から逃げるためだ。ドスドスと地面を踏みしめる鈍重な音だけでも十分無様だ。必要以上に顔を合わせたい相手ではない。

「おーい、待ってくれよ！」

大声で呼ばれて、少女は立ち止まった。周囲の視線から自分を隠すようにマントに顔をうずめて、早足に歩き出す。

「ミラ、逃げるなよ。足が速いって！」

男が余計なことを言ったせいで、小走りになっていた少女に視線が集まった。ミラは鋭くした打ちすると、裏路地に入った。

「聞こえないのか、俺だよ。ロイドだよー」

冴えない大声を出して追いかけてくる。本名を大声で叫ぶなんて盗賊とは思えない。ミラは物陰に潜んで、不快な来訪者がやってくるのを待った。

「あれー、どこに行ったんだ。おーいっ！？」

のんきな大声は尻切れになった。ミラが首筋に冷たいものを押し当てたからだ。

「ひ、ひぇっ」

素人同然の反応にミラはうんざりした。死角のある危険な場所に不用意に入るだけでも信じられないのに歩き方には警戒心は皆無だ。成人しているはずなのにミラよりも背が小さく、腹も出ていて足も短い。

ロイドは鈍重さを絵に描いたような男なのである。

「知ってる、ロイド。盗賊には仲間以外に本名を漏らした人間を殺す習慣があるそうよ？」

「じょ、冗談は止めてくれよ！」

耳元でささやくと、ロイドは恐怖で震えながら声を張り上げる。騒げば口封じをされるだけだというのに。

「あんた、このままじゃ命を落とすわ。盗賊なんて今のうちにやめなさい」

「ひぃ、助けて……」

ロイドには危険を回避する能力もなく、交渉する余裕さえないようだ。命のやり取りが似合うような男ではない。

「そうね、冗談はやめるわ……さようなら」

ミラは手をすばやく、真横に滑らせた。ロイドは目をまん丸にして「ひっ」と息を飲み込んで、膝をついた。顔を真っ青にして、両手で首を押さえた。痛みはなく血の一滴も流れていない。

「あら？」

不思議そうにロイドは首を傾げた。ミラは銅貨を二枚を指に挟んでいるだけだった。ロイドの首筋押し当てられたのは、ナイフではなかったのだ。

「脅かさないでくれよ、ミラ」

ロイドは冷や汗を流しながら愛想笑いをした。これだけの事をされてもロイドはへらへらと笑うだけだ。ミラはイライラして舌打ちをした。

「本気の方が良かった？」

ミラは声を落として手首を回す。銅貨は姿を消しニードルナイフが現れた。

「ロイド。あんたは盗賊に向いていないわ。今の内に手を引かないと、本当に命を落とすわよ」

「それは……そうだけど。他に行く当てがないよ」

ロイドはしょんぼりとして黙り込んでしまった。ミラも黙り込んでしまう。

メティスの盗賊ギルドは行き場所をなくした者たちが生きるために最後にすがる場所である。追い剥ぎやかっぱらいをすることもあるが、法の保護を受けられないもの達が集まって何とか生きのびる

ために結束していたのだ。
だが、盗賊ギルドは魔術師たちに完膚なきまでにつぶされた。メティスの影の支配と呼ばれた盗賊ギルドは存在しないに等しく、メンバーはミラを含めても１０人と残っていないのだ。現在は魔術師に情報を売って飼われる形で生き残っている。その情報は街から逃げていった仲間たちを捕まえるための情報だということをミラは最近知った。
「ミラこそどうしてメティスにいるの。ミラだったら、どこでもうまくやれると思うよ」
「……」
「ご、ごめん」
答えに淀むミラを見てロイドは即座に謝罪した。呆れるほどに気が小さくて人のいい男だ。悪党の世界では理想にもえる人物と並んで死に近い。例えば自分の両親のように……。
ミラは背後に気配を感じて、振り向きざまにニードルナイフを投げつけた。ナイフは建物の影に消えた後、放物線を描いてミラの手元に返ってきた。
暗がりからフラリと出てきたのは壮年の男だった。手入れのされていない髪がだらしなく伸び、片方の目に眼帯をつけている。細く体つきに飾り気のない灰色の服を着ており、手には大きな酒瓶を持っている。メティス盗賊ギルドの長サージである。
「危ねぇお嬢ちゃんだな」
サージの声には張りがなく足取りはおぼつかない。いつでも酒を飲んで酔っ払っている男だが、ミラが投げたナイフを受け止めて投げ返したのは彼なのだ。
「人の背後に忍び寄るおっさんに言われたくないわ」
「だから、ちゃんと足音を立てただろうが」
サージはろれつの回らない声を出して指を弾く。顔めがけて飛んできた金属をミラは反射的にかわす。壁に当たった３枚の金貨が地面に転がった。

「お前の取り分だよ」
サージは酒瓶から一挙に酒をあおった。
「仕事をした覚えはないわよ」
「したんだよ。お前がベッドに呼び寄せた男を魔術師に報告したんだ」
「彼はただの旅人じゃないの？」
「なんだ、知らずに誘い込んだのか。ひょっとして、あれがお前の好みのタイプか？」
サージはニヤニヤ笑いをした後、下品にゲップをした。
「覗き見なんて趣味が悪いじゃない！」
「初仕事がうまくできるかを監視していたのさ。ベッドで文字通りに一戦交えたのは予想外だったぜ」
顔を赤くして抗議するミラをサージは薄笑いを浮かべて相手にしない。盗賊仲間が誰もいないことを念入りに確認するために、裏通りを歩き回ったというのに。まるで効果が無かったようだ。
「そのシーグはガリウス卿に決闘を挑んだそうだ。しかも方式がヴァンガードときている」
「ヴァンガードですって！」
「決闘というより公開処刑だぜ。みんながガリウス卿の勝利に賭けるので、博打がまともに成立しやしない。仕方がないから何合打ち合えるか、何歩逃げられるかで賭けているんだ。お前も一口乗るか？」
「彼は魔術師に狙われていたわ。一体何者なの？」
「やつはシージペリラスだ。まさか生きていたとはね。運のいい男だ」
「……知っているの？」
「ここから先の情報は有料だが、買うか？」
「誰が！」
いらだたしく怒鳴りつけてなら、ミラは気づいたことがある。
「ひょっとして、密告が原因で決闘になったの？」

「報告だといっているだろうが。お前の手柄だよ」
サージの言葉を最後まで聞かず、ミラは逃げるように駆け出した。
シャドーウルフが現れたときは、おびえるだけで何もできなかった。それなのに震える肩にマントをかけて逃げろと心配してくれた。ベッドの血を見ておびえる自分のためにシーツで血のあとを隠してくれた。
その彼を自分は売ってしまった。よりにもよって魔術師に！
シーグの残していったマントを体に巻きつけミラは大通りを走り抜けていった。

1章―21　好きと嫌い

＊

闇が広がっていた。太陽も見えず星明りもない。シーグは慎重に手を伸ばしたが何も触れない。

光源がないのに自分の手が見える。風の音はなく空気の動きさえ感じられない。足元を蹴飛ばすとやわらかい弾力があった。

これほど非常識で異常な空間といえば。

「夢か魔術だろうな……」

こういう場合混乱して駆け出すのは愚の骨頂だ。そんな無様なことをすれば、ロディウスのクソ爺に1月は馬鹿にされるだろう。

シーグは心を落ち着けて周囲を警戒し、感覚の網を広げてゆく。

「おーい」

突然真後ろから声をかけられた。シーグは反射的に振り返りけん制のために拳を繰り出す。銀色の光を目端にとらえ、思わず攻撃の手を止める。

「おお？」

銀髪の少女が口を丸く開けて驚いている。目前で止められたシーグの拳を見つめて寄り目になっていた。

「なんだ、アイフェか……」

気づくのが一瞬遅ければアイフェを殴るところだった。ホッとすると同時に肩に疲労がどっとのしかかった。全くこの少女はいつも心臓に悪い。

「なんだ、シーブーかー」

アイフェはシーグの真似をして、肩を落としながらしゃべる。

「俺の名前はシーグだぞ」

「しぃーぎゅ？」

「シーグ」

アイフェはしばらく「しぃーしぃー」言っていた。ふざけているのではなく本当に発音できないようだ。「ぶぉー」と不機嫌なうめき声を上げたアイフェだが、突然目を輝かせてシーグを指差した。

「シーボー、シーボー！」

発音できたことがそんなに楽しいのか、アイフェはケラケラと笑っている。銀色の髪と白い肌が光り輝いていた。

「まるで蛍だな」

「蛍って何？」

シーグのつぶやきに首をかしげるアイフェ。

「何って言われてもなぁ……」

どう説明しようかと悩んでいると、突如として周囲に蛍の群れが現れた。乱舞する光の群れはシーグが連想した姿そのままだった。

「おお！」

アイフェは青色の瞳をこぼれそうな位に見開いて、舞い飛ぶ光の中に飛び込んでクルクルと回った。更に光の群れを追いかけてピョンピョンと飛び跳ねている。無邪気な姿にシーグは思わず笑みをこぼした。

「とおりゃ！」

アイフェがパチンと両手をたたき合わせたので、シーグは顔をこわばった。蛍の群れがアイフェの元から一斉に逃げてゆく。

「……何をするんだ？」

「捕まえようとしたんだよ」

アイフェは背の届かないところに逃げていった蛍を掴もうと手を伸ばす。

「潰れてしまうぞ。こうやって捕まえるんだ」

シーグは両手で包み込むようにして宙に飛ぶ蛍を捕まえた。

アイフェも真似して両手を合わせた。だが、手で包み込むというより、力任せに手首をぶつけているといった方が正しい。指の力を抜いて腕を動かすことができないようだ。腕を動かすたびに足元がおぼつかなくなる。

「ずいぶん不器用なんだな」
「不器用って何？」
ブスッとしてに問いかけてくるアイフェ。言葉の意味は知らなくても、何となくわかるようだ。
シーグは捕まえた蛍をアイフェの目の前で放した。「おー」と小さく叫びながら、瞬く間に怒った表情が引っ込む。シーグは空中に浮かぶ蛍を捕まえては、アイフェの周囲で放してやった。しばらくそうしていると、蛍は雪が溶けるように消えて行った。
「夢の中でつくった物はすぐにいなくなっちゃうんだ」
不思議そうにしているシーグにアイフェが説明する。
「蛍と似ているのが塔にもたくさんいたよ。光らなかったけど」
「へえ」
魔術都市といえば、空想上の生物が歩き回っていると噂されている。蛍そっくりの生き物がいても不思議ではない。
「で、今度は夢の中で迷子なのか？」
「迷子じゃないの！」
アイフェはプーと頬を膨らませて反論した。
「フィーを探していたんだよ。そうしたら、ふぃーふぃーふぃーふぃーで叫んでいるのが聞こえるんだもん」
アイフェは唇を尖らせてシーグをにらむ。
「オレは言ってないぞ」
「言ってた！」
アイフェは即座に言い返す。
「大体、オレは気を失っていて――」
「言ってたもん！」
アイフェはムキになって声がどんどん大きくなる。必死に訴えるので、否定するのが悪い気がしてきた。
「そうか、言ってたのか」
「うん。大きな声で繰り返すから、すごくうるさかったんだ。だから、シー坊がどこにいるのかすぐ分かっちゃった」

自慢げに言うアイフェを見ていると、シーグはどうでも良くなってしまった。この少女と会うのは2回目なのにやけに懐かしい気がする。なぜだろうか。自問していると頭がズキリと痛んだ。

ガリウスと戦った後にレンダに後頭部を殴られたのだ。サフィリアはいったいどうなったのだろう。

「ね、シー坊はフィーの事は好き？」

「な！」

突然聞かれてシーグは言葉に詰まった。

「いや、好きと嫌いとか、そういうのじゃなくてだな」

シーグは混乱しながら、早口になってゆく。

「だいたい俺達は知り合って6年になるけど手紙と水晶球のやり取りだけなんだ。一方的だったし、1年に1回だけだったし、サフィリアは俺の顔だって知らなかった。会ったのも4年ぶりだったし、顔を合わせたのも今日が初めてなんだ。だから簡単に決めるのも変な話だろ？」

「……早口すぎてわかんないよ」

だらだらと続くシーグの言葉をアイフェは不機嫌に断ち切った。

「その、つまりだな」

「嫌いなの？」

アイフェが悲しそうに聞いてくるので、シーグは反射的に首を横に振った。

「じゃあ、好きなんだね？」

「えー、あー。まあ、そう……かな？」

あいまいな答えだったがアイフェは納得して笑顔になった。

シーグは自分がバカみたいに思えた。基準が好きか嫌いしかない。そんな単純な子どもの考えに対して何を生真面目に答えているのか。

落ち着けと、シーグは自分に言い聞かせる。

1章ー22　夢歩き

「夢の中で嫌いな人には会えないの。好きなら会えると思うよ」
「サフィリアの居場所を知ってるのか？」
「ううん、閉じ込められちゃったから分かんない」
「2人そろって迷子か」
何気なくつぶやくとアイフェは怖い顔でにらみつけてくる。迷子は禁句であるらしい。
「会いたいって思うと会えるよ。1人より2人。2人より――」
アイフェはしかめっ面で首をかしげた。懸命に何かを思い出している。
「2人よりも、いっぱいの方が見つかりやすいんだよ！」
アイフェは指を4本立てて、シーグに突き立てる。
「2の次は3だぞ」
シーグが教えるとアイフェはピタリと動きを止めた。指を1本ずつ立てながら呪文のように数えなおす。アイフェは「ぶー」と唸りながらシーグをにらみつける。
「知ってるの！」
怒ったアイフェは体ごとシーグに背を向けた。
少女の微笑ましい仕草の中に、シーグは懐かしさの正体を知った。真面目ぶっているくせにどこか抜けている。すぐにムキになって体全体で真っ直ぐな感情を表す。リーザと同じなのだ。
4歳も年上だったので姉さんぶっていたが、もしも4歳年下だったらアイフェそっくりだっただろう。
「じゃあ、出発するよ」
「どっちに行くんだ？」
周囲は全くの暗闇だ。足元も見えず方向もわからない。
「とにかく歩けばいいんだよ」
迷うぞ、と言いかけたのをシーグは止める

「えーと、たどり着けなかったらどうなるんだ？」
「目が覚めるよ」
つまり、どれだけいい加減に歩いてもベッドに戻るだけだ。
「ひょっとして、現実に歩いているときも同じようにしてるのか？」
「うん。会いたい会いたいって思ったら絶対にフィーと会えるのは一緒なんだよ」
道に迷うのも当然だ。迷子のアイフェをサフィリアが必死になって探し回って見つけただけに違いない。
「そうだ。ありがとうね」
体ごと振り返ったアイフェが唐突に言った。
「何のことだ？」
「さっき、私のこと守ってくれたでしょ」
ガリウスが放ったウーンズの事だ。呪文と共に突き出された大剣の先にベッドがあった。魔術が直進すればアイフェに直撃する。だからシーグは踏みとどまったのだ。
「結局、起きてたのか」
「眠るとね、ふわふわ空を飛べるんだ。つまり――」
アイフェは教鞭のように人差し指を立てて、シーグに突きつける。
「覗き放題なんだよ！」
「……」
「うーうーを受けた人は大変なの」
「ウーンズの事か？」
「うん。ずーずーをうけたら全身から血をダラダラ流れるの。体中が真っ青になってブクブクに膨れ上がってしまうんだよ」
「へ？」
「最後には頼むから殺してくれって苦み悶えながら全身が腐って死ぬんだ。無傷に見えても全身がボロボロになっちゃうの。『なまごろし』って言うらしいよ」
アイフェは楽しい計画を話すように説明する。シーグは気分が悪くなった。

「だけど全然平気みたいだね。なんで死んでないの？」
アイフェは後ろ向きに歩きながら、無遠慮に恐ろしいことを言った。
「夢から覚めたら死んでいたって事はないのか」
「大丈夫じゃないかな。怪我をしてたら夢でも痛いと思う。それに死んだ人と会ったことないもん」
アイフェは頼りなさげに言った。
「……まあ、今悩んでも仕方がないな」
意識集中しても音も風の流れも感じない。息苦しさを感じて、シーグは胸元に手をやった。サフィリアが爪を立てた場所がズキリと痛む。よく見れば腕には包帯が巻かれているし、服も気絶する前のものだ。
夢の中で無事なのだから現実でも無事だ。シーグは無理やり納得した。
「ガリウスってどんな奴なんだ」
「やな奴だよ」
アイフェは不機嫌に即答した。
「いっつも嫌なこと言うし、うるさいし、怖い顔だし、大きくて怖いし、大きな声でうるさいし、顔も体も大きいし、顔にヒゲついてるし――」
その後も続く『嫌なこと』をシーグは話半分に聞いていた。主に『大きい』と『うるさい』と『怖い』の3つがアイフェの気に召さないようだ。アイフェは地面に恨みでもあるかのように、大またに踏みしめて歩いている。
「フィーと結婚するっていうし」
「……何だって？」
「ガリガリとフィーが結婚するの！」
シーグは頭の中が真っ白になった。よく考えてみればサフィリアも16歳だ。結婚をしていてもおかしくない年である。ましてや、家柄の良い娘は産まれる前から婚約者が定められる。

「婚約なんだよな、結婚したわけじゃないよな？」
シーグは勢いよく問い返した。
「そうだよ」
「サフィリアはどう考えているんだ」
「何も言わないけど、嫌に決まっているの！」
アイフェは半泣きになって八つ当たり気味に怒鳴る。
「私もフィーも閉じ込めるし、偉そうだし、すぐ怒るし、怒鳴るし――」
際限なく続く文句をシーグは聞き流していた。
リーザの遺品であるシャープネスを取りにメティスに来た。不当な行いに反発して、襲い掛かる敵を倒しているだけのつもりだった。実際にはサフィリアの立場を悪くしていたのではないか。
全くの考えなしに感情のままに行動していたことをシーグはようやく気づいた。
「サフィリアは俺が来たせいで困っているのかな」
「そんなこと無いよ。フィーは喜んでいたもん」
アイフェはにっこりと答える。無邪気な笑顔で保証されてシーグはホッとした。
「あーあ、シー坊がフィーと結婚すればいいのに」
「な！」
「嫌なの？」
「そうじゃなくて」
「いいんだね。今度フィーにも聞いてみる！」
「ちょっと待て！」
「うー、何でいちいち怒るのかな？」
どう答えるべきが困っていると、水辺に特有の心地よい風が吹いてきた。
「あ、フィーが近くにいるよ」
アイフェは急に走り出した。来た道を引き返すアイフェを捕まえて体ごと正しい方をむかせる。

「風はこっちから吹いているぞ」
「あっはっはー、失敗失敗」
年相応の落ち着きの無さでアイフェはパタパタと走ってゆく。

1章－22　夢歩き（後書き）

前作引き続いてのアイフェ節。ちょっと変わりましたが、根本的なキャライメージは変えていないつもりです。
読む側としてはどうなんでしょう？　作者として気になります。

1章－23　聖域の条件

水の音と匂いは四方からやってくる。それなのに足元はぬれず沈むことも無い。真の闇が広がりふわふわと落ち着きの無い地面はそのままだ。

波がないから海ではない。流れが一定ではないから河ではない。音と匂いから巨大な湖だろうとシーグは見当をつけた。

とは言っても夢の中でなんの役に立つかは分からない。それでも戦士の本能が周囲の状況を把握しようと働くのだ。

足元がいつ沈むのかと警戒しながら歩くシーグに対し、アイフェは恐れる様子も無く小走りに進んでいた。

やがて、遠くにポツリと白い光が見えてきた。アイフェは手足を千切れんばかりに振り回して走り、派手にすっころんだ。勢いあまって3度ほど前転した後、仰向けになって動かなくなった。

「大丈夫か？」

「大変だー」

アイフェは絶望的な声を上げた。

「どこか痛むか？」

「ううー、世の中がひっくり返ってしまったよ」

ひっくり返っているのはアイフェだ。更にグルグルと自分で目を回している。

「……世界に体当たりをするからだ」

「気をつけるよぉー」

朦朧としているアイフェを抱きかかえ、シーグは光に向かって歩き出した。暗闇の中の白い光だというのにやけに頼りない。油の切れ掛かったランプのように不安定に揺れている。

寝息が聞こえたので視線を落とすと、アイフェは大口を空けていびきをかいている。

頭を強く打った後にイビキをかくのは良くないと聞いたことがあ

る。しかし、地面はふわふわと柔らかいし頭を強打した様子も無い。呼吸を確かめるために口元に手を持っていくと、指をガブリとかじられた。

悲鳴をかみ殺してシーグは手を引っ張った。獲物を逃したアイフェは自分の指を吸い始める。

「本当に寝ているのか？」

「むふふー」

少女はモゾモゾと寝返りを打った。本当によくわからない少女だ。

「アイフェなの？」

聞き違えようの無いサフィリアの声だ。顔を上げると前方の光が人の背丈ほどの大きさになっていた。

少女を抱きかかえているのを見られたら余計な誤解を生むかもしれない。とは言うものの、正体不明の地面に横たえるのも不安だ。迷っているうちにサフィリアが近づいてきた。

「あ……」

シーグと目線が合うと、サフィリアは小さく声を出して目を伏せてしまった。また変態と思われたのか、更に酷い何かと勘違いされたのか。シーグは頭に血が上って喉がカラカラなってきた。戸惑っているとアイフェの姿は溶けるように消えていった。腕の中の重さも完全に無くなりシーグは慌てて周囲を見回す。

「大丈夫。よくあることよ。あの子は夢の中でしか自由に動けないから。好きにさせてあげて」

サフィリアはぼんやりと、アイフェの消えた空間を見ている。表情は暗いし背中まで伸びる金色の髪もくすんでいるように見える。全身を包む光が弱々しいためだ。蛍のように輝いていたアイフェとは正反対である。

「ごめんなさい」

サフィリアは沈んだ声で謝罪した。

「私のせいでガリウスと決闘することになってしまったわ」

「何でそうなるんだ？」

問い返すと、サフィリアはキョトンとした。
「あなたの名前を知ったからガリウスは決闘を挑んだのよ」
「殺気混じりの取り巻きをゾロゾロつれていたからな。名前を知られてなかったら、その場で殺されていたよ」
サフィリアは潤んだ瞳で見つめてくる。シーグは思わず視線をそらした。
「それに、城門では赤毛って事で戦いを挑まれたし、その後は暗殺者まで差し向けられた。さっきは多人数での力業だ。一対一になっただけありがたいよ」
シーグは言葉を止めて、横目でサフィリアの表情を確かめる。表情は沈んだままだ。
「俺が来て迷惑だったか？」
「違う！」
サフィリアは声を大きくし、首を横に振って否定した。
「うれしかったわ。あなたが生きているって分かったから」
サフィリアは瞳をうるませながら微笑む。頭に血が上ってきたので、シーグは髪をいじるふりをして顔を隠す。
「連絡しなかったんじゃなくて、できなかったんだ。ずっと『死の道』の果てで隠れ住んでいたから」
「だから、魔術を使っても見つからなかったのね」
「手紙を出そうとしたら、師匠が見つけて燃やすんだよ」
「正しい対応だったと思うわ」
「……つまり俺が生きているのを知ったら、メティスが排除に乗り出したって事か？」
サフィリアは辛そうに目を伏せた。シーグは余計な事を言ったことを悔やんだ。
「すべての不浄を払って、聖域を作るのが魔術師の望み」
感情を交えぬ冷たい声と、淡々とした口調にシーグはギクリとした。
「老いた者、病や貧困に苦しむ者、不浄の象徴を無くして土地を清

める。メティスを世界で最も美しい楽園に変えるの」

詩人が詠うように、朗々と語られる美しい言葉は心地よく通り抜けていった。しかし、一瞬後にシーグを襲ったのは戦慄だった。

赤マントは咳き込む子どもを追放しようとしていたし、赤毛と黒い瞳を不吉の象徴を言っていた。ガリウスはシージペリラスと知って、表情も態度も一変させた。

老いも病も貧困も不吉の象徴もすべてメティスの中にある。魔術師の望みをかなえる為に取るべき手段は一つしかない。

「これが今のメティスなの。統治者はガリウス・グラムファーレ。彼の妻となる私の使命でもあるわ」

顔を上げたサフィリアの瞳の端で涙の玉が大きくなってゆく。引き結ばれた唇は小さく震えていた。本心で言っているはずはない。

1章－24　意地っ張り

「ガリウスは決闘の場を借りてあなたを……シージペリラスを殺そうとしている。それも大衆の目の前で。これから本格的に始まる粛清の最初の犠牲者としてあなたを選んだの」

感情を交えず言葉を紡ぐのも限界になったようだ。サフィリアは両手で顔を覆ってうつむいてしまう。

「だから、シーグ。メティスから逃げて。私も協力するから」

地面に落ちた涙がいくつもの波紋を投げかけてゆく。

「そして、二度と魔術師に近づかないで……」

泣きじゃくるサフィリアは暗闇の中に消えてゆきそうなことに頼りない。

星明りの輝く夜に水晶球の中にいた少女の姿はもういない。自信ありげに理想を語り、希望に満ち溢れた少女から光を奪った奴がいる。

ガリウスに対する怒りが体中に満ち満ちてくるのをシーグは感じた。あの野郎は婚約者を名乗っていながら何をやっているのか。

「俺は逃げない」

サフィリアは涙もふかずに顔を上げる。途方にくれた表情は迷子の子どものようだ。

「どうして？」

フィーを泣かせたあの野郎を、殴り飛ばさないと気が済まない！感情のままに喉まで上がってきた言葉をシーグはぎりぎりで飲み込んだ。

「背中を見せれば、敵は追いかけてくる」

言ってからシーグは気づいた。捜索隊の先頭に立つのはサフィリアだろう。風の魔術で追跡する能力は逃亡者を追いかけるのに向いている。シーグが逃げ切れば責任を問われることになるだろう。サフィリアがわざと逃がしたと疑われるかもしれない。

「それに戦う以上は勝つ。く――」
クソジジイのロディウス、と言いかけたのをとっさに堪える。
「師匠の下でずっと修行してきたんだからな」
「だけど……」
何かを言いかけたサフィリアは口を閉じた。ローブの袖から絹のハンカチを取り出して目元を拭う。アイフェが持っていたのと同じものだ。
「分かりました。私も協力します」
「あ、うん」
そういえばガリウスは形式がどうとか言っていた。協力ができるような特殊なルールなのだろうか？
「決闘にはシャープネスを使ってください。きっと、リーザも喜んでくれると思うから」
サフィリアは何かに耐えるように、胸元に手をやった。
「ヴァンガードが始まる前にあなたに渡すわ。ガリウスに対する切り札になるはずよ」
「ええと、つまり……」
1対1の戦いで助太刀はできない。武装は自由に選べるということだ。
「まさか、何も知らないの？」
サフィリアは不審の表情を浮かべている。
「あー、ええと」
責める口調にシーグは反射的にうなずく。サフィリアはポカンとした後に、首を横に振って表情を改める。
「ヴァンガードは『最前線』の意味よ。1対1の決闘だけど、戦場と同じであらゆる戦法が許されるわ。どんな武器を使ってもいいし、魔術を使ってもかまわない。審判はいるけど、開始と終了の宣言をするだけね。決闘の終了は勝者側の要求があったときだけ認められる」
「審判が決めるんじゃないのか？」

「観客の反応を見て審判が判断するのよ。引き分けや判定が存在しない、完全決着の方式なのよ」
実質、どちらかが死ぬか戦闘不能になるまで続けられるわけだ。
「アクリアエ・スリスは魔術の効果が飛躍的に高まる場所よ」
ガリウスの勝利は決定したも同然と、魔術師達が言っていたのもうなずける。
「つまり、剣しか使えないものはとことん不利になるわけか」
シーグはふと気づいた事がある。決闘を受けた側が武器や場所の選択ができるのだ。手袋を投げ返したのを今さながらに後悔する。
「やっぱり逃げた方がいいわ」
「嫌だ！」
シーグがとっさに答えると、サフィリアの瞳がスッと細められた。視線に風の刃と同じ鋭さを感じてシーグは思わず身を硬くした。
「それに、そう。俺にだって考えはあるんだ」
「どんな？」
「つまりだな。そう、あれだ。魔術師は接近戦に弱い！」
「ガリウスは剣術の達人でもあるのよ」
「あー、でも俺の方は近づかないと勝ち目がない」
「分かったわ。その後どうするの？」
「戦うのさ」
早口になるにつれて、内容が薄くなってゆくのをシーグは自覚していた。
「じゃあ、ガリウスはどう動くのかしら？」
問いかける声が酷薄さを帯びてゆく。本能がここは素直に謝っておけと警告する。しかし、男の意地が突っ切れというのを抑えられない。
「攻撃するんだ。そう、あのラヴェンダーとかいう大剣でだ。だが、俺は大剣をかいくぐって腹に突きを食らわせる！」
「腹ね、それから？」
「よろめいたガリウスの首筋に剣を突きつける」

「で？」
「終了だ」
サフィリアは時間が止まったかのように沈黙している。シーグは背筋に冷や汗を感じた。
「グラムファーレは結界陣の一族。守りに関しては死角がないの。例え、魔術をかわして剣を潜り抜けたとしても攻撃は通じない。彼の着ている服は、魔術の装甲服。普通の剣では決して切れないわ」
「じゃあ――」
「鎧と違って継ぎ目なんてないわよ。それにラヴェンダーは花の名前よ、剣の名前はアヴェンジャー」
サフィリアは淡々と答える。シーグは沈黙するしかなかった。
「だけどシャープネスがあれば、何とかなるはずよ」
「だ、だったら大丈夫だな」
「理由は？」
「……」
シーグにはさっぱり分からない。サフィリアはうつむいたまま黙り込む。大丈夫ではない状況に陥った事をシーグは悟った。風は凍りつくような冷たさを帯び始めている。

1章―25　黒の脅威

「……けないで」
「え？」
「ふざけないで言ったのよ！」
怒鳴り声と共に突風が吹きつけてきて、シーグは思わず知りもちをついた。落ちそうになったアイフェを慌てて抱えなおす。
「ガリウスはヴァンガードをはじめとして、あらゆる決闘法で勝利を収めてきているの。今まで２０度戦って１度も負けた事がないわ。戦場でも７度の戦いすべてを勝利に導いた将軍なのよ」
サフィリアは興奮と共に声が大きくなり、涙は大粒になってゆく。
「近距離ではアヴェンジャー（報復者の大剣）、１０歩の距離ではウーンズ（負傷）、１００歩先の標的さえも狙い打つ回転炉（ローテイター）。破城槌の突撃も、投石機の大岩も受け止める鉄の盾（アイアンシールド）。あらゆる間合いで必殺の一撃を放ち、鉄壁の守りを備えたメティスの切り札。そんな相手とどうやって戦うつもりなの」
サフィリアは絶叫しながら涙を散らす。
「黙っていたら分からないでしょ。ハッキリと言ってよ！」
「これから考える……つもりだった」
教師に説教される子どもの気分のように、シーグはボソボソと言った。
「無茶をして意地を張ってそれが何になるっていうのよ。死んだ何にもならないじゃない！」
叫ぶだけ叫ぶと、サフィリアは両手で顔を押さえて座り込んでしまった。１２歳のときに理想を語った少女の面影はなく、ただの泣きじゃくる女の子がいるだけだ。
「あなたが戦うのは私の言葉を守るため？」
涙で顔をグシャグシャにしたまま、サフィリアは問う。
そうだけど、それだけじゃない。言葉になっていない言葉は声に

さえならず、シーグも黙り込むしかなかった。サフィリアの流す涙が落ちる音だけが響いていた。世界中で雨が降っているようだ。

「うぉりやーーー！」

間の抜けた声に顔を上げると、銀色の少女がはるか上空から降ってくる。

「きぃーっく！」

何を蹴るつもりか知らないがシーグの斜め後ろ１０歩の距離を離れている。だいたい、キックといいつつ頭から落ちてくるのはどういうことだ。

シーグはアイフェの真下に移動する。斧のように振り下ろされる肘をよけて背中から受け止めた。幻ではない証拠に両腕にずっしりと重さを感じる。

「ぱんちぱんちぱーんち！」

アイフェは押さえつけた猫のように暴れだす。力任せに地面に下ろす時に頭突きや膝がシーグを撃ったがパンチは一つもない。

「危ないだろうが」

両手を挙げてバンザイをさせる格好で立たせたが、隙ありとばかりにアイフェのカカトがシーグのすねを蹴り飛ばす。アイフェは「ぐー」とうなりながら肩を怒らせた。舌足らずの小犬がうなっているようだ。

「フィーを泣かせちゃダメ！」

アイフェは人差し指を立て、腰に手をやり前かがみになった。片頬を膨らませてしかめっ面をする。が、体制を崩して顔から倒れてゆく。慌てて支えると、アイフェはキッとシーグをにらみつけた。

「ごめんって言いなさい！」

「ご、ごめん」

強く言われてシーグは反射的に謝罪する。

「心がこもってないよ。謝るときはごめんなさい、なんだよ！」

「……ごめんなさい」

多少の理不尽さを感じたがシーグは素直に従った。

「よろしい！」
アイフェは満足げに大きくうなずくと勇ましく立ち上がった。が、よろめいた。危なっかしい仕草でサフィリアに向き直る。
「泣く子にはいいものを見せてあげるね、えい！」
アイフェが地面を指差した。すると、銀色の光が産まれて周囲に広がってゆく。さっき見た蛍の光だ。しかし、シーグは違和感を感じずにはいられない。カサカサと地面を這い回り、バタバタという羽音は何か違う生き物だ。
すばやい動きで足元までやってきた光をシーグは見下ろす。途端、光が顔めがけて飛んできた。
「これって、ゴ――」
目前に迫る脅威をシーグはのけぞってかわした。油ぎった羽で翔黒い生き物。鍛え抜かれた戦士の本能が長い触角とクシ状の足を目に焼き付ける。
魔境の森にさえ生息しこの世でもっとも強大な生命力を持っている。巨大な蝙蝠の羽と猛毒の尻尾と黒光りする鱗を持つワイバーンには慣れたが、この生き物には本能的な戦慄を抑えられない。
「キ、キ、キ、ィヤアアァァー！」
耳をつんざく悲鳴と共にサフィリアは尻もちをついて後ずさっている。
「ん、足りなかったのかな？」
今度はサフィリアの頭上を指差し眉間に皺を寄せた。悲鳴を出す余裕もなくし、サフィリアは両手で自分の体を抱くようにして身を縮めている。
「止めろ、アイフェ！　今すぐに消してしまえ」
「なんで？」
「どうしてもだ、なんでもだ！」
「絶対にダメ？」
「絶対に何があっても、誰が何と言おうとダメだ！」
徹底的に否定すると、アイフェはブーと頬を膨らませた。

「かわいいのになぁ……」
光は次々と消えていった。アイフェが塔の中で見たものにも納得がいった。
蛍はいない場所にもあの虫はいる。まだ暗闇の中に潜んでいるのではないかと恐ろしくて仕方がない。虫は狼以上に気配を殺す事に長けている。場合によってはワイバーンなどよりも脅威となるのだ。
サフィリアは息も絶え絶えといった様子だったが何とか立ち上がった。肩とワナワナと震えている。
「ごめんなさい！」
アイフェが頭を下げて謝ると、サフィリアは半開きになった口を無理やり閉じた。たぶん、怒鳴りつけるのを堪えたのだろう。
「それでね、ガリガリがもうすぐこっちに来るんだよ」
アイフェの言葉にサフィリアが表情を変えた。
「シーグ、アイフェを連れてここから逃げて」
「逃げるって、どこに？」
「どこでもいいわ。とにかく距離をとるの、急いで！」
サフィリアが懸命に訴えるので、シーグはアイフェを背中から抱き上げた。
「結界陣が強化されると、あなた達はこの場にはいられなくなる」
「どうなるんだ？」
「夢から覚められなくなる。魂が抜けて体に戻れなくなる」
「つまり、なんだ？」
「死んでしまうってことなの！」
サフィリアがいらだたしく言うと、音のない風が吹き始めた。色のない闇がシーグの前方で膨れ上がり渦を巻き始める。それはまさしく漆黒の竜巻であった。本能がアレに触れてはいけないと伝える。
サフィリアの姿は見えなくなった。
「シーグ、シャープネスは必ずあなたに渡すわ。だから……」
闇の向こう側からサフィリアの声が途切れ途切れに聞こえてくる。
「だから、何があっても生きてのびて！」

「分かった」
返事が聞こえたかを確かめる間もなく、シーグはアイフェを抱えて全力で逃げる。背後から無音の脅威が迫ってくる。世界中が揺れているようだ。
「ねえ、シー坊」
「後にしてくれ！」
「目を覚ませば助かるよ」
「……何？」
「驚いたり、痛かったら目が覚めるの。起きれば夢の中から逃げられるよ」
「でも、具体的にどうすればいいんだ」
「じゃあ、こっちを見て」
「何を――」
腕の中にいるアイフェを。いや、そこにあるものを見てシーグは恐怖のあまり悲鳴さえも出なくなった。
両腕に抱えていたのはアイフェではなく――。
シーグの意識は暗転した。

1章－26　笑えない

＊

「うわーーー！」

シーグは自分の悲鳴で目が覚めた。ベッドから飛び上がるように起きると、心臓が張り裂けそうなほど激しく高鳴っていた。喉がひりつくようで肩で息をしなければならない。全身にずっしりとのしかかる疲労感で体中が鉛になったようだ。

悪夢を見て飛び起きたときに特有の不快感だ。シーグは額に浮かんだ冷たい汗を拭いながら身を起こす。

「これはこれは。良い目覚めで」

レンダの機嫌のよい声が耳障りだ。腫れぼったい目で睨むと、椅子に座ったレンダがニコニコと微笑んでいた。

「最悪だよ」

「だから良いのです」

「……笑えない冗談だな」

「冗談じゃありませんよ」

ならば余計にタチが悪い。言い返すと倍返しになるだけなので、シーグはレンダの言葉を黙殺した。

「サフィリアには会えましたか？」

ギョッとしてレンダを見ると「そうでしたか」と、うなずいている。この商人は何でもお見通しのようだ。

夢から覚めるとき、腕に抱えたおぞましいものに心臓が飛び出すほど驚いた。しかし何を見たか思い出す事ができない。現実の把握こそが戦士の思考であるはずだ。恐怖に我を忘れるなど恥である。しかも、何に恐れたかさえも忘れるなんて戦士失格である。

「そういえば、アイフェはどこだ」

目が覚めれば夢から脱出できる。ならば、アイフェを置き去りに

したのではないか。漆黒の竜巻を思い出してシーグは背筋が冷たくなった。
「大丈夫、もうすぐですよ」
「何が？」
「ここを覗いてみてください」
レンダが下を指差す。アイフェはベッドの下に潜んでいるのだろうか。身を乗り出すと背中にドシンと大きな衝撃が走った。シーグは潰れたカエルのようにベッドに倒れる。首を背後に向けると銀色の髪がばさりと顔にかかった。
「おはようございます、アイフェ」
「おはよ。レンちゃん」
眠そうな声が短く返事をする。
「上から降ってきたアイフェをシーグ君が身をもって支えてくれたんですよ」
「あー、シー坊か。ありがとね」
背中にへばりつき肩越しにニンマリと微笑むアイフェを見て、シーグは言いたい事をこらえた。レンダも微笑ましい笑みを浮かべている。
「ところでガリウス卿から招待状が来ていますよ」
『嫌なやつ』の名前を聞いて、アイフェの腕に力がこもる。シーグはアイフェを持ち上げて首が絞らないようにした。「たかいたかーい」と頭上から無邪気な笑い声が聞こえる。
「ちなみに2通届いてます」
「1つは明日の決闘だよな」
「はい。もう片方は今日の見世物のお誘いですよ」
「なんだ、そりゃ」
「ガリウス卿対魔境のグリフォン。場所はアクリアエ・スリス。中々に興味深い対戦ですね」
持ち上げたアイフェをベッドに座らせてレンダから2通の書簡を受け取る。分厚い封筒には盾と杖を交差させた紋章が金で押印がさ

れ蜜蝋で封印されている。
「……ちょっと待て。封も切ってないのにどうして内容を知ってるんだ？」
「私は何でも知ってるんですよ。そうでしょ、アイフェ」
「んねー」
レンダが目配せするとアイフェが元気に返事をする。たぶん何も分かっていない。
シーグはベッドのサイドテーブルに置いてあったペーパーナイフで蜜蝋の封をはがした。さび一つない磨かれた銀のナイフで、翼と車輪を意匠化した紋章が刻まれていた。３つ折にされていた羊皮紙にはピッシリと文字が書かれていた。
冒頭に賢王シェンナ・グラドリカ陛下の在位より１５年。建国王サルファー・グラキエス生誕より、１３６年。メティス建国より１０３番目の年。と書かれていた。次に、今度はインボルグも終わりよい日和が続いている。麦が芽を出し今年の豊作が期待される、とか街道の雪は溶け賑やかになる。といった挨拶の前口上が延々と続く。その後はルーン文字が混じっていて目が痛くなりそうだ。
シーグは大半を読み飛ばし、公用語で書かれた文末だけを一読する。予想通り意味のある内容は最後の一行だけだった。
決闘の方式はヴァンガード、場所はアクリアエスリス、日時は明日の正午の四点鐘。ガリウスから伝えられた事そのままだ。
２通目の手紙も同じようにして読み終える。
ガリウスがグリフォンと一騎打ちをすること、場所はアクリアエスリス、日時は本日の五点鐘。と、書かれていた。
「ちなみに、朝日が一点鐘、落日が七点鐘ですよ」
ふと、疑問に思った事にレンダがすかさず答える。窓の外に目をやると庭の木蔭がずいぶんと小さくなっていて、東向きに伸びている。正午を少し過ぎた時間だ。
「つまり、今からでも昼食を食べる時間くらいあるって事ですね」

1章－27　丸焼き

＊

突き刺さるような視線にシーグは胃が痛くなる思いだった。自分が何を食べているのかも忘れそうになる。

氷の槍のような冷徹な気配を放っているのは、老齢の執事と若いメイドである。執事は乱れ一つ、埃一つない黒のタキシードを着ている。整えた白髪と、びっしりと刻まれた額の皺が彼の性格を現していた。

整った顔立ちのメイドは視線を伏せ表情も動かさない。給仕のため動かなければよくできた置物かと思うほどだ。

ガチャリとシーグが食器を鳴らすごとに眉一つ動かさず敵意だけが増大してゆく。テーブルマナーの悪さがよほど気に障るのだろうか。

「セレスト、ライナ。下がっていなさい」

「はい」

レンダに指示されると、返事までも完全に一致させて2人は部屋から出て行った。シーグはカラカラになった喉を潤すためグラスに手を伸ばす。薄められた果実酒が喉に心地よい。

「そっくりな2人だったけど親子か？」

「いえ、夫婦です」

シーグは思わず噴き出すところだった。どう見ても年の差が４０歳以上はある。

「まあ、身分違いの恋よりも実りやすいと思いますけどね」

レンダの言葉に苛立ちを感じ、シーグはフォークに突き刺した肉を口に放り込んだ。隣に座っているアイフェが真似をして、垂直にナイフを突き立てる。カン、と鋭い音が鳴り響いた。

「行儀の悪い人の真似をしてはいけません」

しかし、アイフェ無視して大口を開ける。
「サフィリアに言いつけますよ」
注意されるとアイフェはしぶしぶと肉を皿に戻した。頬を膨らませてレンダを恨めしげに睨む。
「ごちそうさまでした！」
アイフェは当てつけるように宣言すると、床に怒りをぶつける足取りで部屋から出て行った。
「ずいぶんとテーブルマナーに不自由な公子さんですね」
嫌味ったらしい言葉にシーグは何もいえなかった。皿の周りにソースが飛び放題だったからだ。口をつけたグラスの下にもにじんだ跡がある。
レンダの食器の周囲にはしみ一つないし、アイフェにしてもシーグほど酷くはなかった。
「魔境暮らしが長いものでね」
「滅亡前は違うでしょ。仮にも一国の公子なんだし」
「そのころは、空や星があることも知らなかった。太陽は長細いと思っていたっけ」
冷たい石室の裂け目からもれ出るわずかな光と、定期的に開けられる扉から差し出される食事。それが世界のすべてだった。生かされているだけの状況から救い出してくれたのがリーザだった。
「これは美味しいな。ガチョウの炙り肉なんだろ」
うっかりと嫌な過去を明かした気恥ずかしさも手伝って、シーグは無理やり話題を変えた。
「これにレイザーク名産の野菜を添えれば完成なんですが、いい案が浮かばないんですよ」
「保存に使う野草なんてどうだ。たいていは苦味があるが、刻んでふるかける程度ならきつくならない。ソースが甘いし合うんじゃないかな」
シーグは肉を一切れ口の中に放り込んで味を確認する。
「なるほど。あえて苦味を加えて、甘味を引き出すわけですね。な

るほどこの料理にはふさわしい」
「なんて名前の料理なんだ」
「シージペリラスの丸焼きです」
「は？」
「焼いた色があなたの髪の色を表現しており、出店で売るときは黒く塗った串を使う。レイザークでは臆病の象徴はガチョウですからね」
レンダの一言でいい気分が台無しになった。
「どこで売っているんだ、こんなもん」
「町中の出店で売っていますよ。ヴァンガードの噂が流れ出したときから販売開始です」
「……」
「ただの軽いジョーク商品ですよ。お祭り騒ぎの出し物に細かい指摘は無粋ですよ」
「確かにな。腹が立つよりも呆れたよ。誰がこんな馬鹿な事を思いつくんだが」
「私です」
レンダは生真面目に答えた。
「……なに？」
「新商品です。お祭り騒ぎはかき入れ時ですからね」
レンダは懐から手帳を取り出した。
「ガチョウのあぶり肉の売り上げから見るに、シージペリラスの悪評はメティス全域に及んでいるといってもいいでしょう。他にもアンチ・シージペリラスのグッズの売り上げは急激な右肩上がりの天井知らずです。具体的に報告しましょうか？」
「いらん」
「有益な情報を集めているんですよ。ヴァンガードの審判は観客の次第で態度を変えますからね」
「で、あんたは儲けるわけだ」
「はい。企画者の役得という事で。ちなみに現状はあなたが徹底的

に不利ですよ」
悪びれたふうもなく、レンダはパタンと手帳を閉じた。

1章－28　切れる

「まあ、真面目な話はここまでにしておきましょう。さて、冗談としか思えないヴァンガードのことですけど」
「……俺は大真面目だ」
「生真面目さと勢いだけで勝てたら苦労はしません」
シーグは黙り込んだ。夢の中でサフィリアにも指摘されたとおり、まるで無策だったからだ。唯一の勝機といえば……。
「シャープネス、って知ってるか？」
レンダの表情が神経質にピクリと動いた。
「知ってます。何でも切れる物質の事ですね」
「ずいぶんと怪しい話だな」
「啓示学上の話ですからね。つまり学問上の象徴として定義だけ存在する机上の空論」
レンダは優雅な手つきでフォークに持ちかえる。
「のはずでしたが、実物をリーザ・オーメントが作ってしまった。完成したのは小さな針だったんですけどね。いとも簡単にグラムファーレの装甲服を貫いてしまった。当時のメティスは大騒ぎでした。ちょうど5年前の出来事です」
レンダは雑な手つきでフォークで炙り肉をブスリと串刺しにした。
「服に針が通るなんて、当たり前じゃないか」
「弓矢もレイピアもはじき返し、火でも焼けないグラムファーレの自信作ですよ。普通の布じゃありません」
レンダは大口を空けて肉にかぶりつく。シーグが見てもまったく行儀がなっていない。
メティスから帰ってきたリーザが自慢げに話していた時期だ。楽しげに剣の形をどうするか言っていた。レイザークが滅亡し、リーザが行方を絶つまでの1年間で剣は完成し、今はサフィリアが持っているのだ。

「以来、メティスの中では詩人でさえ口にするのをためらう言葉です。実物を隠し持っている人間がいたとしたら重罪ですね」
レンダは茶化すようにナイフを軽く振って見せた。
「で、今はサフィリアが持っているわけですね？」
「なんでそれを！」
「とことん隠し事には向かないですね。口は災いの元とは、あなたのためにある言葉だ」
シーグが思わず叫ぶとレンダは満面の笑みでナイフを置いた。謀られた事にシーグはようやく気づく。
「何でも切れます、一家に一振りとか言ってへんなナイフを売り出したりしませんって」
「俺が心配しているのはそんな事じゃない」
「名義の貸し出しによる契約料とか謝礼金ですか。それなら、きちんと準備しますけど」
「違う」
「異端者の剣をサフィリアが持っていたことは誰にも言いませんって。私は今のところあなたの味方です」
最後にあいまいな答えを返して、レンダはナイフとフォークをおいた。
「アクリアエ・スリスでは魔術の力は最大になります。シャープネスだって例外じゃありません。何でも切れる剣と何でも止められるアイアンシールド卿の戦い。こいつは見ものですね」
レンダはにこやかにナプキンで口元を拭きながら手帳を開いた。
「賭けの元締めでも始めるつもりか」
「すでにやってます。一口銀貨一枚からどうぞ。何合であなたが負けるとか、戦う前に逃げるとか、メティスから脱出できるかどうかでも賭けられますけど。あなたが勝てば私は大儲けです」
腹が立つのも通り越してシーグは感心するしかない。ため息交じりの吐息をつくと背後から視線を感じた。横目で背後を見るとカーテンがわずかに揺れている。窓がわずかに開かれたせいで風が入っ

てきたのだ。
「レンダ、ここの住人には覗き趣味があるのか」
「仕事でなら有能ですが、趣味ではやりませんよ。……覗き魔に心当たりはありますか」
聡いレンダは事態に気づいたらしく声を潜める。
「ありすぎて検討もつかん」
「自慢になりませんよ、それは。とにかく捕まえるとしましょうか」
立ち上がろうとしたシーグをレンダが身振りでとどめる。
「ここはメティスで一番堅固な屋敷と自負しています。魔術の守りも設置していたのに突破された。相手は相当の凄腕ですよ。優秀な侵入者は退路の確保も怠らず、逃げ足も速い」
「だったら、どうするんだ」
「私たちの方が逃げるんですよ」
レンダは苦笑しながら指先で机をトントントンと3度叩いた。すると、床下でコトンと何かが外れる音がした。
「さて、行きましょうか」
レンダは席を立ちシーグの肩を叩いた。

1章－28　切れる（後書き）

ずいぶんと間が空きました。
更新速度は鈍足のままですが、何とか更新してゆきたいと思います。

1章－29　引く

「侵入者は魔術師か？」
「絶対に違います」
シーグが部屋の外に出るとレンダは派手に音を立てて扉を閉める。外の侵入者に知らせるためだ。
「魔術の罠を突破したんだろ。魔術の素人とは思えないんだが」
「メティスに来て半日で、立て続けに４人の魔術師の裏をかいた人が目の前にいるんですけどね」
「相手がやる気満々で向かってきて、勝手に自滅しただけだ。警戒して潜んでいる相手を捕まえるのとは違う」
「なるほど、潜んだ相手を追いかけるのは厄介です。ならば、追いかけてくる敵を捕らえるとしましょう」
「どうやって？」
「答えはまもなくわかります」
レンダが横目で扉を見ると、板を踏み割る派手な音が扉越しに聞こえてきた。
「な、何よこれ！」
侵入者らしくない元気な声にシーグは聞き覚えがある。レンダは扉を開けて部屋の中に戻った。
「て、てめえ、このクソ野郎」
ただし、語気の荒さは全然違っている。威勢のいい、もといドスのきいたガラの悪い声は女性のものとは思えない。
「ずいぶんと凶暴な侵入者ですね」
「ふざけた真似しやがって、近づくんじゃねえ！」
部屋に入ると同時に目の前にナイフが迫る。シーグは首をかしげて飛んできた凶器をよけた。この少女の投げるナイフとはとことん縁があるらしい。
「シ、シーグ！」

「やっぱりミラか」
ミラは窓際近くの床を突き破って膝まで埋まっていた。肩にかけたマントも半分穴にはまっている。
「罠に誘い込むのが有効なんです」
「策士だな」
「商人ですから」
どうやら、商人というのは狩人の真似事までするらしい。ミラが穴にはまった足を抜こうと体を動かすと、逆に太ももまで沈んでしまった。
まるで底なし沼のようだ。
「一人じゃ上がれそうにないな。ほら」
「あ、ありがとう」
ミラはうつむきながらシーグの手をとった。引きずり上げた時にミラが倒れ掛かってきたので、シーグのズボンもべたべたになってしまう。落とし穴の中にはネバネバのジェリー状のものが溜まっていた。
「ここへ何しに来たんだ?」
「何って……」
ミラは言いよどんで黙ってしまった。
「これをシーグに返しに来たの」
差し示した皮のマントは半分以上がネバネバの中に埋もれていた。
「構わないよ、どうせ譲ってもらったものだし」
「だけど……」
「わざわざ返しに着てくれなくてもよかったのに」
シーグが何気なくもらすとミラは唇をかみ締めた。目には薄っすらと涙が浮かんでいる。
湿気を帯びてずっしりと重くなったワンピースがミラの体格を浮き上がらせていた。上から見下ろす姿勢なので、胸元が特に危うい。ほっそりとした腰と長い足にシーグは思わず目を泳がせると、ニヤニヤ笑いのレンダと目が合った。

「もう少し粘着性をつけたほうが、あなたの趣味にあいますか？」
レンダはどういうわけか、シーグに聞いてくる。
「お嬢さん、足を急いで洗った方がいいですよ。浸入したことは見なかったことにします」
ミラはのん気にいう商人をきつい目つきで睨みつける。
「ライナ」
レンダが声をかけると壁の一部が外れ、気配も感じさせずにメイドが現れた。
「罠の発動、ご苦労様でした。このお嬢さんに湯と着替えを用意してください」
メイドは深く頭を下げると、手に持ったタオルをミラに手渡した。ミラはライナとレンダをきりつける勢いでにらみつけている。盗賊が罠にはめられたのだ。屈辱以外の何ものでもないのだろう。
ライナは無表情のままで、男達の視線からミラを隠すように立ちふさがった。。
「マントは洗って乾かすと使えるでしょう。早く着替えてらっしゃい」
急かすレンダをミラは苛立たしげに睨みつけた。タオルで足についたネバネバを雑に拭き終えるとミラは小走りに扉に向かった。最後に何かを訴えるような目でシーグを見てから部屋から出て行く。最後の最後までミラの体が視線に入らないように動きながら、ライナは扉を閉めて出て行った。
落とし穴を覗き込みながらレンダはメモを取り続けている。
「わざわざ、あなたに会いに来たんですね」
「あんなボロマントを返しに来るなんて、ずいぶんと義理堅いな」
「……さてはあなた、アホですね」
レンダはため息と共に手帳を閉じて手を3度叩く。また壁のどこかが開くのかと思ったが、普通に扉から執事が入ってきた。
「セレスト、後片付けをお願いしますよ。それから、シーグにも着替えを用意して」

執事は深く頭を下げると、シーグのことなど無視して窓際にある落とし穴まで規則正しい足取りで歩いていった。
「普段は愛想のいい執事なんですよ」
「俺が何か嫌われる事をしたのか？」
髪や瞳の色が原因だろうか。シージペリラスであることが不満なのだろうか。
「どっかの誰かが部屋を壊滅させたからですよ」
レンダはしみじみと嫌みったらしく言った。
「あそこはセレストとライナが一番手をかけていました。大破したシャンデリアなんて大陸の反対側から取り寄せたのに」
シーグの引きつった表情を見て、レンダはにこやかに微笑む。
「さて、お嬢さんの着替えが終わったらアクリアエスリスに向かいますよ」

1章－30　救いようがない

＊

太陽は西に傾きつつある。

メティスは山の上にあるというのに、不思議と寒さを感じない。

インボルグを過ぎるまでは風から身を守るためにマントが必要で、昼でも暖炉がほしくなるものだ。

レンダの用意してくれた礼服は、薄着の上に体にピッタリしているので風が吹けば体の芯から冷えることだろう。体を動かして暖めようにも、わずかに屈むだけでズボンが膝を絞めつけてくる。

「火山地帯だからですよ。アクリアエスリス周辺は、地面が熱を発しているので標高の割に冷えません。城門の外とは違います」

シーグの思考にレンダが返事をした。

「礼服なので動きにくくても我慢してください。もしも何かあったら今度こそ弁償してもらいます」

白いシャツに黒いズボンとジャケットは念入りにアイロンがかけられている。肌触りからして高級な素材であることは明らかだ。

「銀貨じゃ足りないか？」

「金貨で１０枚です」

レンダは断言した。ひどい相場にシーグは言葉に詰まる。金貨１枚あれば、一家が１年食うには困らないからだ。

「弁償や復讐は最低でも１０倍返しにせよ。それが家訓ですから」

レンダは生真面目に語った。今度こそ本当に逃げだそう、とシーグは思った。

「……なんでメティスの住人は人の考えが読めるんだ？」

「誰も心なんて読んでません」

レンダは相変わらず手帳に何かを書き込んでいる。

「何でもお見通しじゃないか」

「言葉通りに見ればわかるからです」
顔も上げずレンダはやる気のない言い方をする。
太陽は天頂を通り過ぎ、木影はずいぶんと長くなっていた。3度の鐘が聞こえてからずいぶんと経つ。ガリウスが戦うという4点鐘が今にも鳴り響くのではないだろうか。
「馬車で十分間に合うから、慌てなくていいです」
にらみつけると、レンダは楽しそうにシーグを見つめ返した。
「たかが着替えに、どうして時間がかかるんだ?」
「女性とは古今東西そういうものです」
「服を変えるだけなのに?」
「……心底救いようのない人ですね」
レンダは大仰にため息をついて手帳をパタンと閉じた。それが合図であったかのように、屋敷の扉が遠慮がちに開かれた。しかし誰も出てこない。扉越しとはいえ、シーグに気配も足音も感じさせない人物は一人しかいない。
「ミラだろ?」
呼びかけると、扉に隠れるようにしてミラが半分だけ顔を出した。唇には薄っすらと紅を差しており、黒い髪に銀色の髪留めが輝いている。絹のショールをほっそりとした肩に羽織っていた。シーグが近寄っていくと、ミラは慌てて引っ込んでしまった。
「どういう事だ?」
「そういう事です」
途方にくれてつぶやいたが、レンダの返事はそっけない。しばらく待っていると、アイフェに背中を押されてミラが出てきた。
薄い青色のドレスの肩が大きく開いており、薄い絹のショールを羽織っていた。細いシルエットはミラの細く引き締まった体つきを強調している。薄手のショールが微風にもなびく様子と足音も立てない静かな歩き方が、少女に風にも折れそうな儚い印象を持たせていた。
ミラは居心地悪そうに顔を背け、視線をこちらに向けようともし

ない。
　無言のまま時間が流れる中、シーグは頭に鈍いうずきを感じた。何年も前だが、リーザが自分で仕立てたドレスを着てきたことがあった。ボーっとしていたシーグの頭にリーザが拳骨を落としたからだ。「おしゃれをした女の子の前でボンヤリしちゃダメ！」と、リーザにしては珍しく声を荒げていた。今から考えると、拳の痛みをこらえていたせいかもしれないが。
「よく似合っている、と思うぞ」
　ミラはびっくりした様子で顔を上げた。
「わ、私。変じゃないかな？」
　あえて言うなら、妙にオドオドとしているところが変だ。
「やっぱり、おかしいのね」
　勝手に決め付けるミラに、シーグは慌てて首を横に振った。勘の鋭い少女は余計に不安そうな表情になる。
「あー、青いのがいいと思う」
「青い？」
　ミラは怪訝そうな表情を浮かべた。
「空も湖も青いし、色が合っているだろ。だから……大丈夫だと思う」
　シーグは気まずさから、たどたどしく言葉をつなげていった。ミラの目が細められてゆく。不安から怒りへと変化しているのだ。
「本当に良く似合っていますよ。お嬢さん」
　レンダの快活な声に、ミラは瞳に不信の色を浮かべて顔を上げた。
「罠に服に、色々とありがとう」
　ミラは棘だらけの言葉をレンダに返す。
「いやいや、本当に申し訳ない」
　レンダの感情のこもらない声に、ミラはますます表情を険しくしてゆく。
「そのドレスはね、風と水をイメージして作られました。が、着こなせる女性が少なくて困っていたんですよ」

ミラのことなど目に入らないようにして、レンダは流れるように話す。

「体の線を強調するのが、今の流行なんですが。いやいや、メティスの女性達はいささかふくよか過ぎる傾向がありますからね」

「だ、だけど私は日に焼けているし……」

「薄い色に白すぎる肌ではアクセントがかけますからね。ちなみにこれをデザインした人は南部の人で、太陽の下で健康的に過ごす女性へ送るために作ったとか……」

レンダは言葉を切って、ミラの全身を真剣に眺める。

「まさしく、あなたのために作られたといってもいいでしょう。私の見立ては間違っていなかったようです。アクリアエスリスで、女性達の嫉妬の視線に気をつけてください。男どもから誘いを受けても絶対に断るように」

レンダの賞賛と忠告の入り混じった言葉に、ミラは頬も首筋も朱に染めている。

「もし気に入ったのなら、差し上げますよ」

「本当に？」

レンダの気前の良さに、ミラはまぶしいくらいの笑顔を見せている。

「若い女性に投資するのは良いことです」

何重にも含みのある言葉だが、うれしそうなミラは全く気づいていない。

「さあ、お嬢さん。馬車に乗ってください」

レンダにエスコートされて、ミラは多少ギクシャクしながらも馬車に乗った。

「さて、もう一人のレディーはあなたに任せるとしますよ」

レンダは最後に一言かけて馬車の中に消えた。もう一人のレディは見るからにふくれっ面で馬車をにらんでいた。アイフェの長い髪は金色のレース模様がある赤いリボンで縛っていて、足元まで隠れるようなフレアスカートを着ている。食事中にレンダに注意された

ことをまだ怒っているようだ。
着替えている上に、馬車を遠巻きに見ているところを見ると留守番をするつもりはないらしい。
「アイフェ。出発するぞ」
声をかけても返事がないので、シーグは背中を向けて馬車に向かった。背後からせわしい足音が近づいてくる。振り返るとアイフェは再びふくれっ面でにらんでくる。ただし、さっきよりも距離が近くなっていた。
「遊んでいるなら置いていくぞ」
アイフェは無言のままで、大またで馬車のほうに歩いていった。最後には馬車に恨みでもあるように足音も荒く馬車に乗り込んでしまった。
馬車の中で意地悪く微笑むレンダの姿が思い浮かぶようだった。

1章―31　聖都

＊

馬車の窓を流れてゆくメティスの風景をシーグはぼんやりと眺めていた。

石畳で舗装された道を馬車は静かに進んでゆく。広い道の両脇には、白大理石で作られた建物が並んでいた。

道を行く人々も一様に小奇麗な格好をしていて、広場には水の湧き出す噴水がある。絵物語を切り取ったような、綺麗で清潔な町並みが続く。

隣の席に座っているミラも物珍しそうに窓から見える風景を見ている。不思議に思っているとミラと視線が合った。

「普段、私達はこっちには来れないから」

「メティスに住んでいるのに？」

「私達なんかが上都に近づいたら、衛兵ににらまれるの。下手をすれば牢屋送りになってしまうわ」

「上都？」

「アクリアエスリスの周辺のことよ」

よく見てみると旅人の姿が全く見えず、目抜き通りだというのに市場のような盛況さがない。ローブを着ているのは魔術師だろうし、金属鎧を着ているのは衛兵だろう。紋章の入った胴着を着ているのは要職にある人間に違いない。

「ほら、道の脇に尖塔が建っているでしょ？」

ミラの指差す方向には、道の両脇に槍のように鋭い尖塔が建っていた。杖と剣と盾が交差する紋章が刻まれている。ガリウス・グラムファーレの胸にも同じものがあった。

「塔から先は、刻まれた紋章の家の許可がなければ入れないことになっているのよ」

「そんなに進入禁止にしたいなら、城門でも作ればいいのに」
「城門は無骨だし、威圧的ですからね。メティスは野蛮なことを好みません」
レンダが手帳に書き込みながら生返事をした。
「だけど、進入禁止なんだろ。やっていることは同じじゃないか」
「ですけど、メティスのお偉い方々は無理強いしていると思われたくないようです」
「分かりにくいじゃないか。旅人とか住人は絶対に不便だと思っているぞ」
シーグのつぶやきにミラもうなずいている。
「ですけど、そんな風に思われていると考えたくもないんですよ。そんな事を考えてしまう事さえ禁止したくて仕方がないんです」
「単なるわがままにしか聞こえないんだがな」
「お偉い方たちは、別に理解してほしいと望んでいないようです」
メティスの支配者達が聞く耳を持たず、反感を気にしないことは確かなようだ。わがままな乳児よりも手がつけられない。
「アクリアエ・スリスに近づくほど、町並みはさらに豪華で絢爛になりますよ。ここから先が一番の観光スポットです」
勝手に見てくれといわんばかりに、レンダは手帳の中身に没頭している。
空を貫く塔のようにそびえる丘、アクリアエスリスを中心にしてメティスの町は扇状に広がっている。扇の中心に近づくほど、町は美しさを増してゆくらしい。
しかし、シーグは知っている。扇状の町の隅には、一歩裏通りに入るとゴミ溜めのような一角があり、誰も住まない荒れた廃墟が無数に存在する。
本来、そこには貧しいながらも寄り添って生きている人々の姿があるはずなのだ。しかし、城壁を乗り越えたときにも、建物はあってもアイフェ以外に誰もいなかった。
シャドーウルフに襲われ黒マントを追い詰めたときに誰とも会う

ことはなかった。家に隠れたときにも、無人で人が住んでいる形跡はなかった。

このような異常な町並みは通常ありえない。誰かの意図によって形作られたのだ。

「メティスが住人を追放しているのは、ガリウスなのか？」

シーグの問いにレンダは手帳に書き込む手を止めた。

「彼は魔術師のために聖域を作るつもりなんですよ。魔術を強めるために必要なすべてをそろえ、魔術を弱めるすべての物を排除する」

レンダはサフィリアと同じことを言った。

「魔術を弱めるものって何だ」

「色々あって説明するのが面倒です。自分で考えてください」

レンダはそっけなく言った。しかし、視線はシーグを射抜くようにまっすぐと向けられている。

「町の人々が邪魔なので、追い出しているわけか」

「人聞きの悪い。政策上は移住となっています」

「……今度は体面を気にするわけか？」

「外交上の問題がありますからね」

つまり諸外国に対しては体面もこだわりもあるが、住人に対しては気遣い無用というわけだ。

「ちなみにお偉方の悩みの種がメティスに滞在中です。産まれながらに災厄の象徴を持つものであり、赤毛で亡国の公子なんですけどね」

「なるほど、俺か」

「そのとおりですよ。シーグ・ペイラック。ガリウスはアクリアエスリスであなたを討ち取って、聖域の中心にシージペリラスの墓場を作ろうとしている」

「俺の墓場から世界は滅んでいくって話だ。町の中心にそんな不吉なものを置くのか？」

「その災厄から世界を守るのが魔術であり、グラムファーレであると宣言したいわけなんですよ。すると、メティスの威光を示せるわ

けで、外交的にも内政的にもやりやすくなる」
つまりは民衆の移住とやらが、更にやりやすくなるということだ。
「あなたは生贄としては特級品なわけです」
「この町に来てから何度も聞くな。生贄やら晒しものっていうのは、そんなに縁起がいいのか？」
「犠牲をささげるっていうのはね、古今東西当たり前の習慣ですよ」
レンダは冷めた笑みを浮かべる。無表情の上に無感情な声に、シーグは胸が冷たくなる思いがした。
「聖域に魔術、外交や内政、正義や信念。司るものは異なりますが、すべてが犠牲や残酷さとは無縁であったためしがない。逃げますか？」
「そのつもりはない」
「急いで決める必要はありません」
「シーグ……」
か細い声を上げたミラが、シーグの腕をギュッとつかんだ。怯えと怒りをミラの手から感じる。
「これが墓場の下見とならないことを祈っておくとしましょうか」
レンダは不吉な言葉を淡々とつぶやいた。突然、ガンガンと大きな音がしてシーグとミラは席から腰が浮くほどに驚いた。
「何を話しているのかわかんない！」
退屈してかんしゃくを起こしたアイフェが、座っている席をカカトで何度も蹴りつけたのだ。
「日々の研鑽を怠らないことですね」
アイフェが頬を膨らませて抗議するのに対して、レンダは大きな欠伸をしながら手帳に視線を戻した。アイフェは目をパチクリさせて考え込んだ後、助けを求めるようにミラをじっと見つめた。
「あなたの名前がケンさん？」
「ううん、私はミラっていうのよ」
「じゃあ、ケンさんって誰？」
「名前じゃなくてその、アイフェが勉強しなさいって事じゃないか

しら？」

「あ、そーゆーことかー。んー？　おー……グゥーーー」

なぞが解けて笑顔になった後、理解して機嫌を損ねたらしい。アイフェは獣のようなうめき声を上げて、レンダをにらみつけている。

どうやら『勉強しろ』も禁句であるらしい。ミラは笑うのを必死にこらえているし、レンダはそ知らぬ顔を決め込んでいる。

シーグは緊張をそがれた思いで何となく窓の外に目をやる。するとカチャリと金属音がして、さっきまで馬車を引っ張っていた馬が、執事のセレストに引っ張られてゆく。シーグと目が合うと、セレストは一部の隙のない礼をして去っていった。

「馬を持っていかれたぞ」

「今から飛びますので」

「何を馬鹿なことを――」

シーグが言い終わるよりも早く、馬車が浮き上がったのだ。窓から見える地面がどんどんと遠くなってゆく。塔のようにそびえる丘の急傾斜を、馬車が上昇しているのだ。

ミラもアイフェも興味深々で窓の外を見ている。メティスの最も高い場所に向かって地面は遠ざかってゆく。サフィリアはこんな風景を見ていながら、レイザークに咲く花のことを思っていたのだろうか。誰もがあこがれ美しいと思える景色を見ながら、どこの道端に咲くようなちっぽけな花を見たいと。

ガリウス・グラムファーレの妻となりメティスの統治者となることを、高みから人々を見下ろして生きることをサフィリアは望んでいるはずがない。

「馬鹿なことが当たり前に起きる。それが魔術都市なんですよ」

レンダは自嘲地味につぶやく。馬車はアクリアエスリスの頂上に向かって、ゆっくりと昇ってゆく。

1章－32　守るもの

＊

「うっわー」

馬車の中からアイフェは口を丸くしてあちこちを見回している。ミラも城のようにそびえたつ巨大な建物を驚きの表情で眺めていた。

大きく開かれた門は馬車が４台並んでも余裕があるほどで、白銀色に光るよろいをまとった衛兵が左右を固めていた。メティスの城壁についているもんよりもはっきり言って立派で大きい。赤マントの乗っていたチャリオットが良く似合いそうな豪奢さだ。

馬車の窓から顔を出そうとしたアイフェは、リボンが引っかかってのけ反ってしまった。

「これ、邪魔！」

「ダメよ。せっかく可愛く結んでいるのに」

髪を止めるリボンを引っ張るアイフェをミラがとどめる。

「だけど気持ち悪いんだもん」

アイフェは唇を尖らせて文句を言い、ますます力をこめてリボンを引っ張っている。

「ちょっと動かないでね」

ミラはアイフェのリボンを解くと、慣れた手つきで結びなおした。見た目は蝶の羽のような結び目だが、よく見ると船具止めと呼ばれる船乗りの結び方だ。引っ張っても簡単には解けないが、結び目が頭を締め付けることもない。リボンを軽く引っ張ったアイフェも気に入ったらしく、ミラにニンマリと微笑みかけた。

馬のない馬車はすべるように城門をくぐってゆき、赤い絨毯をしかれた大広間の前でピタリととまる。建物の中なのか外なのか思わず忘れそうなほどの広さがある。

使用人と思しき人物が扉を開けにやってきた。馬車から降りるシ

ーグの赤毛を見て怪訝な表情を浮かべている。
「ここからは帽子をかぶった方が良さそうですね」
レンダは馬車から降りるミラに手を貸しながらシーグに忠告する。
アイフェは馬車から飛び降りると、レンダからミラの手を奪い取って先へ先へと進んでゆく。
「すっかり嫌われてしまいましたね。どうしたものでしょう?」
レンダは困り果てた様子で使用人に問いかける。いきなり質問された使用人は目を白黒させている。
「荘厳な光景だとは思いませんか、シーグ」
「確かにすごいな」
3階まで吹き抜けになっているし、大人が3人手をつないでようやく一周できる巨大な柱がどっしりと構えられ、壁には精緻な壁画が描かれている。この回廊だけとっても、レイザークの王宮に勝るだろう。
「だが、大きいばかりで守りには不向きな建物だな」
「あなたは本当にそればっかりですね」
シーグの答えに、レンダは肩をすくめて苦笑している。
「メティスの建築物はね、軍事的な守りのために作られていないんです」
「だからといって、住みやすそうにも見えないぞ」
「居住性も優先していません」
「じゃあ、芸術家の都合か?」
「正解にかなり近い、と言えますね。権威を守るためですよ。魔術都市としての体面をね」
「メティスは本当にそればっかりだな」
「まったくです」
やり返されたレンダは肩をすくめて話を打ち切った。
「見て見て、ミラ。家の中に川とお空があるよ」
アイフェの元気な声が建物の中に響き渡る。巨大な建物の中に、人気がないのでシーグは気味悪く感じた。

「どうして誰もいないんだ？」
「忠義に厚い人々は、みんな先に到着しています。指定時間のずっと前に集合するのが貴族のたしなみ。今頃は闘技場でグラムファーレの演説を聞いているはずですよ」
「やっぱり遅刻したんじゃないか」
「我々は忠義が薄いし、貴族でもないんで構いません」
レンダはそっけなく答える。広間を抜けるとまっすぐと回廊が続いていた。ミラとアイフェは水が流れる水路に張り巡らされた透明の板の上を歩いて進んでいる。両脇と上部にも透明の板が張り巡らされていて、透き通るほどに青い空が広がっていた。
まるで空の上を歩いているような錯覚にとらわれる回廊である。
「水晶の回廊です。ここを抜けると闘技場ですよ」
２０歩ほどの回廊の中央で、ミラとアイフェは空を眺めていた。その時、回廊の奥から人々の歓声が打ち寄せる波のように聞こえてきた。
同時に、建物全体をゆるがせるような鐘の音ががゆっくりと４度響き渡った。ガリウスとグリフォンの戦いの始まりを知らせる鐘の音だ。
先ほどまでの静寂とはうって変わって、回廊の向こうからは声援が嵐のように飛び込んでくる。アイフェはすっかりおびえてしまって、ミラの背中に張り付いてしまった。レンダがうやうやしくミラの手をとると、アイフェは取られまいとするようにさらに強く抱きつく。
「こういうときは、堂々と行くべきですよ。怯えれば軽く見られるだけですからね」
ミラとシーグがうなずいたのを見て、レンダは不敵な笑みを浮かべた。
「それでは行くとしましょうか。建前と権威に支えられたメティスの聖域へと」

1章－33　檻の中の戦い

＊

グリフォンが闘技場の片隅にうずくまっている。
グリフォンはワシの頭と翼とカギ爪、ライオンの胴をもった怪物である。馬さえも軽々と持ち上げる巨大なカギ爪と、槍のように尖った巨大なクチバシ。上空から勢いをつけて繰り出される攻撃は、すべてが一撃必殺の威力を秘めている。レイザークに多数生存する怪物であるが、その美しさと雄大さに心酔したレイザークの建国王はグリフォンを意匠化して王国の紋章としてしまったほどである。
グリフォンは怒りに目をらんらんと輝かせいる。猛禽類以上に気性の荒い怪物が動きをとめているのは何らかの魔術が働いているためだ。
対して、闘技場の反対側に位置してするのがガリウス・グラムファーレだ。
装飾があちこちに施された儀礼用の甲冑を思わせる格好に、大ぶりの短剣だけを下げている。しかし、身に着けたものすべてが魔術の品なのだ。複雑に組み合わされた紋様や象嵌された宝石の一つ一つに力が秘められており、通常の剣では傷一つつけられない。
長さ５０歩ほどの円形の闘技場の約４分の１をグリフォンが占めている。最前列からは、グリフォンの羽の一枚さえも見てとれるほどに近い。観客席は満席でありグリフォンが暴れまわることがあれば、甚大が被害が出るだろう。しかし、怪物の存在に興奮するものはあっても怯えるものは皆無であった。
闘技場と観客席の間は、光り輝く格子で区切られていたからだ。言うまでもなくそれは防御壁であり、５階ほどの高さにまで伸び上がっている。さながら、ガリウスとグリフォンは巨大な鳥かごの中で対峙しているようであった。

シーグたちはレンダに伴われ、主賓の集まるロイヤルボックスに移動していた。明らかに遅刻してきた一団を見て怪訝な表情を浮かべるものもいたが、レンダはそ知らぬ様子でミラを伴って指定された中央の席に向かう。レンダがミラを丁重にエスコートし、椅子に座らせると周囲からひそひそ声が聞こえてくる。

「彼女は一体どこの貴婦人だろうか？」「さしずめ、南国の姫君であろう」「そういえば、南方でルビー鉱山が新たに見つかったとか」「レンダ卿は世界中と商売をしておるというし……」「うむ、宝石商の間でただならぬ動きがあるかもしれん」「いやいや、私は銀の相場が気になるね。銀とルビーは魔術の触媒として相性が良いのだ」

などとささやきあう声が聞こえてきた。ミラがきぜんとして振舞い、落ち着いた様子なので主賓たちは勝手に想像を膨らませているようだ。

そのせいで赤毛を帽子の中に押し込んだシーグは全く注目されずにすんだ。ミラを取られてしまったために、アイフェはシーグの足に張り付いている。椅子に座っても、銀髪の少女の存在に気づいた者はほとんどいなかった。

ガリウスが闘技場の中心に進み出ると群集の興奮は最高潮となった。高貴さを旨としているロイヤルボックスの主賓たちは、声を荒げることなどしなかったが一様に緊張し身を乗り出し、ガリウスとグリフォンを食い入るように見つめている。

ガリウスは無手のまま前進し片手を軽く挙げた。それが合図であったのか、グリフォンはカギ爪で大地を力強く蹴って宙に飛んだ。その巨体に似合わずワシのように軽やかに飛び立ったグリフォンは、瞬く間に檻のぎりぎりの高さへと至る。２度翼を羽ばたかせて地上をにらみつけると、矢のような勢いでガリウス目掛けて突き進んだのである。悲鳴と歓声が入り混じり、闘技場全体が揺れているようである。

だが、ガリウスは逃げるそぶりなど見せない。仁王立ちのままで、

片手を軽く振り上げただけである。鉄扉に大槌が当たったような轟音は、観客達の歓声を凌いで大気を激震させる。逃げるように後退したのはグリフォンであった。

「アイアンシールドだ！」

観客達が喝采の声を上げている。

ガリウスの通称と同名の魔法具は、岩をさえも砕くグリフォンを一撃を簡単にはじき返していた。

いや、それだけではない。グリフォンのカギ爪は根元からへし折れている。もはや地に立つ事さえかなわなくなったグリフォンは、翼を羽ばたかせ空へと逃げようとする。

しかし、ガリウスは腰ダメに構え両手で何かを担ぎ上げる仕草をとった。それを見て、群集の声は津波の前触れのように静かに引いていった。

「一撃必殺、炸裂粉砕。砕いてくれるぞ、貴様の魂までも――」

ガリウスの手に炎で作られた巨大な円盤が現れる。

「焼き尽くせ、回転炉（ローティター）！」

ガリウスの怒声と共に真紅の円盤が打ち出された。燃え盛る円盤は大きく弧を描いて、グリフォンの背中に突き刺さる。一瞬後、太陽が落ちてきたかのような爆発が巻き起こり、グリフォンは魔術の檻にたたきつけられた。それでもグラムファーレの結界陣は小ゆるぎもせず、グリフォンの巨体をガリウスのほうへ押し出したのである。落下してくるグリフォンに対し、ガリウスは無造作に右手を掲げるだけだった。

「心魂、粉砕、撃滅。来たれ、アヴェンジャー！」

朗々と唱える呪文が闘技場全体に響き渡り、ガリウスの右手に巨大な大剣が現れた。ガリウスが全身をねじるように下段に構えると、刀身にまとわりつく青い光が荒波のように揺れ動く。レンダの屋敷の中で見たときよりもさらに刺々しく凶悪なシルエットであり、剣が倍も巨大になったように見えた。

翼を燃え上がらせ落下してくるグリフォンに、ガリウスは大また

に一歩踏み出してアヴェンジャーを下段から振り上げた。
何かが爆発したかのような衝撃が走り、魔術の檻はもだえ苦しむように揺らめいた。胴を真っ二つにされたグリフォンが、闘技場の中央で血の海に沈んでいる。
ガリウスは一歩も引くことなく、一歩踏み出しただけでグリフォンを打ち倒したのだ。あまりにも圧倒的な勝利に観客達は喝采も忘れ、不気味な静寂に包まれている。

1章－34　客観的

「アクリアエスリスでは、アヴェンジャーの威力は跳ね上がります。剣の切れ味はさらに常識外れになり、一振りでサフィリアの風の魔術とマイリグの火の魔術を足して数倍にした脅威が襲い掛かります」

レンダは淡々とシーグに説明した。

「近寄るのも大変だな。ところで、マイリグって誰だ」

「メティオスマッシャーです」

「……黒くて陰気な奴だっけ？」

「チャリオットに乗っていた偉そうな方です」

「ああ、赤い奴か」

「はいはい、そうですよ」

シーグはいい加減に返事をし、レンダも適当にうなずく。

「アイアンシールド、ローテイター、アヴェンジャー。これらの力で屈強な怪物さえも一方的に駆逐する。これがガリウス卿の力ですよ」

レンダは淡々と語る。対してシーグは腕を組んで考え込んだ。

「舞台芝居みたいな戦いだったな。見せびらかしているように感じたぞ」

「公開処刑というのは演出がつきものですよ。ちなみに明日も同じですね」

レンダは珍しく表情を険しくした。すぐにいつもの皮肉めいた表情と声となる。

「メティスに歯向かえばどうなるか。グラムファーレの強さを各国に示したわけです。圧倒的な力の差があり、負ける要素が全くありません。強大な怪物との戦いも、グラムファーレにとっては単なる外交上のデモンストレーションに過ぎないわけですね」

ロイヤルボックスには沈黙と同時に、深刻な空気が流れている。ガリウスが7度の戦で完勝した理由を、各国の代表たちが思い知っ

たからだ。
「とは言っても、あの力はアクリアエスリス限定なんだろ。戦場では違う戦い方をしなくちゃいけないし、赤マントや黒ローブも一緒に戦ったはずだ。一人だけの力で戦場の何が分かるって言うんだ？」
「外交官は外交の専門家です。戦いの事しか言わない誰かさんとは違うので、力を見せ付けるだけで十分なんです」
「なるほどね」
シーグの相槌にレンダは大仰にため息をついてみせた。
「……何を人事みたいに。あなたが明日戦うのはガリウス卿で、場所はアクリアエスリスなんですよ」
「明日の決闘でも、同じ装備で戦うつもりかな？」
「シージペリラス相手に手加減する必要がどこにあります。圧倒的な力であなたを潰しにかかるでしょう。レイザークの災厄、世界の綻び、破滅の発端。呪いが飛び火することさえも恐れて、謀殺さえも実行されなかった忌み子。言葉の端に上げることを詩人でさえためらう世界の暗部にグラムファーレが止めを刺す。これは世界に威光を示すチャンスなわけです。つまり、あなたは調理台に自ら上がる子羊のように――」
レンダは途中で言葉を止めた。ミラがきり付けるような勢いでにらみ付けたからだ。
「確かにその通りなんだけどなぁ……」
人事のように答えるシーグに、ミラは呆れている。
「別に魂まで砕かなくったって敵は戦闘不能になる。それに一撃必殺というわりに3回も攻撃していたよな？」
シーグの問いかけにミラは目をパチクリとさせている。
「グリフォンを自分のところに落として、引き付ける。その間に3つは数える時間があった。見た目はすごいんだが、戦い方としては――」
「何を下らないあげあし取りをしているの！」
ミラが突然耳元で怒鳴ったので、シーグは耳を押さえて縮こまっ

た。驚いたアイフェは椅子から落ちて床にへたり込んでしまう。
「ブツブツ文句を言ったからって、相手が手加減してくれるわけないでしょ。あんな無茶苦茶な相手とどう戦うつもりよ！」
「いや、だから今考えていて――」
「考えてどうなるのよ！」
「だけど考えなくちゃ何もできないぞ。大体、そんなに大きな声を出さなくても聞こえて――」
「言われなくても分かってるわ。屁理屈ばかりこねないで！」
更に語気を強くし、更に近距離で怒鳴るミラ。静寂に包まれた闘技場の隅々まで彼女の怒声は響き渡った。今や闘技場に詰め掛けた群衆のすべての視線がロイヤルボックスのシーグたちに集中している。
いつの間にかレンダは7つ向こうの席に移動していて、人事のように闘技場を眺めていた。

1章－35　Iron Shield

ミラは顔を真っ赤にして椅子に座り込んだ。一方、シーグは迷いもなく立ち上がる。自ら帽子をとって赤毛を群衆に晒したのだ。

いつの間にかレンダは7つ向こうの席に移動していて、人事のように闘技場を眺めていた。

「おお、シージペリラスだ」「呪われた少年だぞ！」

グリフォンを目にした時よりも大きな驚愕がアクリアエ・スリスに走る。ロイヤルボックスにいるものは怪物を目にしたように混乱し、観客席で遠く離れているものでさえシーグから逃げ腰になった。

災厄をはらうために指輪の宝石や護符に触れるもの、指をすばやく動かして魔よけの印を結ぶものもいる。

数百の視線が突き刺さる中で、シーグは毅然と立っている。恐怖と嫌悪の交じり合う感情をぶつけられても、微塵も怯む様子はなかった。

「そこにいたか、シージペリラス！」

ガリウスはアヴェンジャーの切っ先をシーグに向ける。敵の挫き、味方を激励する将軍の声が闘技場を震わせ、人々が動きを止める。

「これが明日の貴様の姿だ。世にはびこる邪悪に決着を付けてやる」

ガリウスの宣言を聞いて、「シージペリラスを殺せ」と群集は歓呼の声を上げ始めた。

恐怖も憎悪も初対面の人間に向けられるものではない。メティスの人間は心底シージペリラスを憎んでいるのだ。純粋な敵意にさらされて、ミラは足元が崩れて行くような錯覚にとらわれた。

盗賊だと知ると、誰もが奇異の目で見てくる。流れ者のスリから財布を取り戻してやるとミラ自身が取ったかのように罵りの言葉を吐く者がいた。人売りに捕らえられた子どもを送り届けてやると、ミラ自身が犯人であるかのように言うものもいる。

盗賊として町の闇の中で生き、敵意や悪意には慣れていたつもり

だったがこれは違う。
顔も知らず、名前すら知らない者に、どうしてここまで憎しみを向けることができるのだろう。
生まれる事さえ罪であり、死んで後にさえ忌み嫌われるのがシージペリラスである。レンダの言っていた事は決して大げさではない。シーグは、世の中からそのように見られているのだ。
数百もの負の感情に当てられて、ミラは身動きさえ取れなくなってしまった。助けを求めて見上げるとシーグはこゆるぎもしていない。
直立した姿勢のままで、一点だけを見つめている。視線の先がガリウスから微妙にずれている事にミラは気づいた。
フィー、とシーグの唇が動く。
視線を追うと、闘技場の最前列にサフィリアがいた。
周囲には頭2つは大きな男達が壁のように立ちふさがっている。しかし、混乱する群衆の中に埋もれることは決してなく、金色の髪はひときわ輝いて見えるのだ。飾り気のないローブを身にまとっているだけなのに、着飾った人々の誰よりも惹きつけられる。
伊達にメティスの輝石と呼ばれているわけではないのだ。
エメラルドのような瞳に涙が浮かび、薄いピンク色の唇が「シーグ」と動いた。盗賊の技能の一つとしてミラは読唇術を身に付けている。その上、タカのように目がよいのではるか遠くからでも会話の内容を知る事ができる。
「どうした、シージペリラス。恐ろしくて声も出ないか。レイザークの戦士というのはみんな腰抜けか？」
ガリウスはあざ笑う声に、ミラは我に返る。だが、シーグはまるで無反応だ。怯えるどころか全く気づいていない。
ミラが足を突っつくと、ようやくシーグはサフィリアから目を離した。
「ガリウスが叫んでいるわよ」
小声で言ったせいなのか、シーグは耳を押さえて怪訝な顔を浮か

べるだけだった。
「耳が聞こえていないの」
「何を言ってるんだ？」
シーグは音程のずれた声を出して首をかしげた。耳が聞こえない証拠に声の出方までおかしくなっている。
体中の力が抜ける思いだった。ガリウスの恫喝や群集の叫び声をまるで聞いていなかっただけなのだ。それも、サフィリアに見とれていたために。
ミラはムラムラと怒りが沸いてのを感じた。シーグが怯えたように目をそらすのが余計に腹立たしい。スカートに手を突っ込んで、自分の内股に手を伸ばした。そこには小振りのナイフと盗賊の仕事に必要な道具をしまっている。品質の悪い道具だが、いざという時にも一人前の仕事をする自信がある。
炭の枝を取り出して、紙片に走り書きをする。顔ごと目をそらしているシーグを無理やり振り向かせ、文字を見せつけた。
（ガリウスがレイザークを侮辱した）
すると、シーグの目つきが険しくなった。ガリウスが片手を挙げると群衆は波が引いたように静まってゆく。誰もが注目したのを見計らって、ガリウスは大きく息を吸い込んだ。
「下らん芝居だったぞ、ガリウス」
機先を制してシーグが怒鳴りつけた。ガリウスが事前に群集を黙らせたために、シーグの声は朗々と響く。
「何を貴様――」
「グリフォンを魔術で捕らえ、檻の中で倒して満足か。手前勝手に作り出した戦場で勝者を気取るとは、七度の戦いとやらも程度が知れたものだ」
元から耳が聞こえていないので、遠慮なしに声を張り上げている。シーグの声は山彦のように壁に反響して負けじと叫ぶガリウスの声をかき消していた。ロイヤルボックスが演説の舞台としても使えるように設計されているためだ。

メティスが建設した闘技場で、ガリウスが客として招き、ガリウスが整えた環境の中でシージペリラスが叫んでいる。皮肉としか言いようがない。

「レイザークのシーグは剣の法廷に求める！」

群衆は黙りこんでシージペリラスの言葉を聞いていた。ガリウスでさえ食い入るようにシーグを見ている。

「俺が勝ったらお前が勧める移民をやめろ。外見や病を理由にメティスから人を追い出すのをやめるんだ」

ロイヤルボックスの面々も息を飲んだ。ミラも思わず目を丸くしてシーグを見上げる。国を失った公子が一国の政策に口を出している。場合によっては、これだけで不敬の罪で処罰されてもおかしくはない。なぜならば、王国において王こそが絶対の法であり、王に逆らう事は死を意味するからだ。

剣の法廷に関する知識を思い返して、シーグの訴えが正当であることに気づいた。

シーグが訴えているのは王の法廷ではなくて、剣の法廷に対してなのだ。そして、アクリアエスリスで明日決闘が行われるのは誰もが知っている。

しかも、決闘を挑んだものは武器と場所を選ばせる不利に対して要求ができる。ガリウスの投げた手袋を逆に投げ返すような真似をしたのに、シーグは何の要求も出していない。そして、今まさに衆目の集まる場所で、シーグは今まさに決闘の目的を明かしたのだ。そして、グラムファーレはこの要求を断ることを恥と考えるだろう。決闘を取りやめにはできないのだ。

事実、ガリウスはシーグを睨み殺しそうな形相をしていた。サフィリアはミラでさえ見とれるような笑みをこぼしてシーグを見上げている。その後涙を流し、口元を押さえてうずくまってしまった。感極まって立っていられなくなったに違いない。

「明日を楽しみにしているぞ、アイロン男」

一方的に叫び、返事さえ待たない。シーグは即座に背を向けると、闘技場を去っていった。

徐々にさわめきを取り戻してゆく闘技場の中心で、ガリウスだけが舞台に取り残された俳優のように立ち尽くしている。

1章－35　Ｉｒｏｎ　Ｓｈｉｅｌｄ（後書き）

＊ｉ・ｒｏｎ［ｉｒｎ］
１［Ｕ］化学鉄（記号：Ｆｅ）．
【中略】

――［動］（他）

１〈人が〉…にアイロンをかける
Ｃｏｕｌｄ ｙｏｕ ｉｒｏｎ ｍｙ ｔｒｏｕｓｅｒｓ ｆｏｒ ｍｅ?
ズボンにアイロンをかけてくれますか．

英語だと名詞か動詞かの違いだけですね。まあ、シーグの場合ガチで間違ってるし、シールド抜けてるし、卿が男になってるけどさ。（＾―＾・）

1章ー36　アーケン

＊

水晶回廊を抜ける頃に、シーグの耳はようやく聞こえるようになってきた。

興奮したアイフェはミラの手を引っ張りながら、ガリウスの悪口をウキウキとした様子で歌っている。とは言っても「体が大きい」とか「腕が太い」とか、戦士にとってむしろほめ言葉になることばかりだ。その上アイフェの音程は牛のゲップのように外れていて、天井の高い建物の中に響き渡る。

しかし、幼い少女にここまで徹底的に嫌われるとは、ガリウスは何をしたのだろうか。

「そろそろ。聞こえるようになったのでは？」

レンダのよく通る声は、耳鳴りが残っていても聞こえてくる。聞きたい声ではないのでシーグは無視を決め込んだ。

「ガリウスが腰に差していた小振りの剣の事、知りたくないですか？」

シーグは思わず足を止めた。ガリウスが身につけている武器だ。外見からは想像がつかない能力を持っているに違いない。

「剣の名前はアーケンといいます。形状はパリィーイングダガーで目的は武器破壊。ただの鉄剣ならば受け止めただけで切断します」

「『ソードブレイカー』の化け物ってわけか……」

ソードブレイカーとは文字通りに武器破壊を目的としている。刀身の反対側にクシ状の溝があって、そこに敵のソードを巻き込み、絡めて折る。二挙動の動作があって初めて武器破壊が可能となる。名前の通りに細い刀身を持った武器、ソードしか折る事はできないのだ。弱点は刀身に溝をつけたための構造上の脆さであり、脆さをカバーするために刀身を太くする必要がある。ブロードソードに近

い形状が多く、たいていは重心が落ち着かず使いづらい。
「付け加えるなら大型のハンマーで打っても折れないし、落下してきたギロチンの刃を逆に真っ二つに裂くこともできます。攻撃に使っても鉄の鎧程度なら一刀両断」
自慢げにシーグの敵の武装を説明するレンダ。剣とは重量と勢いで叩き切る為の武器だ。それなのにアーケンは受け止めて切断するという。魔術に常識を要求する事がどうにかしているが、理不尽であると思わざるを得ない。
「それでも、アヴェンジャーと比べればアーケンは果物ナイフに思えるような性能に過ぎません。ちなみにローテイターは攻城用の投石器並みの威力と思っていただいて結構です」
グリフォンを真正面から力でねじ伏せる武器である。レンダの表現は決して過剰ではないのだ。
「結界陣の一族って言うわりに、全身凶器じゃないか」
「グラムファーレの真髄は単なる守りではなく、『封じること』ですからね。攻撃を封じ、防御を封じ、逃亡さえも封じる。圧倒的な力で反抗する者のあらゆる行動を許さない」
「まるでメティスそのものだな」
「言いにくいことをズバリといいますね。あなたは」
レンダはクックックと押し殺した笑い声を上げる。
「言いにくいついでに、さっきの『アイロン男』呼ばわりは痛烈でしたね」
「……何か問題でもあったか？」
不思議そうに問いかけるシーグに、ミラとレンダはキョトンとした。アイフェは興味深そうに年長者達の顔を見比べている。
「ガリウス卿の二つ名はなんですか？」
レンダが笑いを堪えながら問う。シーグがアゴに手をやって首を傾けると、アイフェも真似して全身を傾ける。リボンでまとめられた銀色の髪が床に触れる。
「アイロン……だろ？」

「違うよ。『アイアンシールド卿』だよ」
自信のない声にアイフェが生真面目に即答する。レンダはついに限界が来たらしく腹を抱えて笑い出した。
「なるほど。あれは啖呵を切ったんじゃなくて、本気で間違えたんですか」
「……まあ、なんだ。怒った相手は隙が大きくなるだろ。そこに活路を見出すのさ」
いつまでも笑っているレンダのスネを、アイフェがへっぴり腰で何度も蹴り飛ばしている。ただし、まるで効いていない。
「あそこまで侮辱されたら、グラムファーレは一族総出で怒り心頭でしょうね。大胆な事をしたものです」
レンダの言葉にシーグはキョトンとした。
「なんでだ。決闘の前には侮辱の応酬をするものだろ？」
今度はミラとレンダが怪訝な表情を浮かべる番だった。
「レイザークでは決闘の前に怒鳴りあいをするんだ。お前の母親がどうとか、部下がどうとか……メティスでは違うのか？」
「メティスでは握手や手紙のやり取りですね。こっちは紳士気取りの格好つけの集まりですから、いがみ合っていてさえ体裁をつくろいます」
レンダは納得しているし、ミラは額を押さえてあきれている。アイフェは目をキラキラさせて見上げてきた。
「お前のかぁーちゃんデーベーソ、とか言うの？」
「そんな感じかな。で、言い返すんだ。俺の母親に貴様ごときが勝てるものか。お前のケ――」
「シーグ！」
「ケ……何。なんて言うの？　ねえ、教えてよ」
しつこく聞いてくる少女にミラもシーグも逃げ腰になった。
「ケンカを始めるけど、準備はいいか。ですよね、シーグ？」
「あ、ああ。大体そんな感じだ」
レンダの提案にシーグは条件反射で何度もうなずいた。

「ふぅーん？」
疑わしい視線を向けられて、シーグは思わず目線を宙に泳がせてしまう。次にアイフェは探る視線をミラに向けた。
「そうなのよ」
ミラに怖い目つきで断言されてしまって、アイフェはしぶしぶながら納得した。
「さて、逃げ出すという選択肢はまだ残っていますか？」
レンダが友好的な笑みを浮かべて問いかける。ゆえに敵意よりもタチが悪いとシーグは判断した。
「メティスから脱出するなら私が手を貸すわ」
「私の屋敷に侵入できたくらいです。お嬢さんなら魔術師の裏をかける。二人一緒なら逃げられるでしょう。私も協力しますがね」
「逃げるつもりはない」
シーグが断言するとミラはしょんぼりとした。
「……どうしてそんな無茶をするの」
「生まれや髪の色を理由に、人を悪く言う奴には絶対に負けない」
「それって、サフィリア・フェルナンディの受け売り？」
図星を突かれてシーグは思わず後ずさった。魔術師でもないのにミラは何でもお見通しである。
「め、メティスから逃げたところで、敵は追いかけて来るんだ。いつか戦わなくちゃいけない」
「わざわざ、自分から名乗らなければこんな騒ぎにならなかったわ」
「まさにその通り！」
レンダも深くうなずいている。
「それに、決闘は挑んだ側が不利なのよ。手袋を投げ返すなんてしなければ良かった。そうすれば、アクリアエスリスでヴァンガードなんて、ガリウスの有利にならなかった。挑まれた決闘を素直に受けていれば、あなたが勝負の方法を選べたのに！」
ミラの声は大きく感情的になってゆく。
「あなたが勝ってもサフィリアが――」

「はい、そこまで」
レンダはミラの細い肩をつかみ、口を人差し指でふさぐ。そして、ダンスにエスコートするようにシーグから離した。

1章－37　鉄壁の盲点

「さぁて、ガリウスと戦うというなら私はあなたが勝つ方に投資します。サフィリアの望みと合致している事だし、勝ってほしいのが本音です。とりあえず必要なものは何でも言ってください」
「魔術の品物でもか？」
「何でも、といったでしょ。商人に二言はありません」
「ずいぶん気前がいいじゃないか」
「何でも言ってくださいと伝えましたが、何でも用意するとは言ってませんからね」
「……なるほど、言葉だけなら気前よくできるわけだ」
レンダが商人の愛想笑いを浮かべている時は絶対に信用しない方がよさそうだ。
「あなたが勝てば賭けは私の総取りです。真面目な話、かなりの額の物も投資しますよ」
まるでサフィリアの望みがオマケのような言い方に、シーグはカチンときた。
「……アヴェンジャーを正面から受け止められる剣はあるか？」
「ありません」
「盾は？」
「1度だけ受け止める盾なら用意できます」
「1度じゃ意味がない」
「10個持ち込めば、10回止められる勘定になりますけど？」
レンダはやる気がなさそうにいい加減に答える。
「俺の動きが遅くなって、1回目で真っ二つだ」
「確かに」
「真面目に答えなさいよ！」
感慨深くうなずくレンダに、ミラは噛み付かんばかりの勢いだ。
息を整えたアイフェはレンダの革靴を踏みつけ始めている。

「私は真剣です」
少女2人の敵意を真正面から受けて、レンダは飄々としている。
「ふざけているようにしか聞こえないわ！」
ミラは眉をしかめて、更にレンダに詰め寄る。
「真剣に好きになってしまいそうですよ、お嬢さん。今宵はお付き合いいただけますか？」
「……へ？」
「私は気が強くて、一生懸命な女性が好みなんです」
肩に手をかけて更に身を寄せるレンダ。我に帰ったミラはネコのような俊敏さでレンダを押しのけて逃げる。
「い、いきなり何を言い出すのよ。このバカ！」
「これはしたり。ムードを高めてから言うべきでしたか？」
「そんな事は言ってない！」
「正しいレディーは、不用意に男を近づけてはいけませんよ。相手をその気にさせてしまいます」
壇上の講演者のようにレンダは語る。
「もちろん、人の足を踏みつけるのもダメですよ」
足元に向かって注意するが、アイフェは全く聞いていない。体重を乗せてカカトで踏む方が有効だと発見し実践中であった。
荘厳なアクリアエスリスの中で、町の広場と同じような風景が繰り広げられている。グラムファーレの連中が見たら目をむいて慌てる事だろう。彼らは守るべきものが多すぎる。
国としての権威や建前、個人としての誇りや体面。魔術師としての理想。
それらが多くの人々には滑稽に見えているのを知っていて、後ろ指を差される事を極端に恐れている。人々の怒りを誘う事を承知していながら、見てみぬふりを貫いている。
偉そうに構えて、強さを見せ付け、恐怖を振りまいて、隙を見せるまいと過敏になっているのは滑稽だ。その窮屈さはシージペリラスとして恐れられる事と大差がないと、シーグには感じられるので

あった。
「守る……か」
シーグはポツリとつぶやいた。ガリウス個人の強さばかりを考えていたが、それは間違いではないのか。
守るべき物が多すぎれば、戦いに専念できない。
宝物庫を守るため玉座を隙だらけにする王、広大な領土を守るために兵力を分散させる将軍、見当外れの命令に振り回されて混乱する兵士。
ガリウスは彼らと同じ立場と言えないか？
「剣と投げナイフと革鎧だ」
頭に閃いた思考のままにシーグは口を開く。
「品質はどうしましょうか。美しい装飾から多機能な魔術の品。銀から鋼鉄まで何でも取り揃えますよ」
「俺がメティスに着いた時の装備と同じがいい」
力強く断言するシーグ。
「……何の変哲もない鉄の剣とナイフ、革の鎧ですよね。はっきり言って粗悪品でしたが」
「だからこそだ。ヴァンガードに魔術の装備を持ち込むつもりはない」
「ほほう？」
レンダはふざけた声を出し、ミラは自分が決闘に挑むような悲壮な表情になっている。
「ヴァンガードなのよ。ガリウスは決して手加減をしないわ」
「ヴァンガードだからさ。場所がアクリアエスリスで、敵が完全武装のガリウス。この状況がそろったからこそ、勝ち目があるんだ」
シーグの頭には戦いの光景が次々と閃いては消えていった。
「問題はガリウスに最初の一撃を食らわせる事だが……あと一つ足りない」
声にならない独り言をつぶやいて、シーグの唇がすばやく動く。
さすがのミラにも動きを追えず何を言っているのか分からなくなっ

た。
突然顔を上げたシーグはミラをまっすぐと見つめた。迷いのないまなざしを向けられ、ミラの胸は高鳴る。
「ミラ、協力してくれ。手伝ってほしい事があるんだ」
「……わかった。何でも協力するわ」
真剣な訴えにミラは思わずうなずいた。
「レディーが何でもするなんて軽がるしく言うものじゃありませんよー」
ミラは返事の代わりに、軽蔑の視線をレンダに送る。ムッツリしたままアイフェを抱き上げてシーグの元に戻った。
「変なおじさんの言う事を気にしちゃダメよ」
「私が誘った時は断ったのに。冷たいものですね」
女性同士の共感であろうか、幼いアイフェにもミラの気持ちが分かったらしくレンダのつぶやきを完全に無視した。
「さあ、シーグ。こんな服を着ている暇はないわ！」
ミラはやけくそ気味にレンダの言葉をさえぎった。シーグの腕を両手でつかんで大またに歩き出す。
「いや、そんなに慌てなくてもいいぞ」
「急ぐの！」
アイフェが反対の手をつかんでシーグを引っ張る。どうせ馬車の中でレンダと一緒なのに、と思ったが黙っておいた。

1章―38　封印

＊

薄暗い部屋を青白い魔術の光が照らしていた。
一抱えもある水晶球、磨かれたエレクトラム（金銀琥珀）の鏡、宝石細工の護符。部屋中の装飾品それ自体が星のように輝いている。天井にも星座の形に光が点在しており、部屋の中はなんとか文字を読むことのできる明るさとなっていた。
骨や皮を用いた装飾品は一切ない。メティスにおいて、自然物は下級の魔術師しか使わないからだ。
グラムファーレは木よりも石、石よりも貴金属、貴金属よりも宝石を重んじる。平凡な自然は魔術を弱めると考え、自然を一切除外した作られた空間を理想としている。
だから、光と闇でさえ管理されて必要なだけしか与えられない。空気でさえも進入を許される時間が限られている。封印された窓と揺るがぬ石壁に囲まれた、宝物庫のように厳重な部屋。サフィリアは16年の時間の大半をここで過ごしてきた。
「……なんだと」
ガリウスの重々しい声が石室に響く。
「私はシーグを支持するといいました。今から、シーグの元へ行きます。彼を連れてメティスから脱出します」
サフィリアは正確な発音で答えた。魔術師は呪文を唱える口の動きから魔術を予測する訓練を受けている。耳をふさいだとしてもサフィリアが何を言ったのか間違えるはずがない。聞き返したのは耳を疑うような言葉だったからだ。
「正気か？」
しつこいほどの確認がガリウスの動揺を表している。
「正気を疑う者に問うても意味はありません。客観的な判断を求め

るならば、さしあたって第三者の診断を求めると良いでしょう」
論理的でよそよそしい態度が、頑なな意思を示している。
サフィリアが本心から怒っているときにこのような態度を取る。
「シージペリラスと心中するつもりか？」
「……」
サフィリアは何も答えなかった。この場合沈黙とは肯定であり、頑なな態度は拒絶である。2人は時が止まったかのように身動き一つしない。星とは違って瞬かぬ光が、炎とは違って揺れ動かない光がただ部屋の中を照らしている。
先に目をそらしたのはガリウスだった。逃げるように背を向けると、エレクトラムの鏡に写るサフィリアの双眸とぶつかった。詩人がエメラルドに例える瞳が澄み切った水面のように揺るがない。ガリウスはこの瞳を知っている。
6年前、レイザークのシージペリラスを救うと決めた時に見た。同じ場所で同じように背を向けた時に、眼差しに秘められた意思に負けたのだ。
事の始まりはシージペリラス。そして、今も時を越えてサフィリアを異端者への道へ落としいれようとしている。
「私は闘技場でシーグの名を叫びました。周りにいた幾人もの魔術師が聞いていた。その事が問題になっている」
サフィリアは本でも読むように淡々と言葉をつづる。
「メティスへけじめを付ける最も有効な方法は一つ。決闘の後、私がシージペリラスの首をはねる事ですね？」
「……そのとおりだ。シャープネスを使うといいだろう。シージペリラスを殺した剣なら、異端者の剣という汚名から逃れる事ができる。つまり、そなたの罪も洗い流されるという事だ」
権威への挑戦と度重なる侮辱。汚名を晴らすためには衆目の前でシージペリラスを惨殺する事。それ以外にサフィリアの名誉を守る方法はない。
だが、サフィリアがシーグの首をはねるはずはない。同じ瞳のき

らめきを持ち、弱きものを助ける理想を掲げ、時と場所を越えても互いに思いあう者同士なのだ。

「馬鹿な事を。今更逃げたところで、メティスはシージペリラスを追いかける」

「私が逃がして見せます」

「シージペリラスの身代わりになるつもりか？」

「……」

メティスで産まれながらに祝福を受けた女性。魔術師として輝かしい未来を約束されたのがサフィリアだった。しかし、シージペリラスへの関わりからすべてが狂いだしてしまったのだ。

もしも、6年前のあの日。何が何でもシージペリラスの事を遠ざけておけば、あるいは自分自身がレイザークに乗り込んで首を切り落としておく事ができれば、鏡越しにサフィリアの瞳を覗き込む事がなく安易な判断をしなければ。ここまでサフィリアを追い詰めずに済んだのだ。

ガリウスはサフィリアのお気に入りの鏡を叩き壊したい気持ちになった。

「私はシーグの元へ行きます」

涙声になりながらも、断固たる意思をこめてサフィリアは繰り返す。

「あなたはメティスが忌むべき鉄の名を掲げ、傷だらけになって戦って勝利した。それなのに私はあなたを裏切ったわ。今私を助けても、いつかあなたのしてくれたすべてを見捨てて裏切る。あなたをまた苦しめる事になる。ガリウス、私が生き残るためだけにどれだけ裏切って、どれだけの犠牲を捧げたらいいの？」

鏡の中のサフィリアは涙を溢れさせ、首を横に振った。

「ガリウスお願い、もうやめて。私がいなくなれば、決闘も移民も不必要になるわ……」

サフィリアの声はかすれてゆき、床の上に涙の染みを作るだけだ。

ガリウスは答えぬ。答えられぬ。守っている者から拒否されて何を

答える事ができるというのか。
「……何を犠牲にしても、そなたの安全のために戦う。それにグラムファーレを侮辱するものを生かしてはおけん」
ガリウスは用意していた答えを言った。
「ならば、私はあなたの敵となるしかありません」
強い意志をこめた言葉にガリウスは説得をあきらめた。
「明日、シージペリラスを殺す。お前が目を覚ました時には、すべて終わっているだろう」
「いいえ。シーグは勝つわ」
真意を掴みかねて、ガリウスは振り返ってサフィリアを見つめる。
強がりの虚言か、苦し紛れの虚言か、単なる願望か。
しかし、サフィリアの眼差しはそのどれとも違う。本気でシージペリラスの勝利を信じているのだ。
「……ならば、そのように信じているが良い。今よりグラムファーレの秘術、＞ｒｕｂｙ＜＞ｒｂ＜空白の精神＞／ｒｂ＜＞ｒｐ＜（＞／ｒｐ＜＞ｒｔ＜マインド・ブランク＞／ｒｔ＜＞ｒｐ＜）＞／ｒｐ＜＞／ｒｕｂｙ＜を執り行う」
サフィリアは返事をせずに、逃げもしない。覚悟を決めて座っているだけだ。ガリウスはサフィリアに背を向けて部屋を出て行った。
明日サフィリアが目覚めた時、血の海に沈み首を失ったシーグと血刀を携えた自分を見出す事だろう。

1章ー39　良かれ悪しかれ

＊

太陽が西の地平線に差し掛かった。夕日がメティスの風景を赤く染め、日没の7点鐘が鳴り響く。

「グラムファーレは禁術である空白の精神（マインド・ブランク）　を執り行いました。対象はサフィリア・フェルナンディ」

いつになくこわばった声で報告するセレストに対し、レンダはいつもと変わらず手帳を聞いていた。文字を追う目線にも表情にも全く変化がない。

セレストは怪訝に思って、主人の様子を確認した。自分の声が小さすぎて、鐘の音でかき消されてしまったのかと思ったのだ。

「聞こえているよ、セレスト」

2つ目の鐘がなり始めたころ、レンダは顔も上げずに答えた。ゆえにセレストは主人の意向を疑った自分を恥じて、直立した石像と化した。レンダはそれを見て、苦笑をかみ殺して顔を上げた。

魔術師が王侯貴族のような生活をしている事に、今さながらにおかしさを感じたのだ。古来より魔術師は山や森に住み、魔術の探求に障害を費やした。権力や富とは無縁だったはずだ。

こんな事を考えるのは、シーグと接しすぎたからかもしれない。公子に生まれながらも市井の人のようだし、苛酷な環境で生きながらも歪みを感じない。ガリウスには怯みもしないのに、アイフェやミラには翻弄されている。人の感情には素直に反応し、理不尽な押し付けには断固として立ち向かう。

一方、自分達は飾り立てて支配者を気取り、周囲に礼節を強要して権威を維持している。ガリウスはサフィリアの心の自由まで奪おうとしているのだ。

マインド・ブランクは思考と感情を封じ込める禁術である。対象

者は術者の言葉通りに従うだけの人形と化す。
　人に対して非情な事を平気でできるなら、果たしてどちらがより人間らしいといえるのか。人間らしさが有害であるというのなら、確かに彼こそがシージペリラスに違いない。
「サフィリアはただ守られているだけの姫君ではない。彼女が守りたいものは自分の安全や名誉ではなかった。ガリウスは彼女自身が守りたいものを切り捨てて、彼女を守ろうとしている。心の平穏ではなく体と地位を守ることしか目に入らなくなった」
　忠実な執事の疑問に答えるべく、レンダは独白した。
　レンダは一度言葉を切って窓に向かった。４度目の鐘の余韻が街中に響いていた。昼と夜が入れ替わる瞬間、封印の魔術は発動するのだ。
「守るというのは外界から隔てることであり、究極的には封じることだ。予想の範囲内だよ」
　表情こそ動かないがセレストが憮然としているのは分かる。守るべき対象を封じ込めてしまう事がどうしても納得できないのだ。感情などなく、厳粛に見える執事だが実は激情家である。そうでなければ、４０歳も年下の妻と夫婦生活を営めるはずがない。最終手段をとることを簡単に洞察できるあたり、レンダ自身もガリウスに近い人間である。
「人を追い詰める事に関しては天下一品だな、シーグは。何処まで自覚があるのか知らないが」
「ですが、自殺行為としか思えません無茶が過ぎます。アイアンシールド卿に鉄の剣だけで挑もうとは」
　セレストの言葉に不機嫌な響きをレンダは読み取った。どうやら忠実な執事にとっても、シーグは心配の種であるらしい。
「鉄は魔術を弱めるものだよ。少なくともメティスはそういっている。シーグには何か策があるのだろう。今は何をしてるんだ？」
「ミラ様の教えにより、ナイフをすばやく投げる練習をしております」

「投げナイフ……ね」
そんなものがアイアンシールド卿を相手に何の役に立つのだろうか。
しかし、マイリグの時も、イッサの時も、サフィリアの時も、絶体絶命の立場から奇策を用いて危機を乗り越えてきた。素手も同然の状態でガリウスと相対した時でさえアイアンシールドの守りを突破し、グラムファーレの威光を深く傷つけた。何か考えがあっての事だろうが今回の戦場はアクリアエスリスである。多少の奇策は力技でひっくり返されるし、命がなくなるまで続く完全決着の決闘なのだ。その上、審判が事実上の敵である。
シーグは生贄の台に自ら望んで登った。グラムファーレは生きて返すつもりは無い。
「勝てるとは思えません」
レンダと同じ結論をセレストはつぶやいた。
「シージペリラスが勝とうが負けようが、生き残ろうと死のうと我々の方針に変わりないさ」
酷薄な言葉にセレストは表情を改めた。
「やるべき事はマインドブランクの解除と逃走経路の確保だ。今度ばかりはサフィリアもガリウスに愛想が尽きるだろう。グラムファーレの立場も揺らいでいる。公子とはいえ王族殺しには違いない。対外的に罪は重く、外交上の取引がやりやすくなる。メティスの輝石を支持するものは多いしね」
セレストの顔色が目に見えて変わった。
レンダの目的はガリウスとの婚姻を妨げ、サフィリアをメティスから連れ出すことだ。シーグの乱入は良いきっかけとなった。
もしも、決闘ではなく逃げる事を選ぶのならば同行させようかとも考えた。しかし、決闘に挑むというのなら止める必要はない。せいぜい、衆目を集めて陽動に専念してもらおう。投資に見合う働きさえしてくれれば、末路がどうなろうと構わないのだ。
目を閉じるとふくれっ面の少女の面影が頭をよぎった。黒玉（ジェット）のよ

うに漆黒の髪と瞳が印象的だったリーザ。瞳が好奇心に輝くと、まるで夜闇に輝く星のように見えた。ひどい上がり症で音痴のくせに、恥ずかしい言葉を話す時はひどく饒舌になった。

「人を助けられるのは人だけしかいないわ。権力や物で個人の心を守れないの。お互いに好きだっていう正直な気持ちだけがお互いを救うのよ」

しかし、世の中には好意と同じだけの怨恨もある。個人がどれだけ正義を主張しても、同じだけの正義と、それ以上の恨みで叩き潰されるだけなのだ。正しさを主張しつづけるなら、権力や富や暴力で守らねばならない。時には残酷な犠牲でさえ支払う事をためらってはいけない。輝かしい正義と同じだけの悪徳がなければ何もなしえない。

だから理想を持つ人間はわが身を削り、心につぎはぎを当てながら生きてゆくより他にないのだ。

「良かれ悪しかれ、明日のヴァンガードで決着がつく」

レンダの独白とともに7度目の鐘が鳴り終わる。アクリアエスリスでは、サフィリアの意識が封印されたはずだ。

もしも、リーザがこの事を知ったら怒るだろうか。それとも声も出さずに涙を流すだけだろうか。

地平線の向こうに太陽は消えて、黒い墨が流れ出すように闇が下りてきた。

1章－40　夜逃げ日和

朝もやが布のように漂っていた。

太陽はまだ昇っておらず、早朝の一点鐘が鳴るのもまだ先である。レンダの屋敷は大通りに面しているが、人影は全くない。町が眠りについてもなお、メティスの大通りには光が絶えない。

魔術都市ならではというべきか、屋敷の門や大通りの要所には青白い魔術の明かりがともされているのだ。

もっとも、シーグにはわずかに揺れる明かりが、不気味に見えて仕方がない。魔境で無念にも死んだものはウィスプとなり、生きるものを沼地に誘い込むからだ。ゆらゆらと揺れる光で、正気を奪って操るのである。

3年前にシーグは沼地に誘い込まれた事があった。

気づいた時は底なし沼の中で、いくらもがいても沈む一方だったし、足を引っ張られるようにも感じた。ロディウスが助けてくれなければ、シーグもウィスプの仲間入りをしていただろう。

助かりはしたが、歩けるまで一月が必要だった。足を引っ張られたのは気のせいではなかったのだ。沼の底には恐ろしい毒をもつグールが沈んでいて、本当にシーグの足を引っ張っていたのである。

嫌な思い出に、シーグは思わず身震いした。

「寒いの？」

ミラが心配そうに問いかけてきて、シーグは我に返った。魔術の光を見ている間に、ぼんやりしていたようだ。明滅する光は人の注意力を奪うようである。

「大丈夫だ。それより、レンダはまだかな？」
「アイフェを起こしに行ったわ。急ぐって自分で言っておいて、何をやってるんだか」
ミラは周囲に警戒の視線を向けている。薄手の皮鎧を着て、マントを羽織っている。短めのスカートから伸びる長い足は、俊敏に動けるように膝がわずかに曲げられている。
「それって、昨日のマントだよな？」
「ええ、そうよ」
ミラはぶっきらぼうに答えた。
「安物だったし、端がひどくほつれていただろ？」
「し、修理すれば使えるわよ」
「レンダが言うには、重いわりに傷みやすい皮なんだそうだ。もっといい素材がいくらでもあるって――」
「別にいいでしょ！」
ミラはイライラした様子でシーグの言葉をさえぎった。よく見ればマントの端が綺麗に縫われている。
ミラは几帳面な性格で節約家なのだな、とシーグは思った。
「それにしても、まるで夜逃げよね。戦士だったら、コソコソするのは嫌なんじゃない？」
「いや、夜明けの強襲は有効だからな。暗がりで戦う訓練もしたっけ」
「ひょっとして、目隠しして剣の打ち合いとかもした？」
「やったよ。町の盗賊を見習って動けって、戦士団の先輩が言って

た」

「……レイザークの戦士って、メティスで言うところの騎士でしょ？　盗賊の事なんて馬鹿にしていると思ったわ」

「森では狩人、町では盗賊、海では海賊のようになれるのが、一人前の戦士だってさ」

「戦場ではどうなの？」

「騎士と魔術師以外なら、何でもいいって」

「なによ、それ」

「『剣を使えたって人殺しがうまくなるだけで、そんな事は騎士や兵士に任せておけ。レイザークの戦士っていうのは、どこに行っても戦えるやつだ。戦士っていうのは自分が生き残って、更に仲間を助けられたら一人前だ。』そう言ってたな」

「へぇー。私が考えていたのと全然違うのね」

「俺の戦士長が変わり者だったんだろうな。シージペリラスって事を承知で、隊に入れてくれたんだから」

笑っていたミラが複雑な表情を浮かべた。余計な事を言ってしまったらしい。

「ええと、レンダは本当に遅いな」

「……」

ミラは返事をせずに厳しい視線で大通りの向こう側を見つめている。理由はシーグにもすぐに分かった。何ものかがこちらに向かっているのだ。

「あのバカ、何しているのよ。襲撃されるかもしれないから、日の出前に移動しようって言い出したのはあいつなのに」

ミラは舌打ちをした。猫のようにすばやく壁際に移動するミラに

シーグも続く。

「相手は2人……ね。大仰な杖にローブ。魔術師に違いないわ」

堂々と道の真ん中を歩き、霧に浮かぶシルエットからすぐに正体が知れた。魔術の明かりもそれを助ける。

「たしかに、戦場で騎士や魔術師のように行動したくないわね」

ミラが懐から小型のナイフを取り出した。

指で挟めるほどに薄い『刀子』と呼ばれる柄もない小型のナイフだ。シーグもミラと同じように刀子を抜く。訓練の後に、ミラから譲り受けたものだ。

指に挟んだ数だけ同時に投げられるし、手首の返しだけで投げられる。

『抜き打ちの速さと手数の多さ』というシーグの希望に、ミラは完璧な答えを出してくれたのだ。

「私は右、シーグは左ね」

魔術師たちは無謀に近づいてくる。15歩の距離になったとき、シーグとミラは同時に刀子を投げつけた。

数はシーグが4でミラが6。シーグが集中して胴を狙っているのに対して、ミラは四肢と首元と顔に分散して投げていた。武装が薄くなる間接や顔を容赦なく狙っていたのだ。

どれか一つだけが命中しても相手の戦闘力をそぐ事ができるだろう。

1章－40　夜逃げ日和（後書き）

半年ぶりに更新です。

ユニークアクセスが続いている様子を見て、書きたい気持ちが戻ってきました。

まだ、続きを待ってくれていた人、遅くなってごめんなさい。

これからも低速だと思うけど少しでも書いていくようにします。

1章－41　戦士の天敵

しかし、刀子は乾いた音を立ててはじき返されてしまった。ミラは悔しそうに顔をゆがめる。

「魔術の防御壁ね……」

アイアンシールド卿ほどに強固ではないだろう。術者の魔力によって差はあるものの、騎馬隊の突撃さえも止めるという。

もっとも、徒歩で小型の武器しか持たない人間には同じ事。正面から打ち破る事はできないのだ。

ミラは唇をかみ締めた。

「2人を取り巻くように盾状に展開しているな」

「え？」

「最初に俺の投げた刀子がはじき返されて、腕を狙った刀子は外側にそれた。顔を狙った刀子は上へ飛んでから奥に落ちた。つまり、天井がないってことだ」

と、片方の魔術師の杖にパチリと火花が散った。シーグはミラに覆いかぶさるようにして、壁のくぼみに押し込む。バチッという音と共に、視界が黄色く塗りつぶされた。

「な、何。今の？」

「魔術の雷撃だ」

傷みにゆがむシーグの声。皮鎧の留め金部分がこげている。かすかに煙が上がっていたのでミラは小さく悲鳴を上げた。

片方の魔術師が片方は杖を下ろし、片方が杖を構えている。突き

出された杖の先端から雷撃が走ったのである。
光ったと思ったら直撃した後だった。火球などよりずっと速く、つまり回避が困難なのだ。

「シーグ……」
「大丈夫だ。ほとんど門が受けてくれたよ」

雨に打たれた子猫のような目で見つめられれば、強がるより他にない。
朝露でぬれた門が加熱して、蒸気を発している。人間が直撃を受ければ、無事では済まないだろう。

「普通の雷と一緒で、金属に向かって飛ぶんだな」

無事に立っていられるのは、巨大な金属が近くにあったから。運が良かったに過ぎない。
剣の柄に手を置いたシーグは顔をしかめた。電撃を受けた剣もまた、電熱を帯びて加熱している。

「じゃあ、武装している事が不利って事？」
「二人そろって皮鎧なのが幸いだ。もしも、金属鎧を着ていたら終わりだった」

雷撃は金属へと誘導され、身を守るはずの武具を体に密着した焼きごてと変えてしまうのだ。
まさに武装した戦士の天敵ともいえる攻撃である。

高熱の雷がとおった場所の朝もやが晴れていて、魔術師達の姿が見えるようになっていた。中肉中背の無個性な外見で双子のように似通っている。

「わが名はリロイ」
「わが名はトール」

名乗りはしたが薄い黄色のマントとローブと、服装まで同じなので全く見分けがつかない。

「聞いたとおりに卑怯な不意打ちが得意のようだ」
「しかし、我らには通用せんぞ。シージペリラス」

双子は息ピッタリで言葉を続けた。声色も抑揚も同じで、口元に浮かべた不適な笑みまで鏡に写したようだ。

「どうするの？」
「戦う」
「逃げればいいじゃない」

再び閃光が飛んでくる。シーグとミラは後方に下がって雷撃を避けた。雷撃は門に吸い込まれるように曲がり、シーグとミラには届かなかった。体中がチリチリとしたが、冬の静電気よりもたいしたことはない。

「確かに、地形をうまく利用すれば逃げられるかな……」

シーグは周囲を確認した。建造物や街灯、雨水を流す水路のフタなど至るところに金属が使われている。壁も白大理石だ。こちらは雷撃を通さず、破壊が困難である。

ありふれた自然物を使わないメティスの町並みが自分達を守る盾ともなるだろう。

『だから、お前は考えなしのアホウなのだ。このままでは、死んだアホウになるだろう。どちらにせよ、すでに腐り果てた脳みそにさほどの違いはないだろうがな』

思い出したくないロディウスの声が頭の中に響く。

『逃げたかったら、背中を見せて一目散に逃げろ。逃亡する負け犬に盾などはたんなるお荷物に過ぎん。盾はなんのためにあるのだ？』

「シーグ！」

ミラの悲鳴のような叫びを後ろに、シーグは駆け出していた。

魔術師達に向かってではない。街頭に向かって真っ直ぐにだ。顔を目掛けて飛んできた雷撃をシーグは地面に転がる事でかわした。雷撃は青い炎を放っている街頭に吸い込まれるように飛んでいった。

魔術の光が破壊されて、火花が飛び散っている。立て続けに飛んでくる雷撃を、シーグは身を伏せたままとび下がる事でかわした。雷撃は地面に吸い込まれるように落下して、シーグには届かなかった。

雨水を集める溝のフタも金属で出来ている。地面すれすれに伏せていれば、狙いを定める事が難しいのだ。

シーグはようやく冷めてきた剣を抜いて、剣先を溝のフタに引っ掛けて引き剥がした。大きめの食器程度の手ごろなサイズだったので、円盤投げの要領で投げつける。

魔術の防御が展開され、溝のフタがはじき返された。シーグは魔術師達に向かって真っ直ぐに駆け出す。懐から刀子を抜き出して２

本投げつけた。狙いは共に上すぎて的を外れている。１つ目は魔術師達の頭よりも高い場所で防護壁にぶつかり、もう一本は放物線を描いたまま遠くへと飛んで行く。

しかし、シーグが浮かべたのは会心の笑みだった。

刀子の後に続くようにして直進してくるシーグを見て、双子は全く同じ驚愕の表情を浮かべていた。これ見よがしに、腕を突き出しているほうが防御壁を展開しているほうに違いない。

1章－42　敵中突破

シーグは魔術の壁に向かって足を突き出した。双子はそろって笑みを浮かべる。蹴りごときでは破れないと確信しているからだ。

シーグは足の裏に確かな硬さを感じて、上空に向かって飛んだ。腕を伸ばし透明の壁に向かって手を伸ばす。

刀子を投げた時にすでに分かっている。魔術の壁は、シーグの背丈より腕の長さ程度に展開されているのだ。乗り越えられない高さではない。手を伸ばせば、石壁を掴んだ時と同じ確かな手ごたえ。シーグは持ち前の身軽さを生かして、体を持ち上げて防御壁に飛び乗った。

刀子を引き抜いて構えると、突然足場が消えた。体制を崩しながらもシーグは刀子を投げつける。引きつった表情を浮かべ杖で顔をかばうと、刀子は見えない壁に跳ね返された。

双子の片割れは尻もちをついている。

狙ってやったことでない。同時に2つの魔術を扱えないのだ。

雷撃を操るほうの片割れは、距離を保ちながら杖をかかげていた。杖はシーグの剣先に向けられている。先についた宝玉が黄色の光を帯び始めている。

着地したシーグは剣を腰ダメに構えて、雷撃を帯びる向かって突撃した。

手で印を結び、横なぎに振るわれる杖。魔術の完成が近いのだ。

しかし、距離はまだ１０歩もある。長剣の間合いではない。勝利を確信した魔術師の会心の笑み。

勝ち誇った顔に目掛けてシーグは剣を投げつけた。

「ヒッ！」

会心の笑みと、引きつった恐怖の表情にはわずかな差しかなかった。

金色の閃光が剣に引き寄せられ、魔術師の目前で爆発を引き起こす。

シーグはピリピリと肌を突くような電気を感じただけだが、双子の片割れはひっくり返って動かない。髪の毛が焦げた上に、逆立っている。

強力な破壊力を持つ魔術を使うというのは、つまるところ自分の目の前に危険な爆発物を発生させるという事だ。

扱うものが炎でも、風でも、雷でも変わらない。

「グエッ」

カエルの鳴き声にも似たうめきに振り返ると、ミラがすでに決着をつけていた。

魔術の杖を構える双子の片割れの背後に忍び寄っていたのだ。体重を乗せた横っ腹への肘うちは、人体の急所である肝臓を直撃している。強打すれば鍛えられたものでも意識を保つのが難しい。

ローブでは、普通の服と同じ防御力しかない。魔術師はうつろな視線を空に向け、口から泡を吐きながら倒れてしまった。

「無茶しないでよ」

ミラは唇を尖らせてシーグに近づいてきた。

「怪我はないの？」
「平気だ。それより、増援は来るのかな？」

シーグがつぶやきに、ミラは獲物を狙う猫のように目を細めた。通りの一角に視線を止めると、流れる仕草で6本の刀子を両手指に挟む。

「私ですよ、狙わないでください」

朝もやの向こうから、のんきな声がした。ミラは一瞬動きを止めたが、刀子をすべて投げつけた。

「ミラ！」

石壁に刀子が刺さる音が立て続けに6つ。

「痛いです」

かなり遅れて、間の抜けた声が一つ。
朝もやの向こうから、レンダがニコニコしながら近寄ってきた。敵が近寄ってくる時よりも緊張感を感じるのはどういうことだろう。

「全部かわしているじゃない」
「痛んだのは心ですよ」

ミラの攻撃は広範囲に飛び、しかも的をはずしていたはずだ。それをすべて受け止めるとは、ただ避けるよりも難しい。

「ねえ、シーグさん。男の子は好きな女の子に嫌がらせをするといいますが、女の子も同じなんでしょうか。もしもそうなら、望みが

あるというものでしょ？」
「刀子が飛んでくるのは、嫌がらせのレベルを超えていると思うぞ」
「人の愛憎は表裏一体。結構な事です」

レンダは返事をせずに、わざわざミラの手を両手で握りながら刀子を返した。ミラは汚物に触れたような表情を浮かべている。

「なるほど、刀子を選んだ理由が分かりましたよ。打撃力を求めてではなく、魔術の壁の位置を探る手段としてですか。位置を調べてかいくぐるには有効でしょう。でも、肝心のアイアンシールド卿は、接近戦でも油断なりませんよ？」
「接近したら戦うだけだ」
「結構な決意ですが、あなたには他の選択肢がないだけでしょ」

レンダのからかう言葉に怒りの表情を浮かべているのはミラだ。表情を変えないシーグにレンダが更に続ける。

「接近戦では、シャープネスに期待をしているわけですか。肝心のサフィリアは、全くの音信不通ですよ。逃げ出すなら、これが最後のチャンスです。幸い、今日は夜逃げ日和。朝もやと一緒に、消えるように逃げられます」

ミラが動きを止めてシーグをじっと見つめている。

「いつ闘技場に出発するんだ？」
「と、いうわけですね」

レンダが念を押すように言う。ミラはマントを深くかぶって顔を隠してしまった。

「ちなみに、屋敷を中心に何重にも包囲されていますよ。シージペリラスを闇に葬るには絶好の布陣です」
「……ガリウスは俺を公衆の面前で倒したかったんじゃないのか？」
「襲ってくるのは、グラムファーレじゃありませんよ。栄達の道筋から外れたメティスの魔術師たちです。たとえば、そこに倒れているトールは『走るハタ迷惑』と競ったが破れ、将来を閉ざされた人ですよ」

「赤マントの火球よりもよほど手ごわかったぞ」
「見た目の派手さで劣るのが致命的でした。リロイのほうは魔術の防護に関しては、グラムファーレの血筋に産まれない時点で疎まれる事になります」
「……強い奴が味方に何人いても困らないだろうに」
「そこを手前勝手な理屈で困るのがメティスなんですよ」
「わけが分からない」
「ですから、別に理解してもらわなくたっていいんです」

どうやら、メティスは魔術師に対しても居心地の良い場所ではないらしい。

「本来、敵の敵は味方になるはずです。が、あなたの場合は違うようですね。さて、あなたの行方をふさぐのは、グラムファーレへの恨みつらみで凝り固まった集団です。シージペリラスを討伐して、世界に平和を取り戻した――」

レンダはここでワザとらしく咳払いした。

「と、世間に評価してもらいたいだけの欲得づくしで動いている。シージペリラスは、立身出世の材料にも最適みたいですね。どうします？」

「逃げながら戦って、闘技場まで進む。それしか思いつかない。レンダならどうする？」
「いきなりですね。自分で考えるつもりがないんですか」
「俺よりもいい案があるんだろう」
「あるにはあるんですが、危険ですよ？」
「俺の考えより安全だ」

レンダは頭をかいて空を仰いで、つぶやいた。

「中央突破が安全ですかね？」

1章－43　アホが見る

シージペリラスの包囲網は完璧だ。
並べられた都市の地図と駒を眺めて、ラスティーは満足した。
先発隊はリロイとトール。産まれが卑しくなければ、最高位の魔術師として君臨していたであろう連中だ。
個々の力ではアイアンシールド卿や、メティオスマッシャー卿に及ぶまでも無いが、2人そろえば戦場では敵なしである。金属で武装する騎士や戦士にとっては、雷撃と壁の組み合わせは悪夢といっても良いだろう。

故に、この双子をこそ警戒しなくてはならない。なぜなら、彼らはシージペリラスを捕らえる可能性が高いからだ。
野心家ゆえに、功績を独り占めする可能性がある。
そうなれば、立場は逆転する。双子の反逆をとめる事はできないだろう。だから、双子を監視する事も必要となる。

魔術師の監視には魔術師ではないものを当てるのが良い。それが、ラスティーの信条である。
自分たちが魔術師の助力なしには功績を得られないことをよく知っているからだ。

その点は心配がない。狙撃に優れた弓兵を監視を兼ねて配備してある。最悪の場合、狙撃の対象が双子となるだけのことだ。
しかし、相手はあのシージペリラス。更には曲者のレンダ・マイルズが手を貸している。念には念を入れるべきなのだ。

あの男はいつでも手段を選ばない。ガリウスが不敗を誇っているのは、あの悪徳商人の助力が大きいことをラスティーは知っている。

あの卑怯者の極悪にして非道な手段は戦場においてこそ、容赦なく振るわれるのだ。
しかし、所詮は奇策に過ぎない。戦場全体を覆すことは出来ないだろう。

レンダの姿を確認した場合は、無理せず帰還するように命じた。
必ず要所には5人1組で動くようにし、最低でも1人は伝令として帰還するようにも厳命した。
こちらの動員数は１００名以上。シージペリラスとレンダがどれほど卑怯な手を使ったとしても、圧倒的な数の前に屈する事だろう。
詰め将棋のように、駒を犠牲にしても目的を果たせればよい。

「伝令がやってきました」

見張りの声にラスティーは盤から顔を上げて、弓兵が近寄ってくるのを確かめた。腕章が黄色ということは、双子を見張らせていた弓兵に違いない。

「双子はどうなった？」
「撃破されました。シージペリラスとレンダは南東の城門に向かっています」
「逃げるか……意外に不甲斐ないな」

ラスティーは盤上に目をやって考えをめぐらせた。

「たしか、シージペリラスは城壁を登ってメティスに進入したのだったな……」

よくよく地図を確認すると、南東の区画は開発地区となっていた。
住人を追い出した後に魔術師の工房を作る予定地なのだ。

しかも、担当者はあのレンダ・マイルズである。

「あの男の事だ。何か策があるのかも知れんな……。他に何が気づいたことがあるか？」

「はっ。屋敷から出てくる執事を狙撃しましたところ、このような書簡を持っておりました」

「執事はセレストと言ったか。魔術師としての腕も確かだったようだが……。いつもレンダ・マイルズのためにコソコソと動き回っていたな……おい、その書簡を渡せ」

「はい」

ラスティーは書簡を受け取るために手を伸ばす一方で、盤上の駒を動かした。後に書簡にナイフを入れて中に入った紙を広げる一方で、ブツブツと独り言をつぶやくのをやめない。

「さすがのレンダも、手駒を失っては身動きが取れないだろう。今度こそ私の作戦がちだな」

思考をひと段落させて、書簡に目を落としたラスティーは眉をしかめた。

『アホが見ぃるぅ』

と、子どもが書きなぐった字と、舌を出し下手くそな絵が書かれている。

「……」

「1，2，3」

ラスティーはあっけにとられて、しばらくの動きを止めていた。ようやく、伝令がうつむいたまま規則正しく数を数えていることに気づく。

「お前、何をしている」

「5，6，7……」

「やめないか！」

「10。残念、時間切れですね」

弓兵は顔を上げてにやりと不敵な笑みを浮かべた。

「レ、レンダ。貴様、ここで何を――」

逃げ腰になったラスティーの首筋にレンダは指をつきたてた。うめき声を上げ倒れていくラスティー。レンダは用心深く体を受け止め、顔から地面に倒れるように調整した。

ゴチっという鈍い音にミラは顔をしかめている。見張り役はすでに彼女が気絶させていたのだ。後に続くのは、シーグと執事のセレストである。

「さあて、敵の頭を抑えましたよ。ここからはやりたい放題です」

レンダはラスティーの椅子に座り、盤上の駒を順番に見て回っている。

1章－44　メティスの曲者たち

夜闇の中で、光が塔の様にそびえたっているのが見える。魔術の光に照らされたアクリアエ・スリスも間近だ。
レンダはあっという間に敵の本陣を落としてしまったのである。

抵抗らしい抵抗は皆無で、途中で合流したセレストともに、ただ真っ直ぐに進んだだけだった。
変化と言えば、レンダとセレストが黒を貴重とした皮鎧を着ており、弓を持っていた事だ。皮鎧の肩に巻かれた黄色の紋章を指し示すだけである。

「ラスティーはね、伝令を過剰に使いすぎるんですよ」

シーグの内心の疑問など、レンダにはお見通しである。

「盤上の駒を見下ろすように、戦場のすべてを知らずにはいられないんです。ただし、相手の事を探る時、逆に相手に探られる危険もあるって事を見落としがちです」
「だから、伝令に化けての進入が簡単だと？」
「そのとおりです。突き止めるのに少々手間取りましたがね。あなたとミラさんをおとりにして、ようやく尻尾を掴みました。勝手知ったる自分の家の前で無ければ、どこで見張っているか突き止められなかったでしょうね」

包囲されるのを承知で、しかも夜逃げ同様にアクリアエ・スリスを目指すのに、どうして前日に移動しておかなかったのか。
夜逃げ同然に日の出前に出発するのは、用意周到のレンダにして

はうかつだと思った。
その答えが、これだったのだ。敵の動きを知るには、自宅が最も良かったのである。

「まだ、分からない事があるわ。そもそも、相手の動きがここまで正確に分かったの？」
「シージペリラスの丸焼きのおかげですよ」

料理の由来を知らないミラは不思議そうな顔をしている。
レンダはラスティーを呼び出し、身振り手振りで指示を出している。それでいながら、口は止まらない。

「シージペリラスをバカにする商品に食いつくのは、シージペリラスに敵対心を持っている連中でしょ。大量に売れた地区に反感を持った連中が集まっている事が分かります。正規兵ならいざしらず、素人の集団は戦い前に酒で景気づけをするんです。結果、酒とチキン売れ行きが、段違いに伸びます。ちなみに私は食料品全般を扱ってましてね、メティスの流通は手に取るように分かります」

レンダの指示を受けたセレストは、ラスティーの服を脱がせて着替えている。変装するつもりだ。

「あなた、執事に盗賊の真似事をさせるわけ？」
「そりゃあ、商人の執事ですからね」

当然だと、言わんばかりにレンダはうなずいた。

「で、納品ついでにスパイを送り込みました。酒が入ると口が軽くなるのが人間の常でして、烏合の衆となれば口を閉ざすのは不可能。昨晩のうちに計画のほとんどは掴めていましたよ。仲間を見分ける

ために必要な腕章もこの時に手に入れました。問題となったのは、見張り役の人間の配置だけでした」

つまり門で待ちぼうけをさせられたのも、双子の襲撃もすべてレンダの手の内だったという事だ。

もしも、敵に回っていたらどうなっていたか。想像して、シーグは背筋が寒くなった。

たぶん、メティスにたどりつく前にすべてが終わっていただろう。

「ラスティーはね、戦いが始まった後の事ばかりに気を取られて、始まる前のことをおろそかにします。何でもかんでも記録に残す癖があって、書面で指示を出すので彼の動きが手に取るように分かります。敵に利用される元になるのに、本当に学ばない男ですよね」

「知り合いなのか？」

「本来はメティスの重要人物になっていた人ですよ。私さえいなければね。さて、伝令が着ましたよ。セレストの準備も出来たようですし、しばらく隠れておいてください。朝食でもいかがですか。建物の奥には昨日納品した食料や酒がわんさとあるはずですよ」

レンダに近寄る人影を見て、シーグは思わず身構えた。それほどまでに、セレストの変装は完璧だったのだ。

もしも、ラスティーがそばに立っていれば鏡がおいてあるのかと勘違いした事だろう。

「魔術で変装したのか？」

「魔術師相手に魔術で変装すれば逆効果ですよ」

丁寧に対応しておきながら、レンダは犬を追い払う手つきでミラとシーグを追い払った。

しばらくすると、壁越しにセレストが命令を放っているのが聞こ

えてきた。レンダは門番の役をしているようだ。

倉庫では2人分の朝食が待っていた。
レースのテーブルクロスに、銀の食器が並んでいた。間違いなく、昨日レンダの家で見た銀食器である。
パンやハムやサラダが所狭しと並べられた様子は、王侯貴族の食卓にも思えるほどだった。

「これってセレストが？」
「たぶん」
「事前に準備していたのかしら」

食器やパンはともかく、温かな湯気を放っている紅茶とスープが、たった今準備されたものである事を物語っている。
セレストが変装している時に、注意は全く払っていなかった。
シーグには、森の中で動物が忍足をしても聞き取る自信がある。
ミラはそのシーグよりも更に鋭敏な感覚を持っているのだ。
そんな2人に全く気づかれずに、一体どのようにしてセレストは準備を整えたのか。

魔術都市において、もっとも魔術的な体験をした2人はしばらくの間身動きが取れないでいた。

1章－45　友は遠く

＊

「暴動だと？」
「はい」

ガリウスの問いに新たな衛兵は事務的に答えた。以前の衛兵はもはやメティスのどこにもいないだろう。
メティスにおいて失敗とは追放と同義である。

「夜明け前より、城壁内部で小競り合いが起こっています。魔術師もかなりの数が混じっている様子」
「反乱ではないのか？」
「いえ、捕縛したものから得た情報によりますと、シージペリラスの討伐が目的とか」

ガリウスは舌打ちをした。予測してしかるべき事態だったからだ。
メティスの誇る魔術師をことごとく返り討ちにした戦士。
グラムファーレが死亡を確信し、公文書にて消滅を宣言したシージペリラス。
たった一日で、メティスの名声を地に落とした亡国の公子。
シーグを打ち滅ぼしたとなれば、大陸での名声は天を突く事だろう。栄達に歯止めをかけられた連中が動くのは、当然の事だった。

メティスにおけるヴァンガードは大陸中の注目を浴びる。闘技場にたどり着く前に、妨害されて脱落したものは少なくない。
あのシージペリラスを保護し、決闘場まで護送する位の事はやるべきだった。

こういう決闘前の露払いは、いつでもレンダが手抜かりなくやってくれた。敵同士になったいまでは、言っても意味の無い事だが。

「増援を出す必要はあるか？」

「すでに収束に向かっております。元々、代表者の矛盾した命令が味方同士の激突を招いたとか。すでに首脳部も抑えてあり、代表者も捕らえてあります。名はラスティー・クルツ」

ガリウスが神経質に眉を動かしたので、衛兵は報告を止めた。アイアンシールド卿の気の短さはメティスで知らないものが無いからだ。

「確か、参謀の候補者だったな」

「はい。レンダ・マイルズと伯爵号を競って、敗北したと聞いております」

嫌みなほどに事務的な報告だ。レンダとガリウスが古くからの馴染みだと知らぬものはメティスにはいないと言うのに。

「ラスティーはどうしている？」

「気を失っております。外傷は特になく、争った形跡が見当たらないのですが」

ガリウスは片眉を吊り上げた。衛兵はタイミングを合わせて言葉を止めた。

外傷もなく、意識不明の状態が続くとは普通の状態ではない。無傷で相手を気絶させるのはレンダの得意技である。接触状態から神経系を狂わせて、覚醒までの時間を操作する事も、意のままに操ることさえ出来るのだ。

通常の魔術師に不可能な事をレンダは可能とする。

「暴動の中心地はどこだ?」
「魔術工房の区画です。開発中なので、一般市民に被害は皆無です」
レンダはシージペリラスをかくまっている。
気絶して発見されたラスティー、一般市民を避けるようにして起こった暴動。
報告の至るところにレンダの姿が感じられる。
「現在、シージペリラスは行方不明。死亡したとも、城門の外に逃げたとも言われています」
「どうするべきだと思う?」
聞き返すと、衛兵は黙り込んでしまった。表情は動かないが目が落ち着きなく動いている。
「……指示を下されば、そのとおりに」
「では、暴動に参加したものを引き続き捕らえよ」
「了解しました」
衛兵は機械のように頭を下げると、規則正しい足音を残して去っていった。
命じられたことを実行するには向いているが、ただそれだけのようだ。
メティスでは人材が足りていないのだ。最も優れたもの意外をすべて切り捨ててきたのだから当然ともいえるだろう。
魔術がどれほど偉大であろうとも。いや、それ以前に個人がどれほど優れていようと、一人では何も出来ないのだ。ガリウスはその事を身をもって知っている。

レンダには、セレストやライナを始めとして優秀な人材が集まっていた。
彼らが傍らにいた時には、体が軽やかで脅威など全く感じなかったものだ。
だから、今のシーグには何の妨害も意味はない。翼が生えた鳥のように、いとも簡単にアクリアエ・スリスにたどり着く事だろう。

負けるわけにはいかない。ガリウスは拳を握り締めた。
サフィリアを破滅の道から救い、グラムファーレを存続させるためにはいかなる手段を使ってでも勝たねば意味が無いのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8992m/

神速果断のシャープネス（新）

2012年1月4日11時50分発行